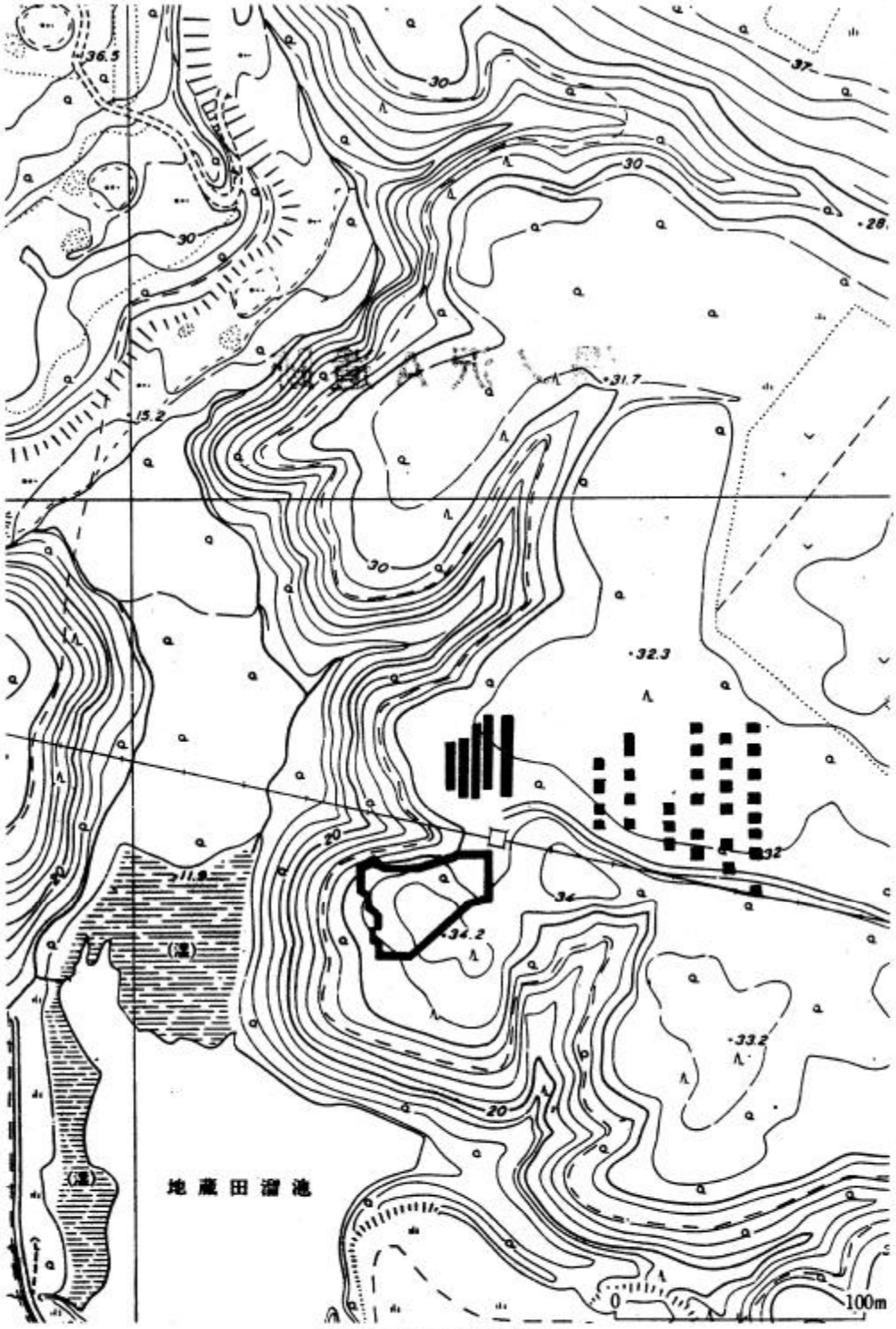
遺構外出土石器

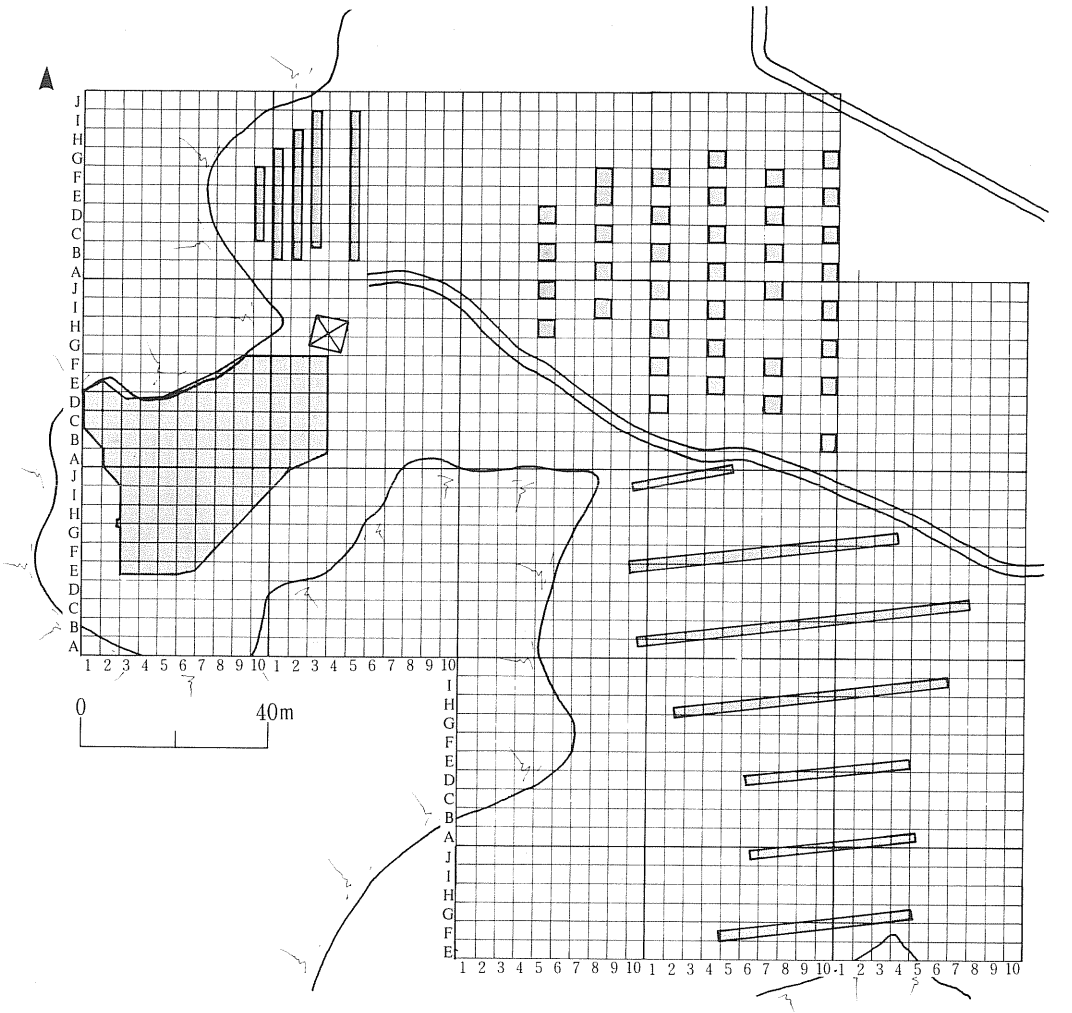
石　製　品

図版76

湯ノ沢A遺跡



第1図　遺跡周辺の地形図



第２図　グリッド配置図

遺跡の概観

末戸松本集落の北側に面した標高33～34m の舌状台地上の西端に位置している。検出された遺構は、縄文時代中期の住居跡１軒、土坑４基、弥生時代中期の住居跡２軒、土坑３基等である。

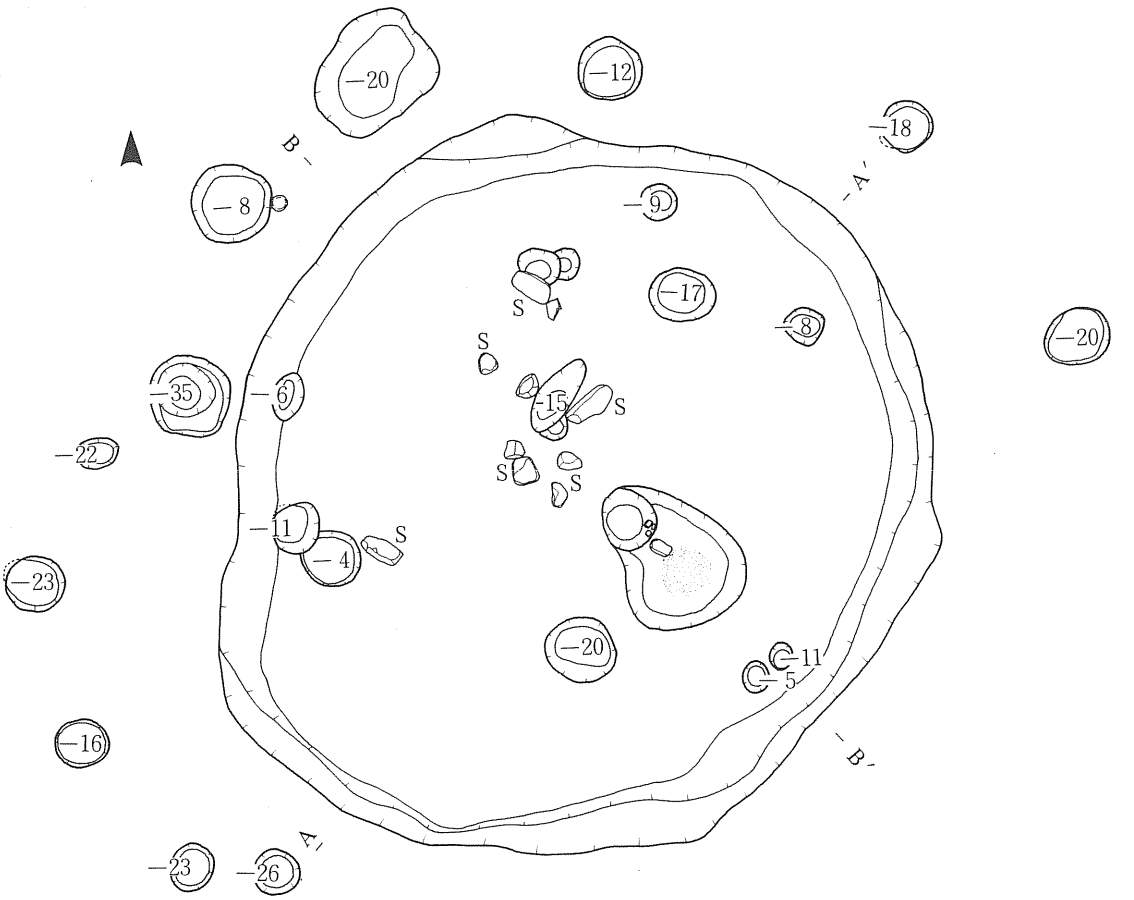
縄文時代中期の遺跡は東方450m に湯ノ沢Ｂ遺跡、北東約750m に野畑遺跡がある。

遺構と遺物

１号住居跡（第３図）

調査区の北側に位置する。

フランは長軸3.95m 、短軸3.65m の楕円形を呈し、確認面から床面までの深さは44cmで、壁は北東側を除き、ややゆるやかに立ち上がる。ピットはいずれも比較的浅く、柱穴ははっきりしない。炉は南東部に位置し、楕円形の掘り込みと土器埋設部が検出された。また掘り込み内には焼土が検出された。床はほぼ平坦である。


A
A′
30.20m
B
B′
30.10m
第1層　暗黄褐色土
第2層　暗褐色土
第3層　暗褐色土(炭化物混入)
第4層　褐色土(炭化物混入)
第5層　暗茶褐色土
第6層　茶褐色土
第7層　暗褐色土(炭化物多く混入)
第8層　暗褐色土(黄褐色土混入)
第9層　黒褐色土
第10層　茶褐色土(黒色土混入)
第11層　暗褐色土(炭化物・焼土混入)
第12層　黒色土(黄色粘土ブロック混入)
第13層　黒褐色土(炭化物・焼土混入)
第14層　褐色土(炭化物混入)
第15層　暗茶褐色土(黄色粘土ブロック混入)
第16層　黄茶褐色土(炭化物混入)
第17層　暗褐色土(炭化物・焼土混入)
第18層　暗茶褐色土(炭化物・焼土混入)
0
1 m

第３図　１号住居跡

出土遺物

土器（第12図１、第15図15～26）

15・16は沈線と磨り消し手法を用いて文様帯を展開する土器である。17～19、21～24は沈線および刺突文によって文様帯を展開させている。１は地文がＲＬ単節斜縄文（縦位回転）である。

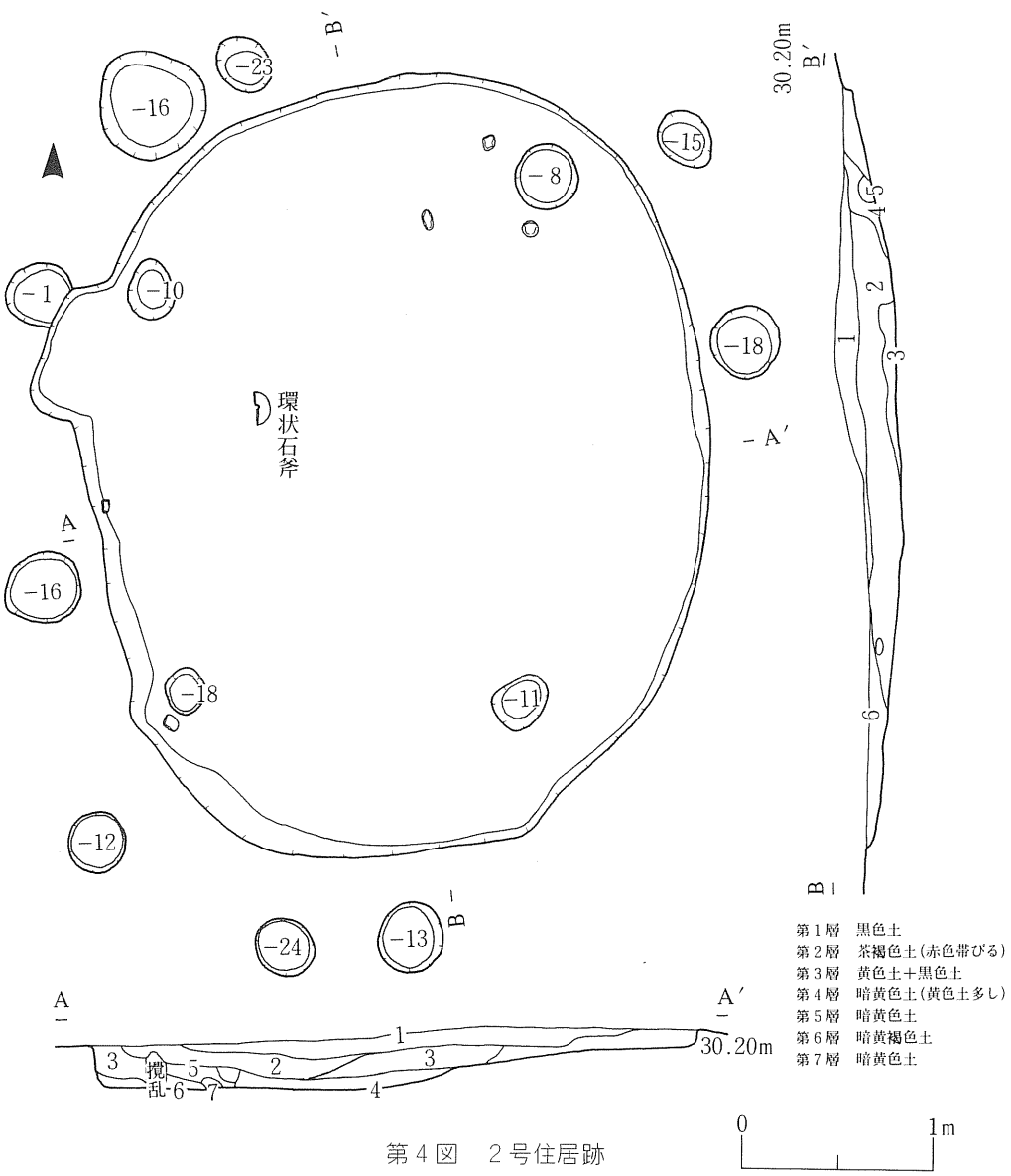
石器（第18図１・２）

１は無茎の石鏃で、石質は頁岩である。２は削器で側縁部に連続的な調整を施す。頁岩。

土製品（第15図27～34）

再利用土製品（円盤状土製品）である。

２号住居跡（第４図）



第４図　２号住居跡

調査区の西端に位置する。

プランは長軸4.15m 短軸3.35m の楕円形を呈する。確認面から床面までの深さは24cmで、壁はゆるやかな立ち上がりを示す。ピットはいずれも浅く柱穴ははっきりしない。床面は東側にゆるやかに傾斜する。

出土遺物

土器（第15図35～38）

35、36は外面に四条一組の沈線を施文し、文様帯を展開する。また内面には二条の沈線が施されている。37は口縁部を形成している。

石器（第18図３）

３は環状石斧である。外径15.7cm、厚さ1.2cm、中央孔径2.4cmを計る。中央孔付近には木柄(棒)の装着材として使用されたと考えられる付着物が認められる。

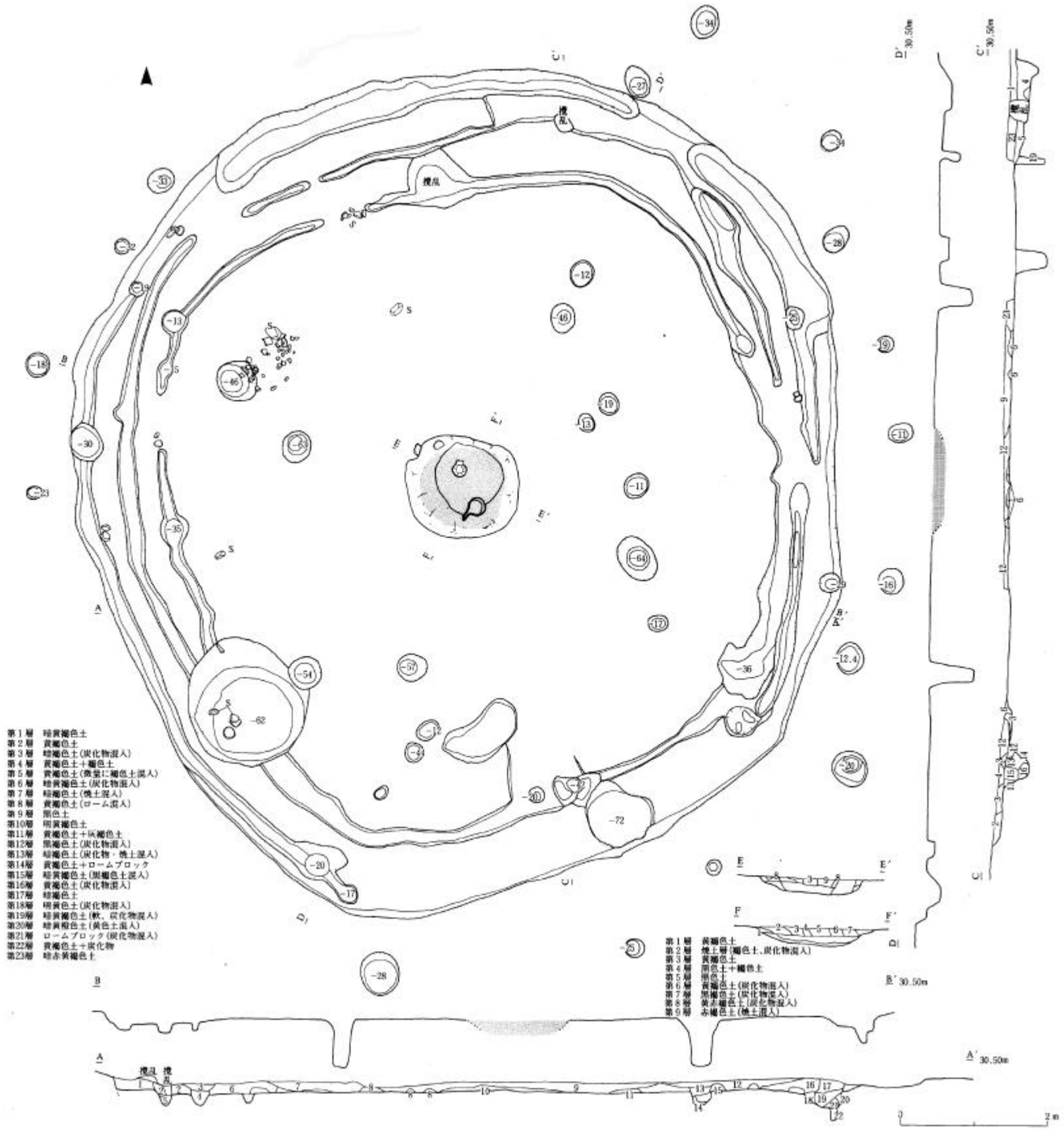
３号住居跡（第５図）

調査区の西端２号住居跡の南東部に位置する。長軸11.6m 、短軸10.7m の南北にやや長い円形を呈し、床面積は94.5㎡である。壁は高さ10～15cmを計り、ほぼ垂直に立ち上がる。南東側を除き、幅10～40cm、深さ10～45cmの周溝が３条確認された。住居跡中央部に不整楕円形を呈する炉が検出された。この炉には焼土、炭化物等が褐色土に混入して堆積している。炉内および周辺にこぶし大の大きさの礫が確認されたが熱を受けた痕跡はない。炉内からは土器片が出土している。主柱穴は深さ45cm以上のもので炉に近い４本と考えられる。床面は全体として平坦である。この住居跡の南東部から２号土坑さらに南側から３号土坑が検出された。２号土坑は、３号住居跡精査中に土坑の覆土上を周溝が走ること、さらに周溝覆土内には炭化物が含まれておらず、土坑覆土には炭化物が含まれることなどから、この住居跡よりも古いと考えられる。一方３号土坑は南側の周溝を切ることにより、新しいものと考えられる。

出土遺物

土器（第12図２～５、第16図39～46）

２は覆土、３は床面、４～５は炉内、他は覆土からの出土である。２は高坏形土器で口径25cmで脚部は欠損している。平坦口縁で肩部で強く内湾している。肩部から体部下半にかけてはＬＲ単節斜縄文（縦位回転）を施文後、一部を残しきれいに磨き、変形工字文を施している。一方内面には１条の沈線が施されている。３は鉢形土器で体部全体にＲＬ単節斜縄文（縦位回転）を施文後、口縁部に４条の沈線を施している。内面に１条の沈線が施されている。４は頸部に２条の沈線が施されている。５は体部下半が横方向のミガキによって整形している。いずれも甕と考えられる。39・40は変形字文の施された高坏形土器、45・46はＲＬ単節斜縄文（縦位方向）を施文している鉢形土器。42は口縁部が「く」の字状を呈する壺形土器、43・44は口縁部がゆるやかな「く」の字を呈する甕形土器と考えられる。

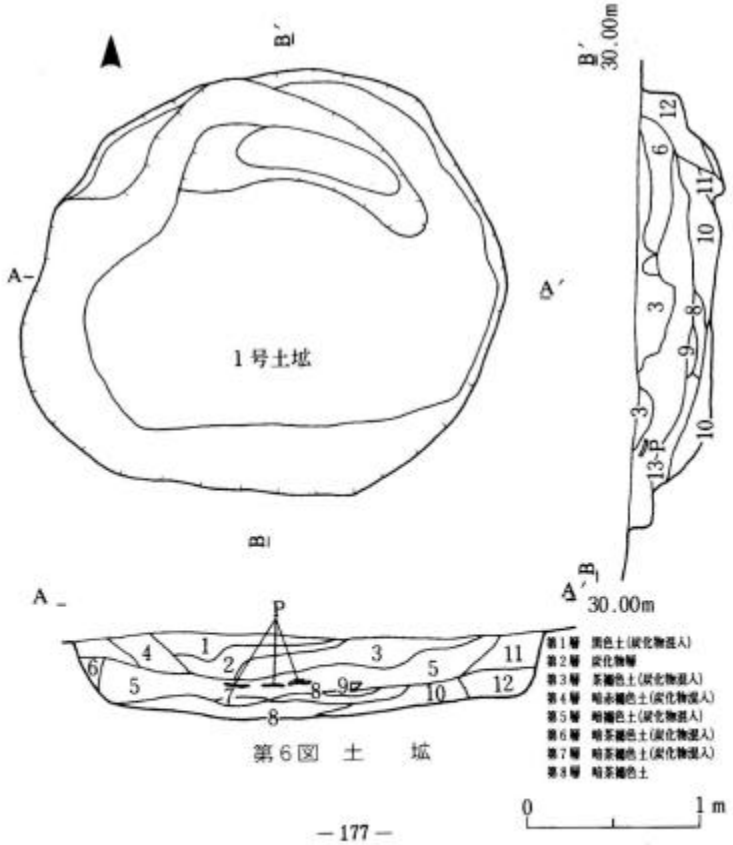

第1層　暗黄褐色土
第2層　黄褐色土
第3層　暗褐色土(炭化物混入)
第4層　黄褐色土＋褐色土
第5層　黄褐色土(微量に褐色土混入)
第6層　暗黄褐色土(炭化物混入)
第7層　暗褐色土(焼土混入)
第8層　黄褐色土(ローム混入)
第9層　黒色土
第10層　明黄褐色土
第11層　黄褐色土＋灰褐色土
第12層　黒褐色土(炭化物混入)
第13層　暗褐色土(炭化物・焼土混入)
第14層　黄褐色土＋ロームブロック
第15層　暗黄褐色土(黒褐色土混入)
第16層　黄褐色土(炭化物混入)
第17層　暗褐色土
第18層　明黄色土(炭化物混入)
第19層　暗黄褐色土(軟、炭化物混入)
第20層　暗黄橙色土(黄色土混入)
第21層　ロームブロック(炭化物混入)
第22層　黄褐色土＋炭化物
第23層　暗赤黄褐色土
第1層　黄褐色土
第2層　焼土層(褐色土、炭化物混入)
第3層　黄褐色土
第4層　黒色土＋褐色土
第5層　黒色土
第6層　黄褐色土(炭化物混入)
第7層　黒褐色土(炭化物混入)
第8層　黄赤褐色土(炭化物混入)
第9層　赤褐色土(焼土混入)
B' 30.50m
A' 30.50m
D' 30.50m
C' 30.50m
0
2m

石器（第18図４～13）

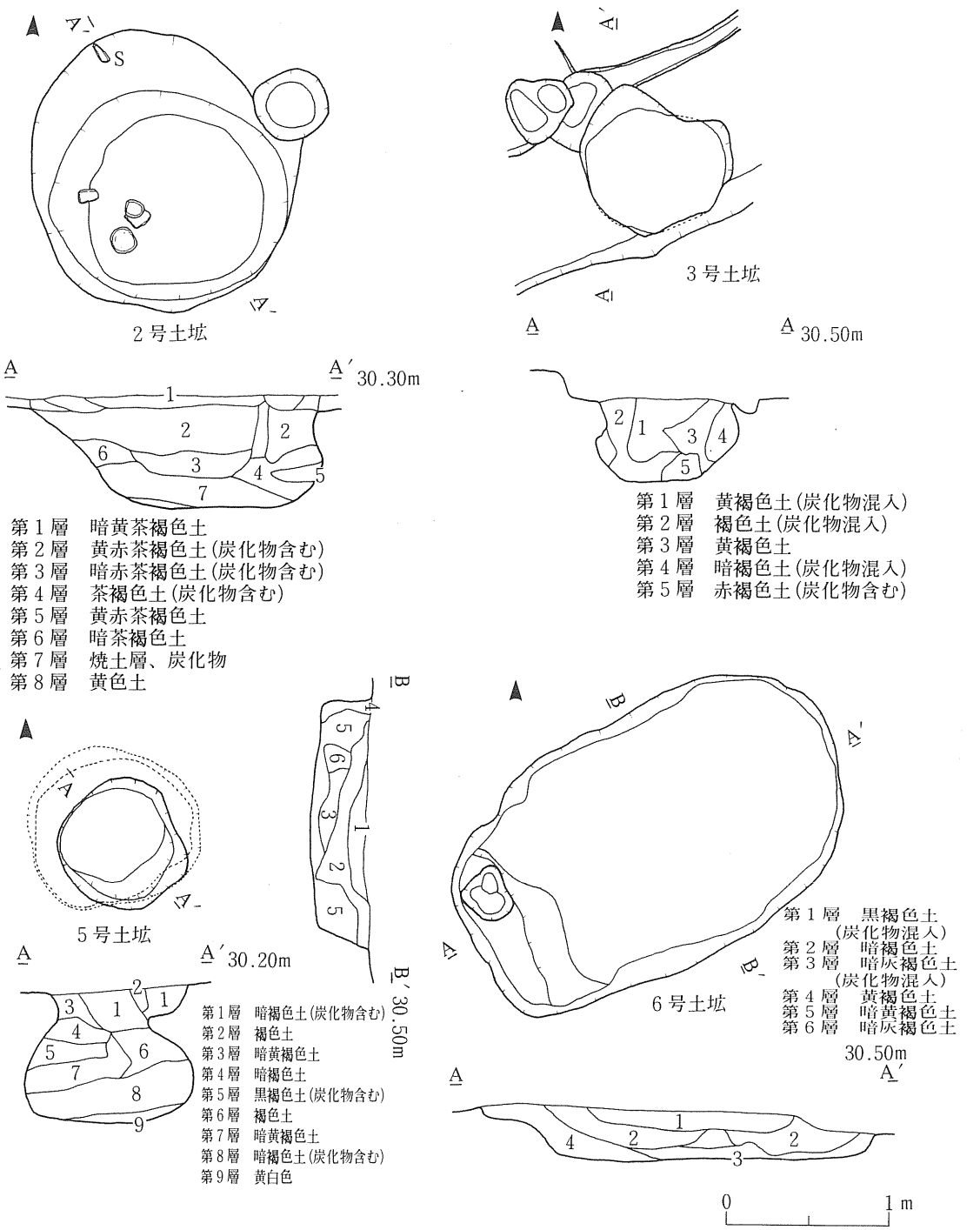
４～６は有茎の石鏃で、いずれも頁岩である。７・８は槍先状石器、９は横型石匙で、つまみの部分にはタールが付着している。10は石錐。12はヘラ状石器である。11・13は磨製石斧で13は扁平片刃磨製石斧で、柄部を欠損している。断面形の特徴は、刃部がノミ形を呈することである。

土坑一覧表

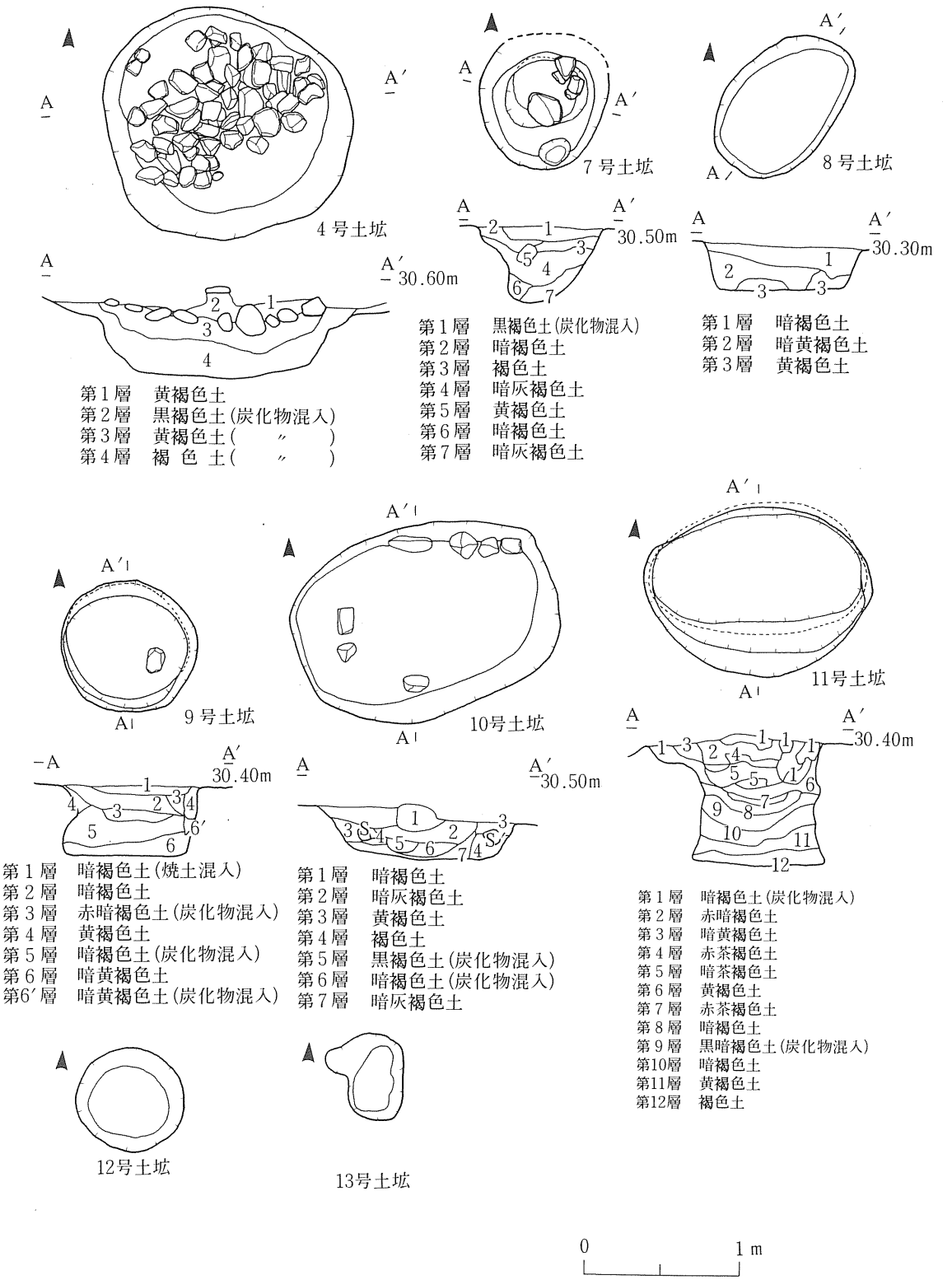
土坑番号	規模（cm）			平面形	断面形	出土遺物
	長軸	短軸	深さ			
1	275	240	48	楕円形	鍋底状	第12図６、第16図47～50（縄文時代中期末）
2	174	150	67	楕円形	鍋底状	第12図７、第19図16（縄文時代）
3	90	88	50	不整形	袋状	
4	165	150	42	楕円形	鍋底状	第16図51、第19図17、18（弥生時代）
5	104	102	81	不整形	袋状	
6	253	154	34	楕円形	鍋底状	第19図19
7	87	80	49	楕円形	U状	第16図52（弥生時代）
8	100	68	28	楕円形	鍋底状	
9	90	89	45	円形	袋状	第16図53（縄文時代中期）
10	170	123	34	楕円形	鍋底状	第19図20
11	147	110	82	楕円形	ピーカー状	第12図8、第16図53、54、第17図56～62（縄文時代中期～後期）
12	70	67	20	円形	鍋底状	第12図９（弥生時代）
13	55	35	41	不整形	不明	第17図71



第６図　土　坑


2号土坑
A
A′ 30.30m
第1層　暗黄茶褐色土
第2層　黄赤茶褐色土(炭化物含む)
第3層　暗赤茶褐色土(炭化物含む)
第4層　茶褐色土(炭化物含む)
第5層　黄赤茶褐色土
第6層　暗茶褐色土
第7層　焼土層、炭化物
第8層　黄色土
3号土坑
A
A 30.50m
第1層　黄褐色土(炭化物混入)
第2層　褐色土(炭化物混入)
第3層　黄褐色土
第4層　暗褐色土(炭化物混入)
第5層　赤褐色土(炭化物含む)
5号土坑
A
A′ 30.20m
B
B′ 30.50m
第1層　暗褐色土(炭化物含む)
第2層　褐色土
第3層　暗黄褐色土
第4層　暗褐色土
第5層　黒褐色土(炭化物含む)
第6層　褐色土
第7層　暗黄褐色土
第8層　暗褐色土(炭化物含む)
第9層　黄白色
6号土坑
第1層　黒褐色土(炭化物混入)
第2層　暗褐色土
第3層　暗灰褐色土(炭化物混入)
第4層　黄褐色土
第5層　暗黄褐色土
第6層　暗灰褐色土
30.50m
A
A′
0
1m

第7図　土　　坑

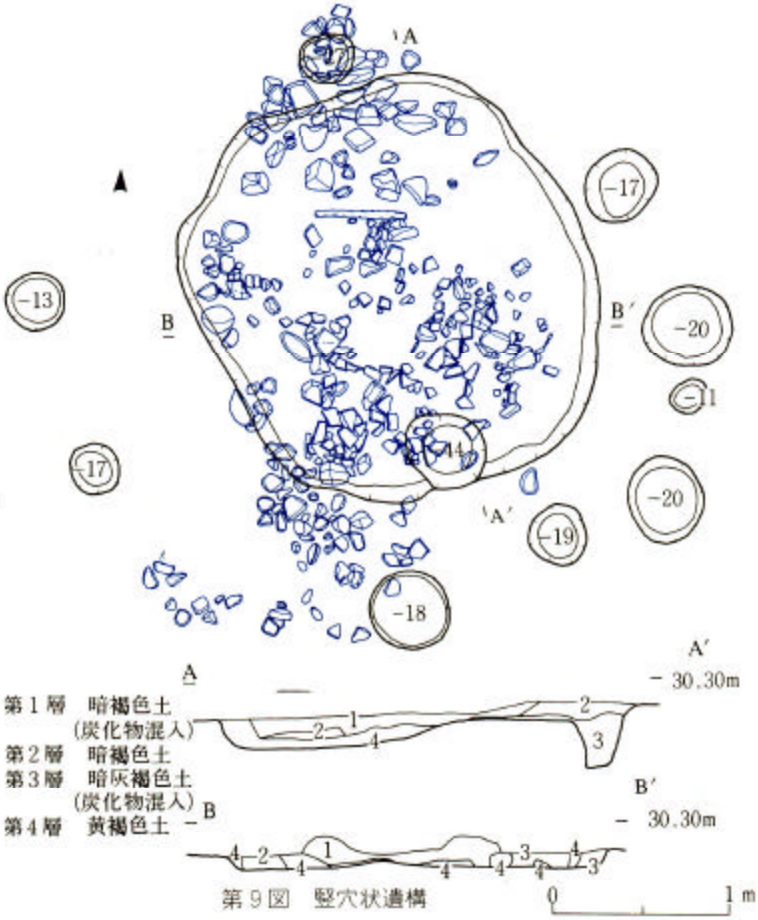

4 号土坑
A
A′
30.60m
第1層　黄褐色土
第2層　黒褐色土(炭化物混入)
第3層　黄褐色土(　〃　)
第4層　褐 色 土(　〃　)
7 号土坑
30.50m
第1層　黒褐色土(炭化物混入)
第2層　暗褐色土
第3層　褐色土
第4層　暗灰褐色土
第5層　黄褐色土
第6層　暗褐色土
第7層　暗灰褐色土
8 号土坑
30.30m
第1層　暗褐色土
第2層　暗黄褐色土
第3層　黄褐色土
9 号土坑
10号土坑
11号土坑
30.40m
第1層　暗褐色土(焼土混入)
第2層　暗褐色土
第3層　赤暗褐色土(炭化物混入)
第4層　黄褐色土
第5層　暗褐色土(炭化物混入)
第6層　暗黄褐色土
第6′層　暗黄褐色土(炭化物混入)
30.50m
第1層　暗褐色土
第2層　暗灰褐色土
第3層　黄褐色土
第4層　褐色土
第5層　黒褐色土(炭化物混入)
第6層　暗褐色土(炭化物混入)
第7層　暗灰褐色土
30.40m
第1層　暗褐色土(炭化物混入)
第2層　赤暗褐色土
第3層　暗黄褐色土
第4層　赤茶褐色土
第5層　暗茶褐色土
第6層　黄褐色土
第7層　赤茶褐色土
第8層　暗褐色土
第9層　黒暗褐色土(炭化物混入)
第10層　暗褐色土
第11層　黄褐色土
第12層　褐色土
12号土坑
13号土坑
0
1 m

第8図　土　　坑

竪穴状遺構（第９図）

調査区のほぼ中央部に位置する。

プランは長軸2.35m、短軸2.16mの楕円形を呈し、確認面から底面までの深さは７～15cmを計る。壁は底部よりややゆるやかに立ち上がる。覆土は褐色系の土で若干の炭化物を含んで堆積している。この覆土よりも上層から多数の礫、土器片、また石棒等が出土している。ピットは外側に数個確認された。



第９図　竪穴状遺構

出土遺物

土器（第13図、第17図63～67）

63・64は広口甕口縁部で、いずれも波状口縁をなし、頸部には刷毛目が残っている。地文はいずれもＲＬ単節斜縄文（縦位回転）である。65～67は平行沈線を主体として文様を展開する鉢形土器である。大型の壺には、横位および縦位の３条の沈線によって、文様帯が４分割されている。なお沈線間および体部の一部には、ベンガラが塗られている。

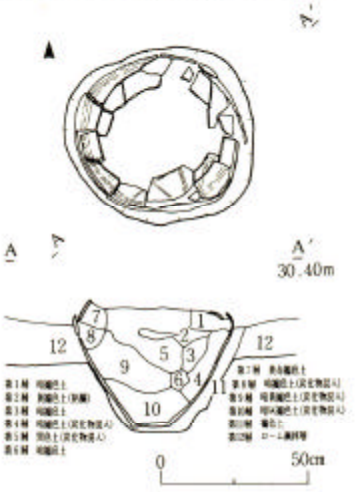
石器（第18図14・15、第19図21・22）

14・15は石鏃。15は有茎石鏃である。いずれも頁岩である。21はくぼみ石、22は石棒で、計測値は現存部で長さ55cm、幅4.55cm、厚さ4.93cmである。断面形は楕円形を呈する。

土器埋設遺構（第10図、第14図10）

調査区の南西部、４号土坑の北側で検出された。

掘り方は、長軸1.28m、短軸1.18mの東西にやや長い円形でローム層を擂鉢状に約70cm掘り下げている。掘り方の底部より



第10図　土器埋設遺構

2㎝上方に、壺形土器を据えている。壺形土器は、口径推定25㎝、胴部最大径55㎝、底径13.4㎝、器高59.2㎝を計る。

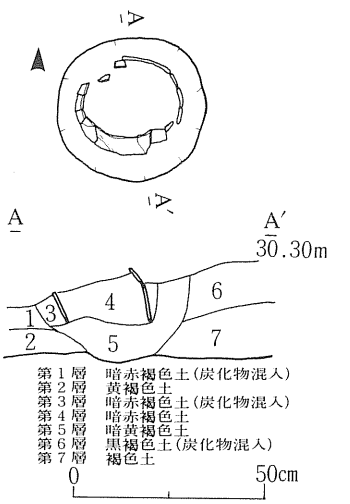
文様帯は、頸部および肩部（体部上半）に3条の浅い沈線を横位に施し、この両方を同じく3条の縦位の沈線によって5単位に区画している。この区画内の対角を2条の沈線によってX字状に分割し、その内部に縄文を施している。さらに口唇部の外面に2条、内面に1条の沈線を施している。

土器埋設遺構（第11図、第14図11）

調査区のほぼ中央部、竪穴状遺構の西側に位置する。

掘り方は、長軸39㎝、短軸38㎝のほぼ円形を呈し、擂鉢状になっている。深さは21㎝を計り、底部より10㎝ほど上方に、体部下半を打ち欠いた土器が斜位に据えられている。

土器は、単軸絡条体による施文後に沈線によって区画し、文様帯を展開させている。



第11図　土器埋設遺構

遺構外出土遺物

遺構外出土の土器を施文様から次のように分類した。

1群土器

1類（第21図82～84）

横位ないし波状に押圧縄文が施される。粘土紐による隆帯が押圧縄文によって縁どられているものもある。

2類（第21図85～87）

やや外反し、肥厚する深鉢形土器で、口縁部に幅広い磨り消しによる無文部があり、そこに刺突の行なわれるものもある。

3類（第21図88）

沈線で文様帯を区画し、間に刻目を施文しているものである。

2群土器

1類（第21図89・90・92）

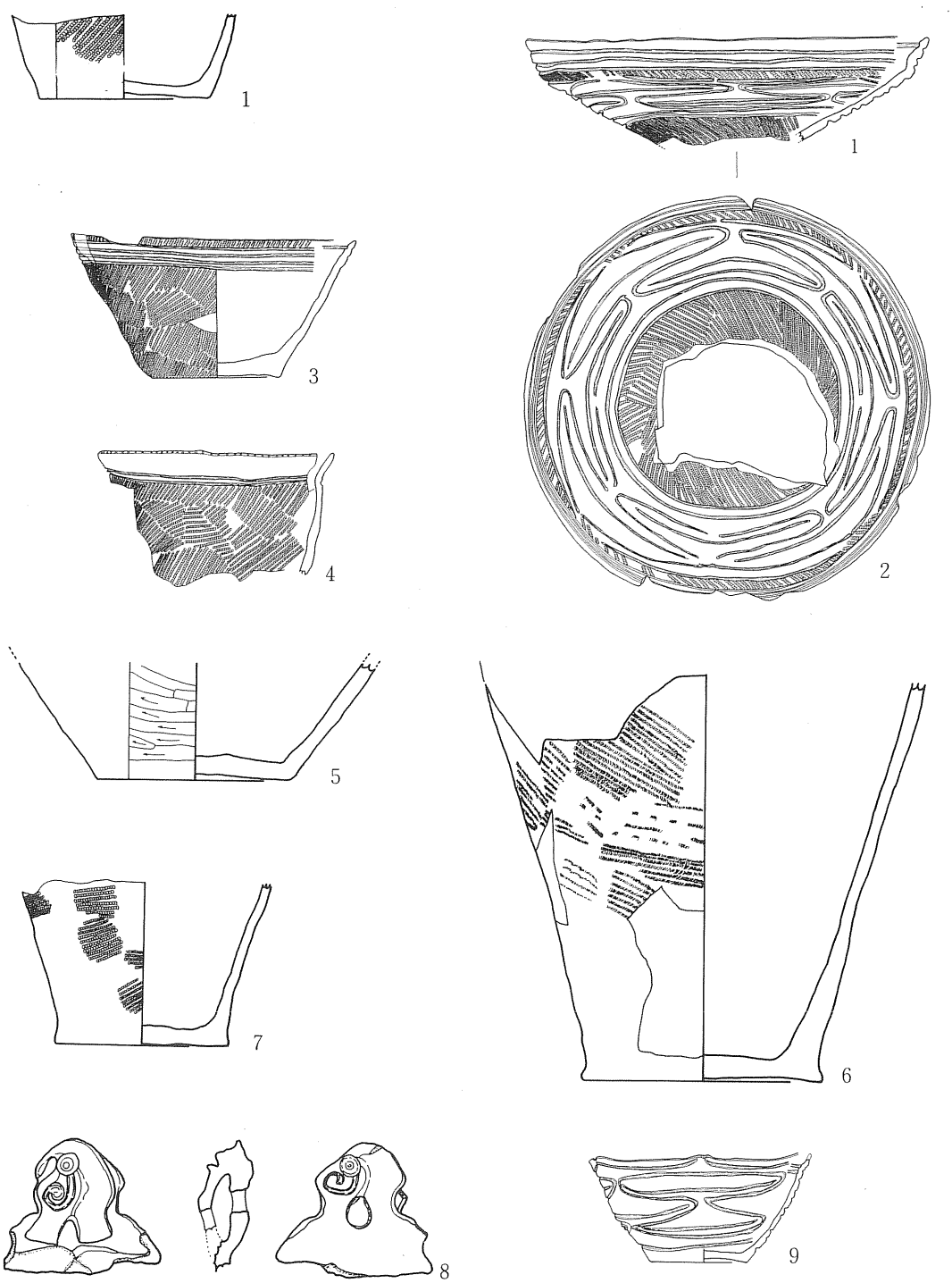
地文に縄文が施されるものである。

2類（第21図91・93・96～103）

浅い沈線によって施文されているものである。曲線的なもの、直線的なものの他に、刺突されるものなどがある。

3類（第21図94・95・104）

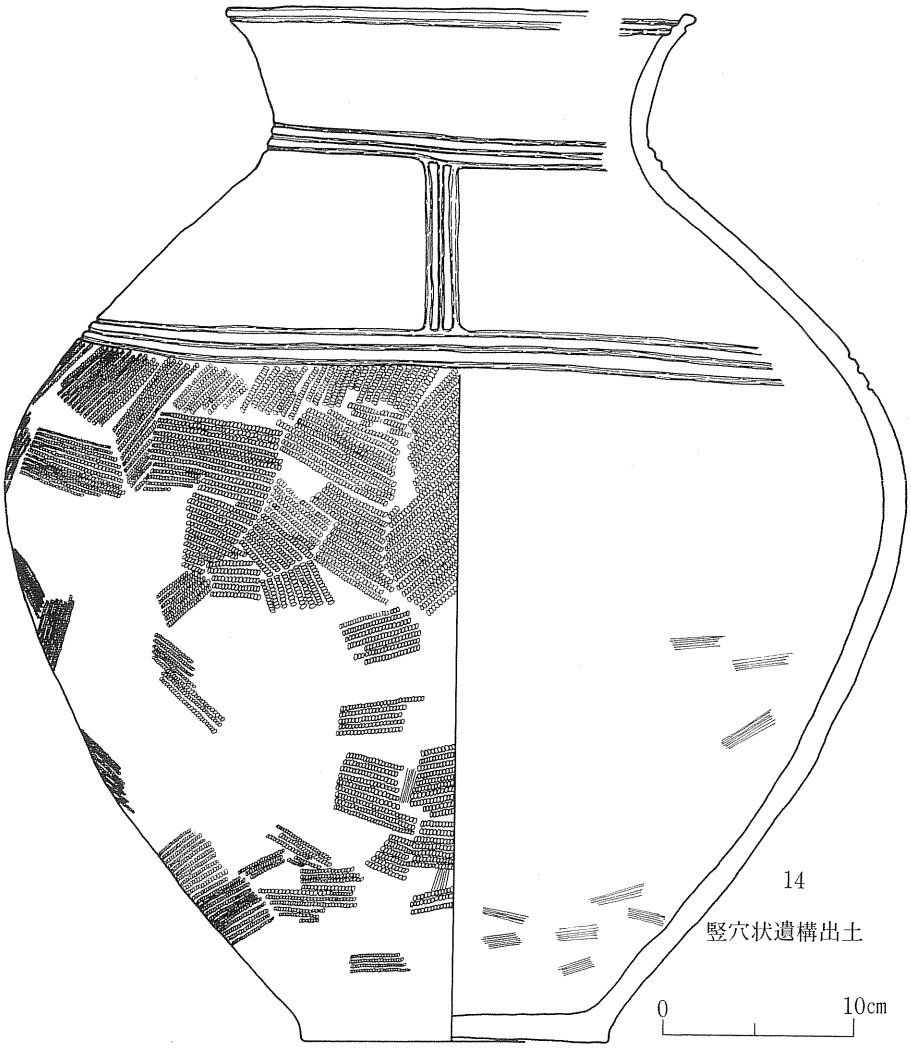
網目状撚糸文の施されるものである。104のように、やや太い粘土紐を弧状に貼り付けた後、刺突を施しているものもある。



1　　1号住居跡
2～5　3号住居跡
6　　1号土坑
7　　2号土坑
8　　11号土坑
9　　12号土坑

0　10cm

第12図　遺構内出土土器



第13図　遺構内出土土器

3群土器

1類（第21図105～107、第22図108～115）

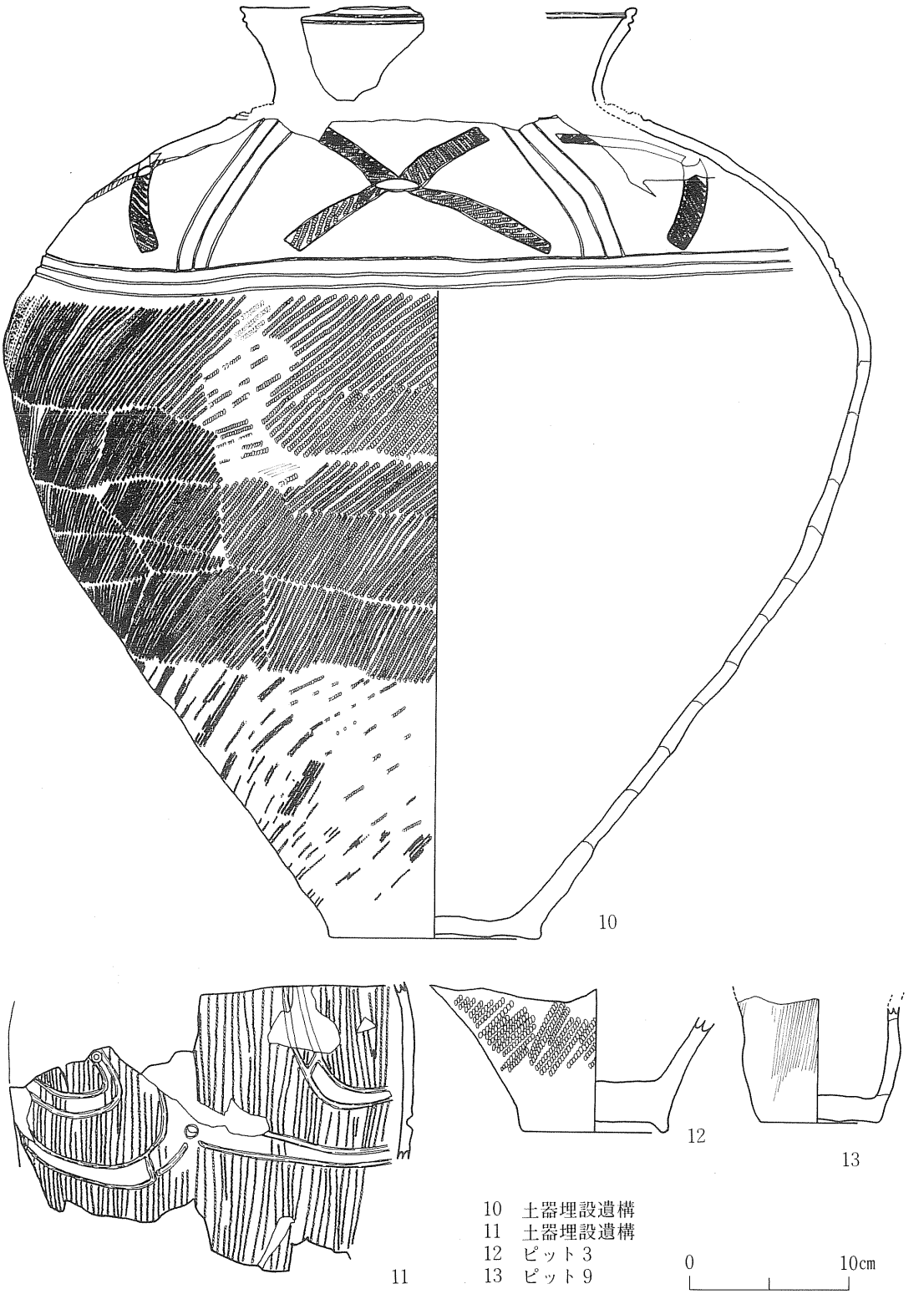
頸部がくびれ「く」の字状を呈する広口甕で、口縁部から頸部にかけて無文帯のもので、口唇部に縄文がみられるもの、頸部に横位の刷毛目のみられるものなどがある。

2類（第20図75、第22図116～127・134、第23図135・137）

頸部に2～3条の平行沈線の施される鉢形土器、甕形土器である。沈線間に連続山形文の施されるもの、波状口縁に沿って沈線が施されるものなどがある。

3類（第20図72・76、第22図129～133、第23図138～146）

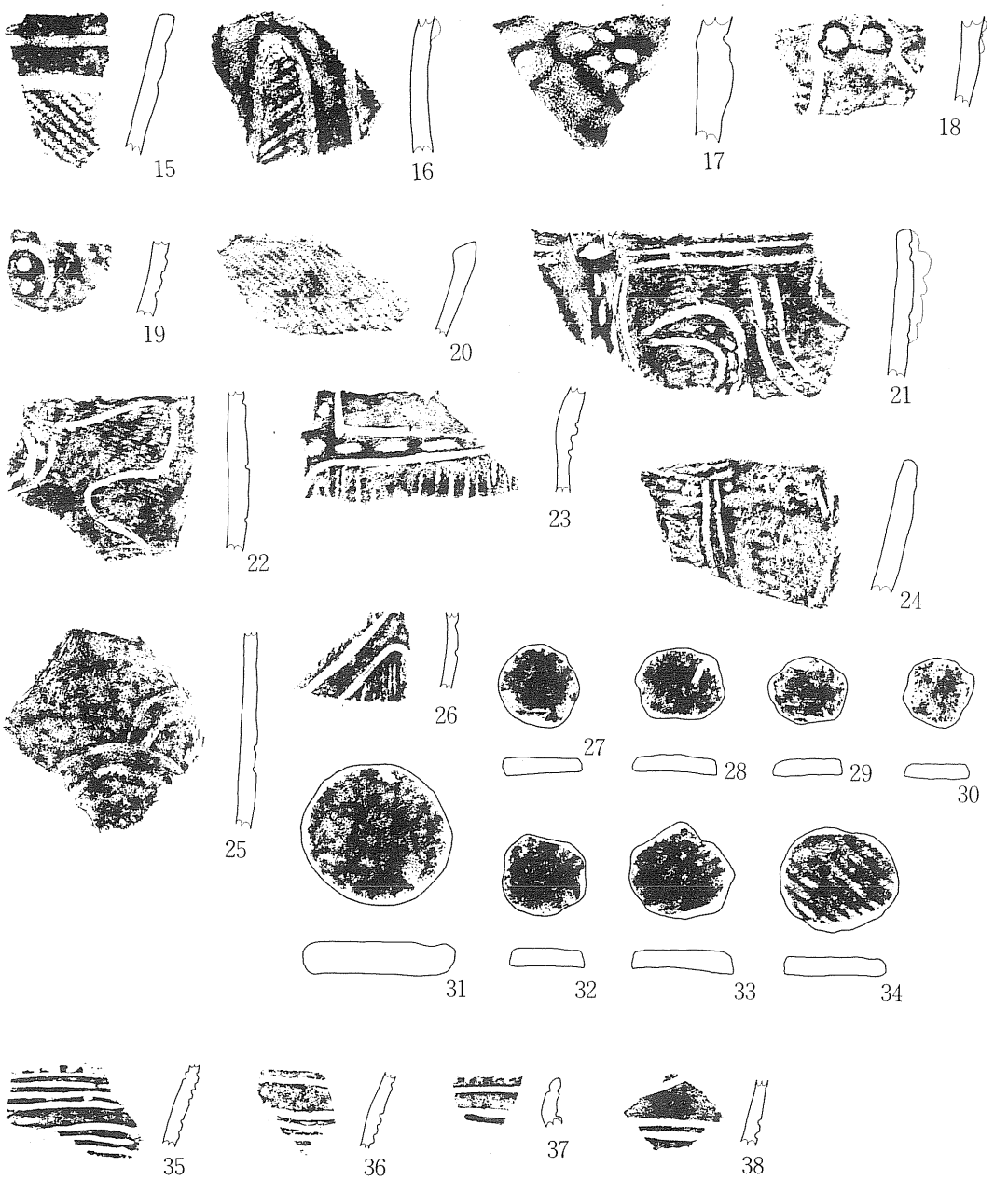
変形工字文が施文されている、鉢形土器、浅鉢形土器、高坏形土器である。いずれも器面はきれいに磨かれている。146は連続山形文が描かれている。



第14図　遺構内出土土器

4類（第20図73・77・78）

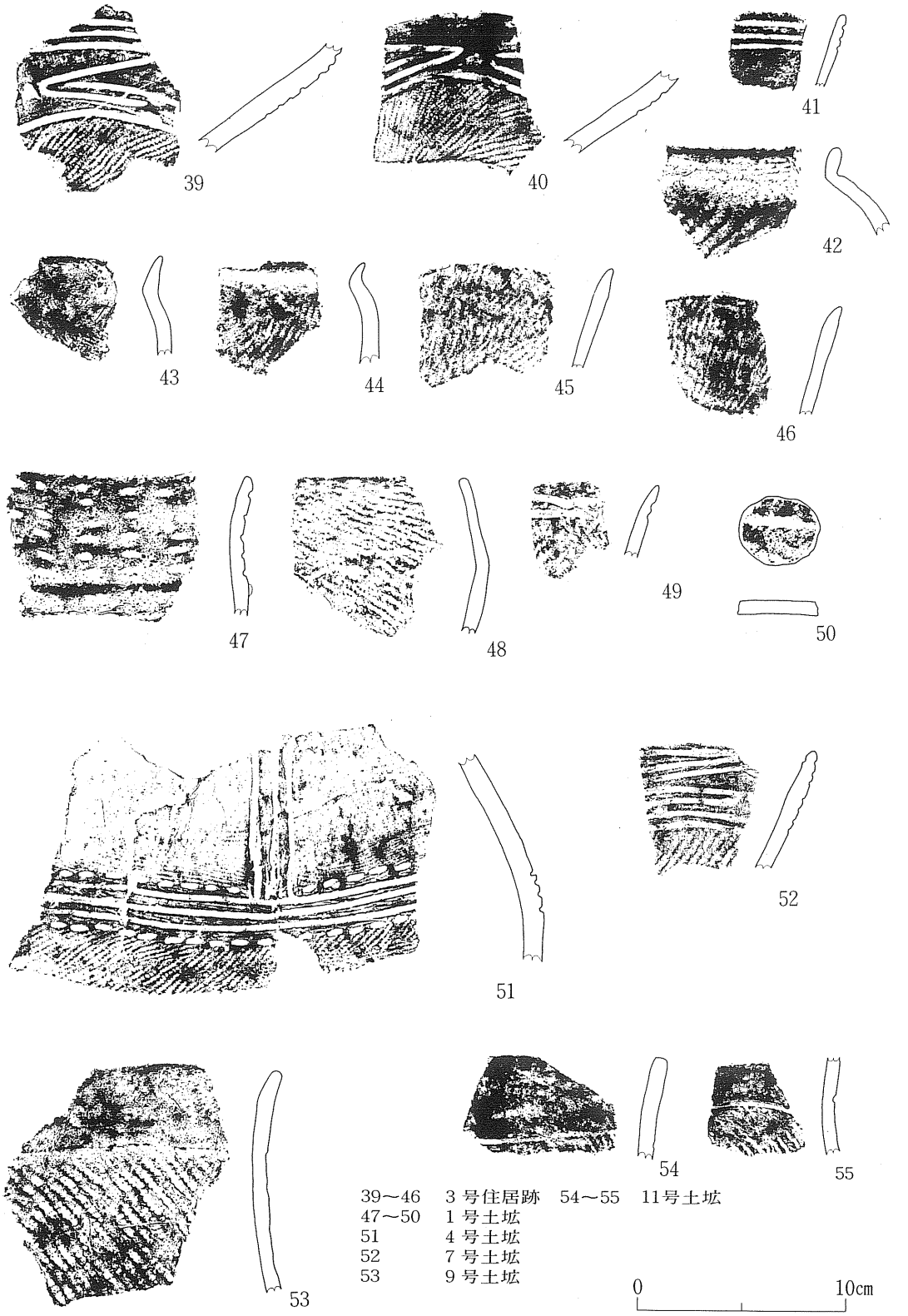
２ないし３条の沈線が施されている蓋形土器で、沈線は２段以上めぐると考えられる。



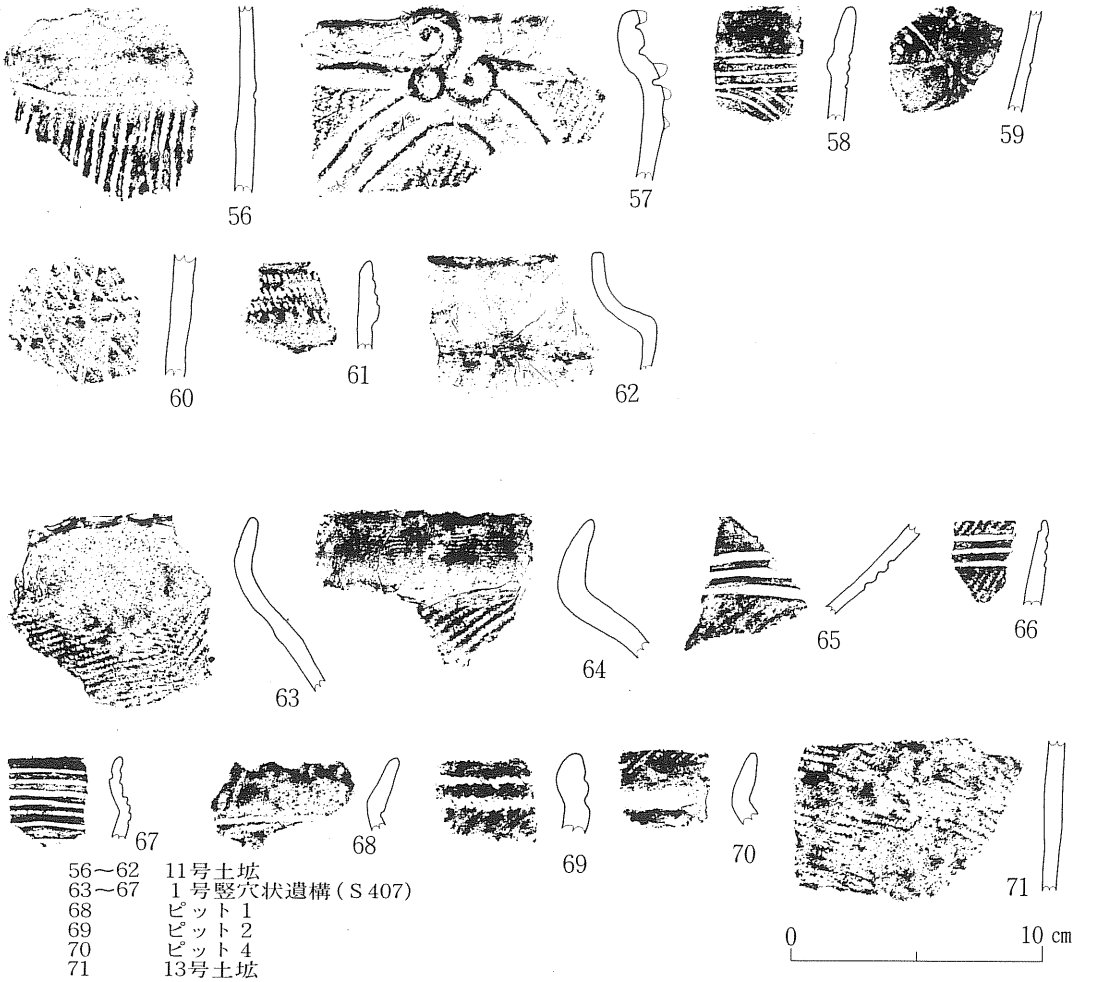
15～34　１号住居跡
35～38　２号住居跡

0　10cm

第15図　遺構内出土土器・土製品



第16図　遺構内出土土器



56～62　11号土坑
63～67　1号竪穴状遺構（S 407）
68　ピット1
69　ピット2
70　ピット4
71　13号土坑

第17図　遺構内出土土器

土製品（第23図150～155）

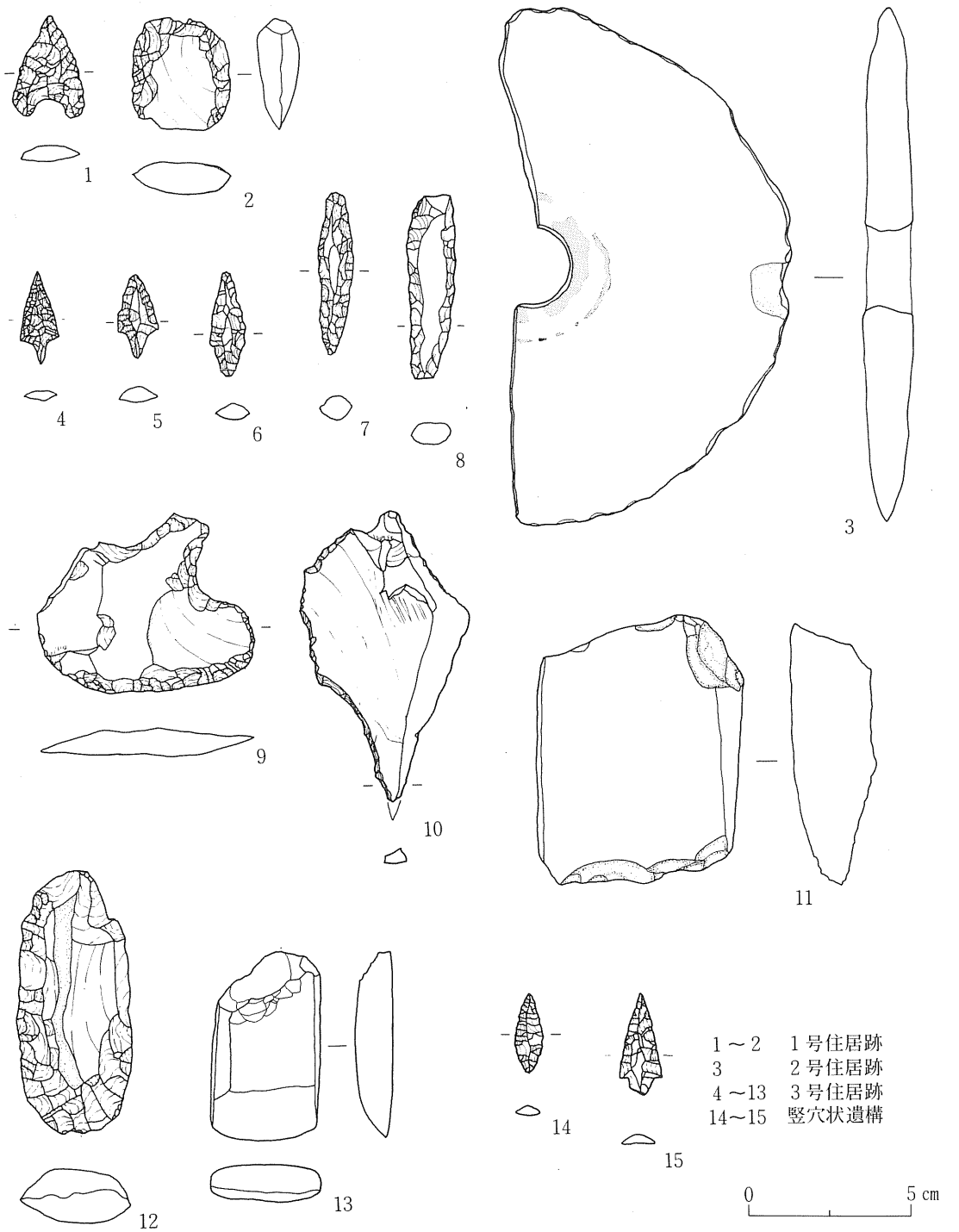
150～154は再利用土製品（円盤状土製品）。155は土偶状の土製品である。

石器（第24図23～33、第25図35～43）

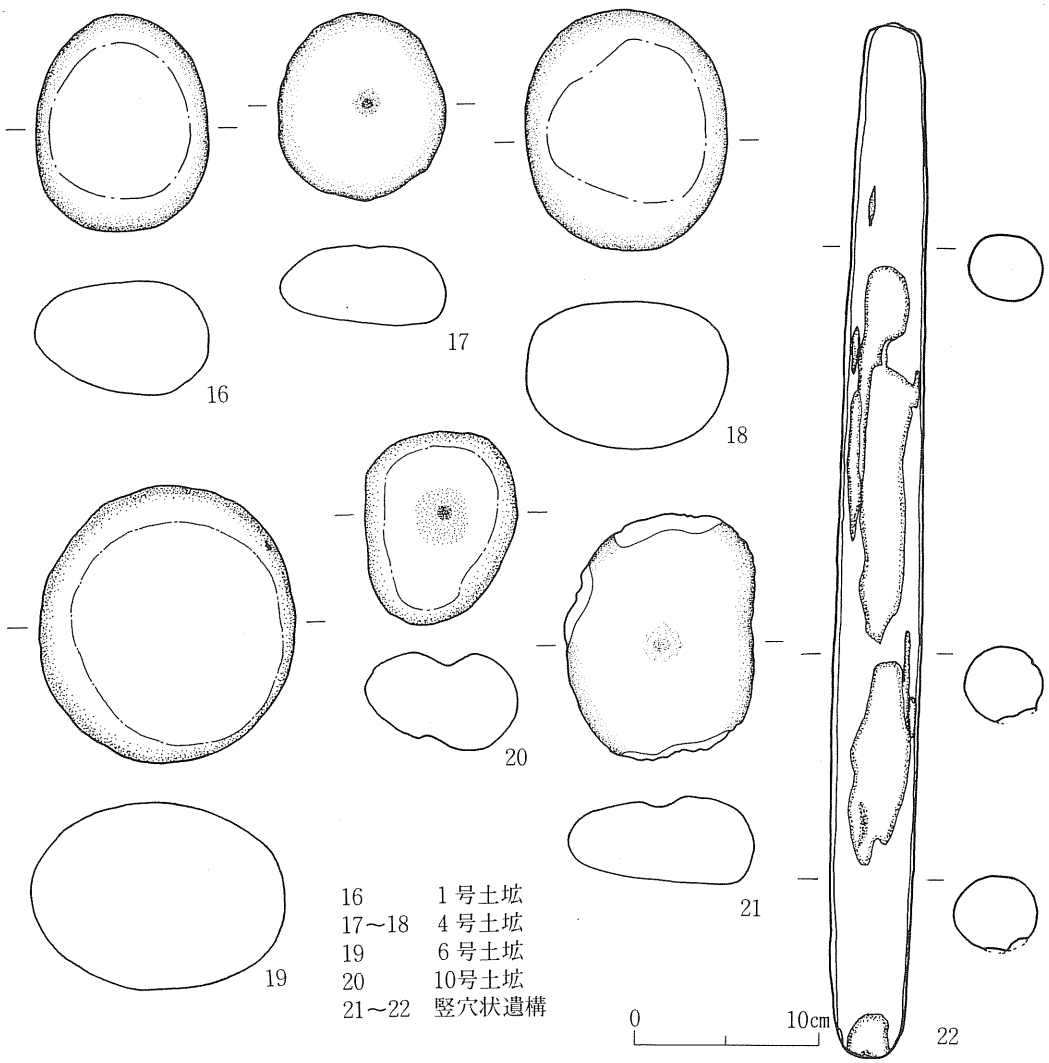
23～25はヘラ状石器で、いずれも頁岩である。26～28は剝片の側縁に連続的な調整を施した削器状石器である。29は掻器状石器で頁岩である。30～33は磨製石斧。35～39は磨石。40、41はくぼみ石。42・43は石棒である。

籾圧痕土器（第20図73）

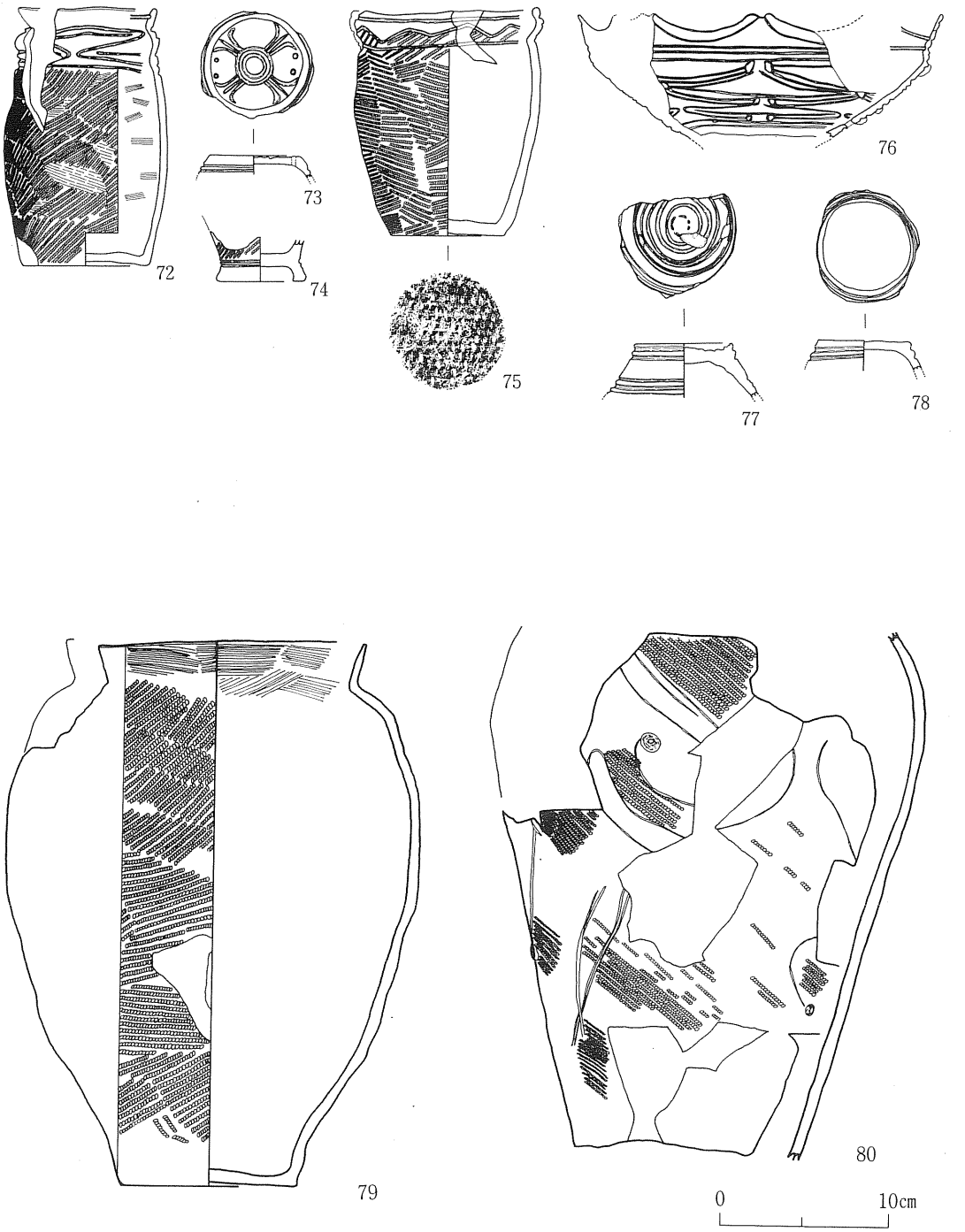
蓋形土器で、体部に平行沈線が巡り、上面には同心円状に2条とX状に3条の沈線が施され、2個1対の焼成前穿孔が2対認められる。器面内部に長径6.3mm、短径3.4mmの丸味を帯びた短粒米の籾痕が観察された。籾痕は、土器製作の過程で粘土に混入した稲籾が、土器焼成後に炭化離脱したものと考えられる。



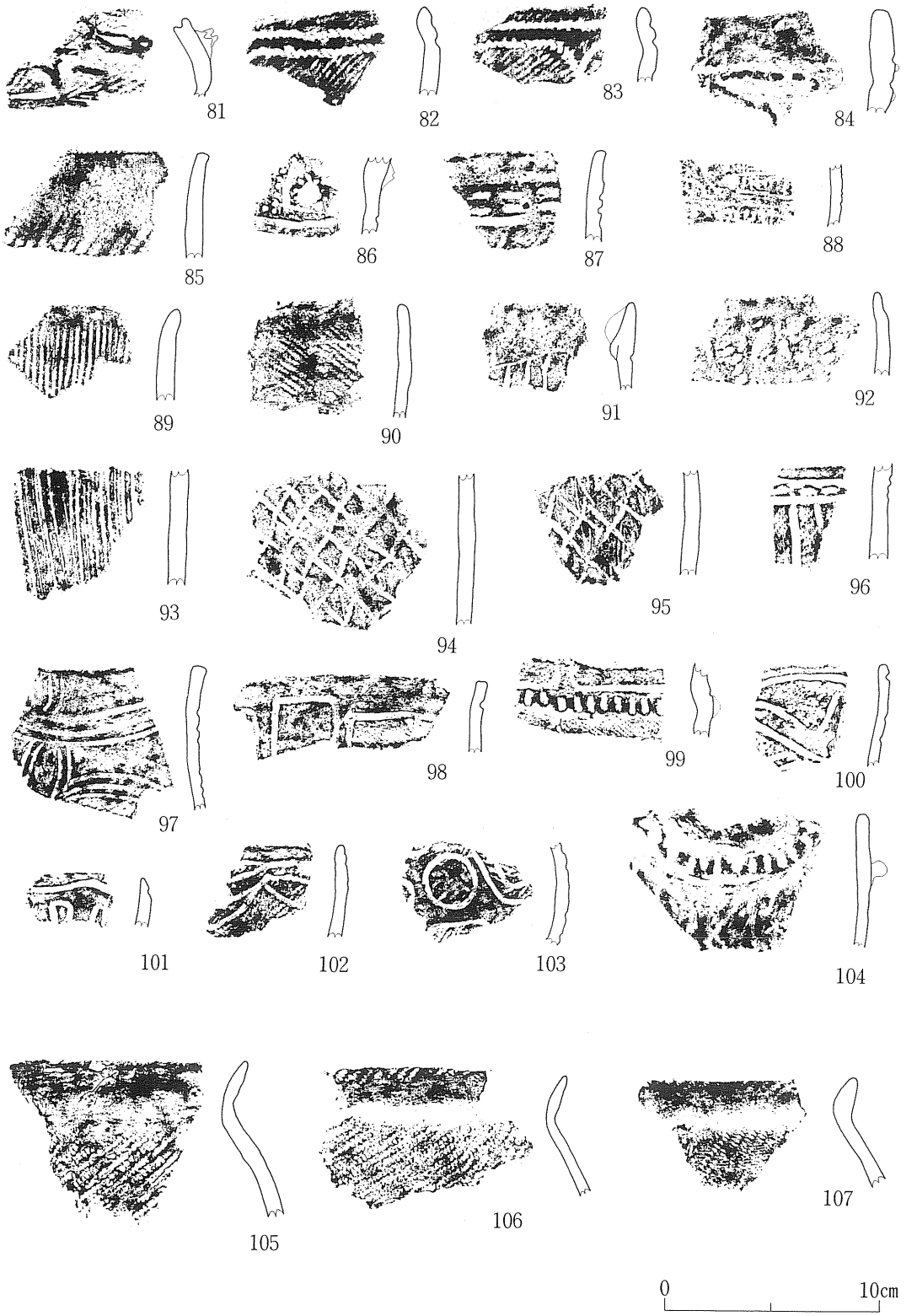
第18図　遺構内出土石器



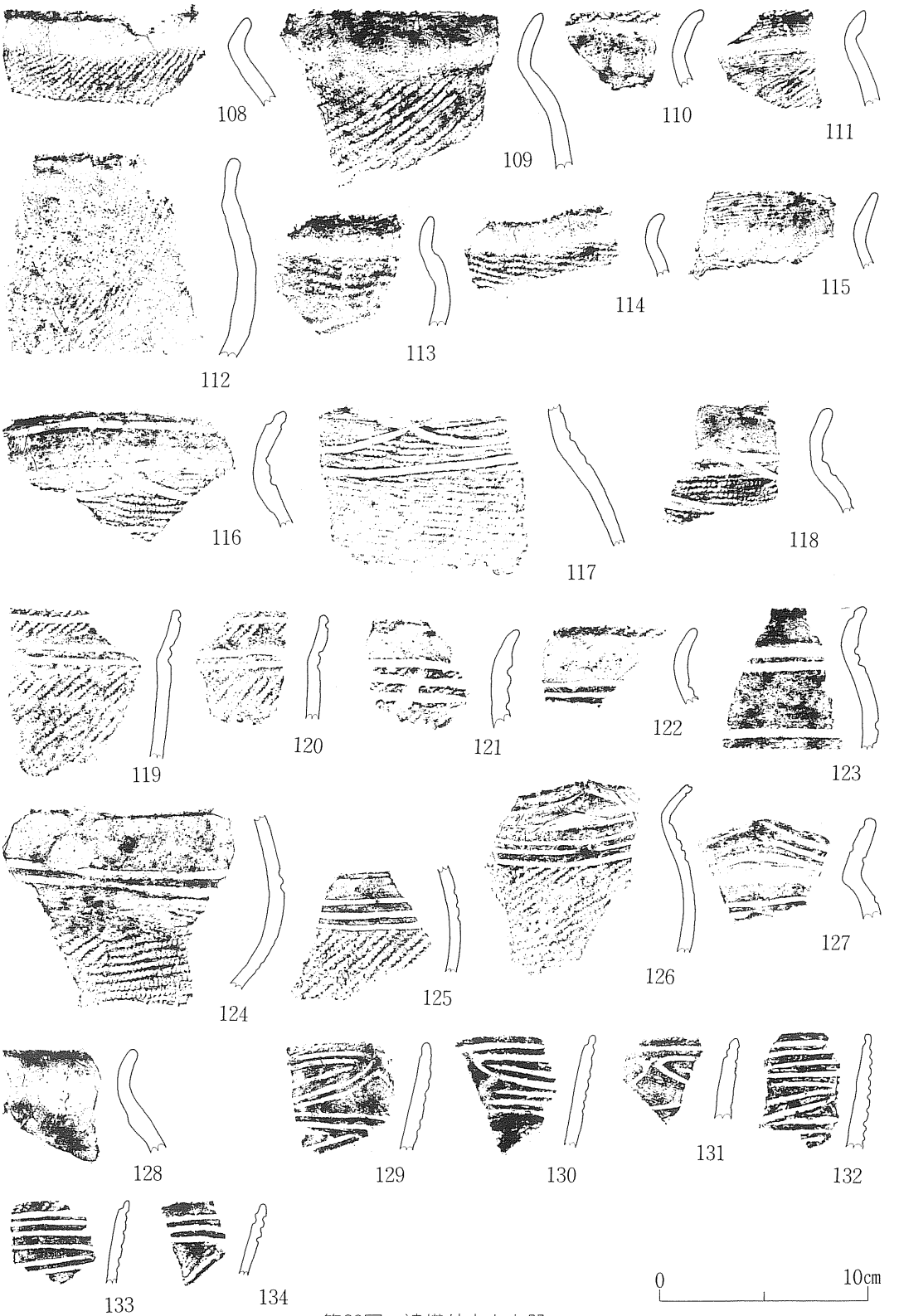
第19図　遺構内出土石器



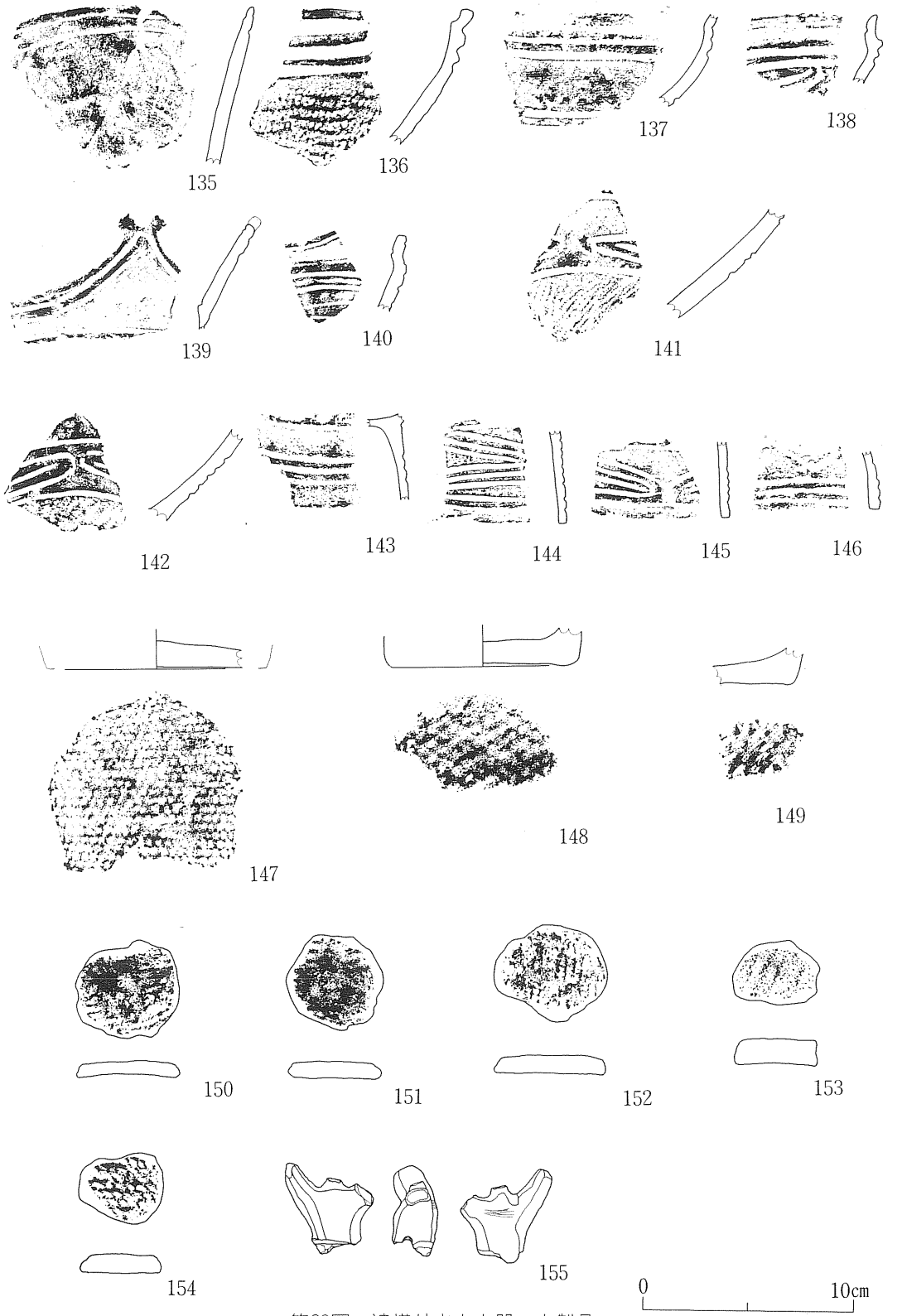
第20図　遺構外出土土器



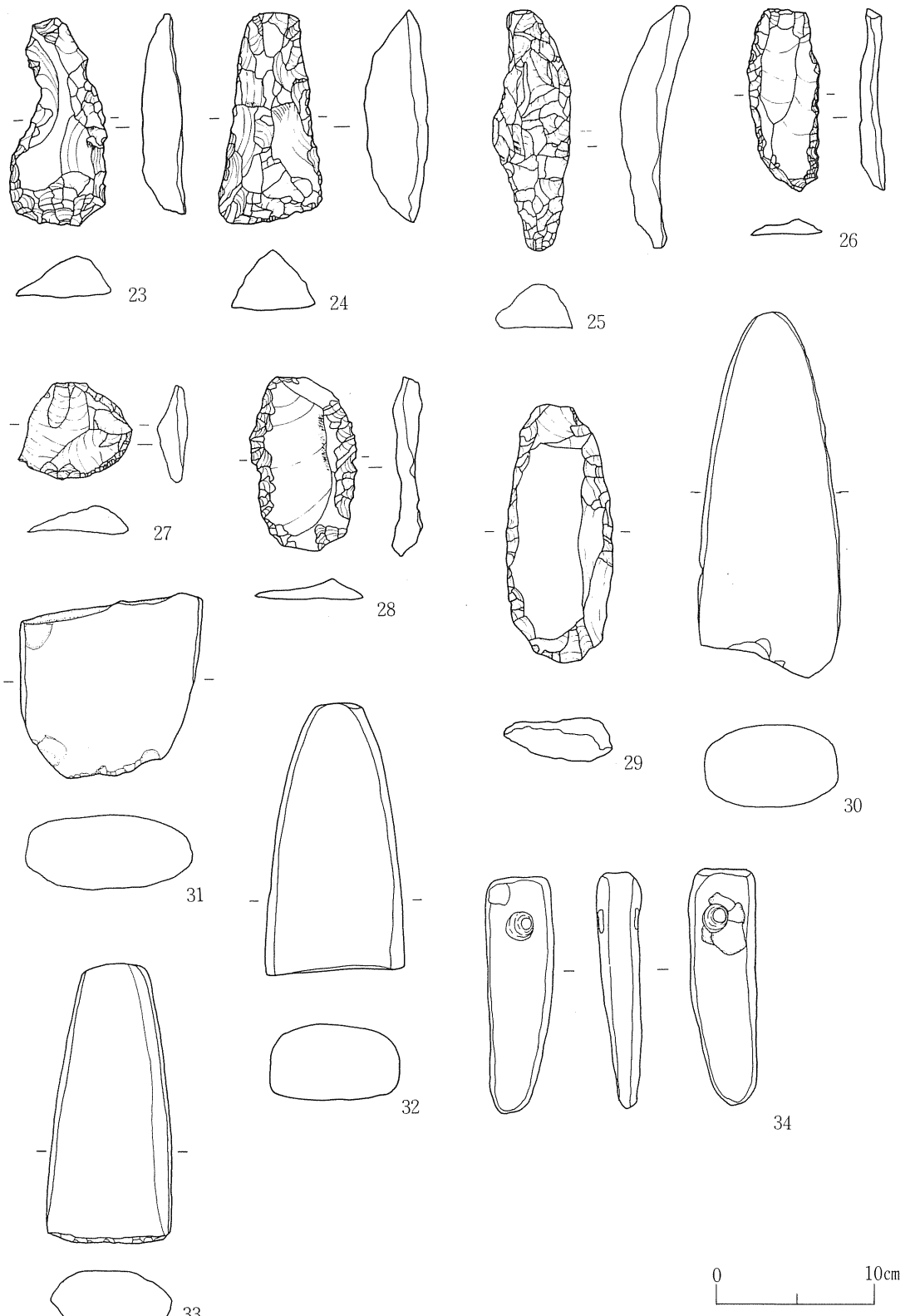
第21図　遺構外出土土器



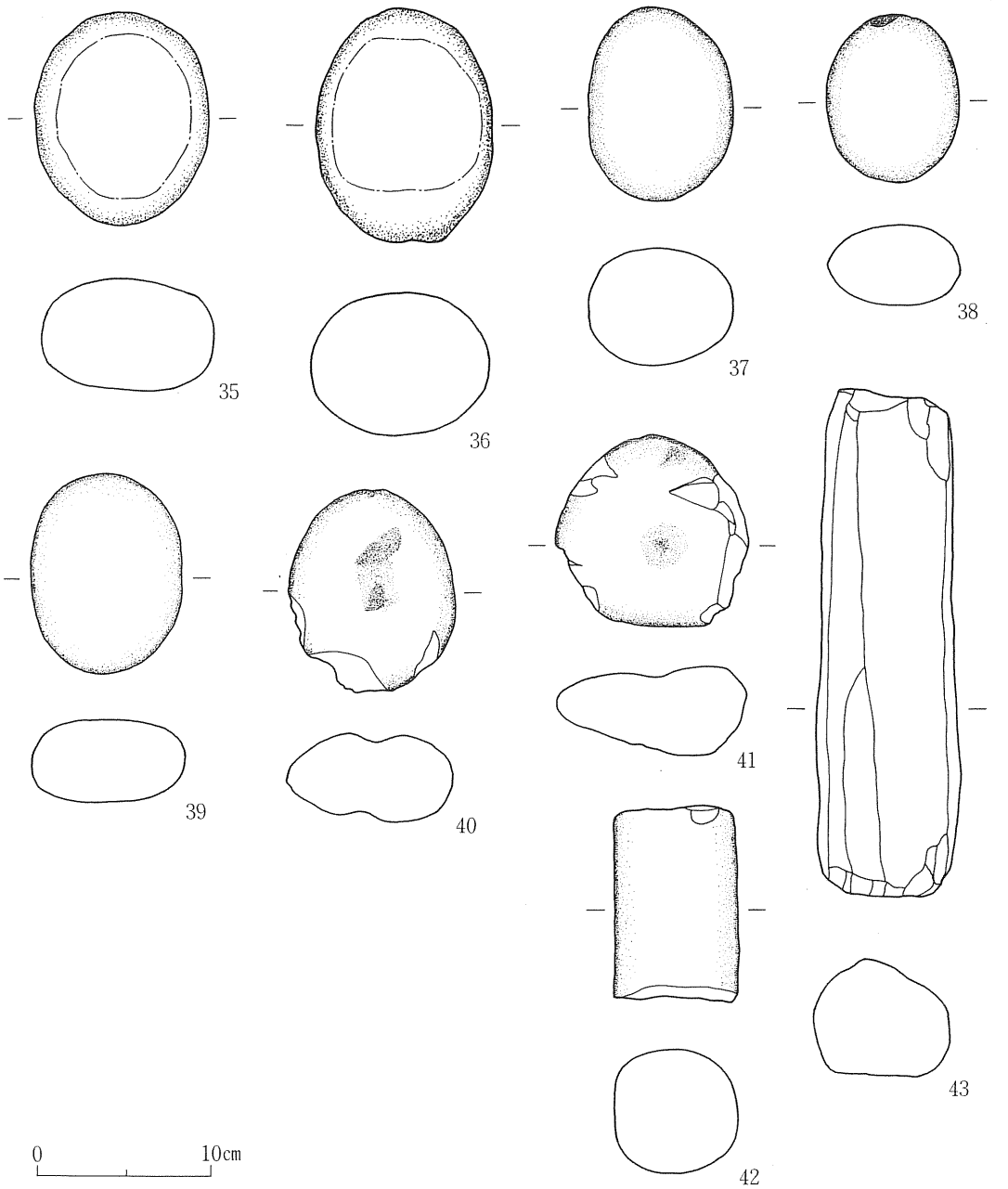
第22図　遺構外出土土器



第23図　遺構外出土土器・土製品



第24図　遺構外出土石器・石製品



第25図　遺構外出土石器

まとめ

遺構について

本遺跡で検出された遺構は、既述の通り、住居跡３軒、土坑13基、土器埋設遺構２基である。住居跡は出土土器から、縄文時代中期末葉(大木10式期)－１号住居跡、弥生時代中期前葉～末葉－２・３号住居跡、に位置づけられる。

３号住居跡には、３条の周溝がめぐり、それぞれに切り合い関係は認められなかった。周溝が２号土坑覆土上層面で検出され、周溝の覆土各々に相異点は認められないこと等から、この住居跡における拡張、あるいは縮少のいずれかについては、はっきりしない。

県内における弥生時代の住居跡検出例は、本遺跡も含めて現在２例しかなく、構築のあり方については詳述できないが、主柱穴の対角線上に炉が位置すること、主柱穴が４個であることなどに共通した特徴がみられる。若美町横長根Ａ遺跡では、４個の主柱穴の対角線上に地床炉が位置し、周辺には礫が検出されている。

本遺跡と関連して、台地下の地蔵田溜池をはさんで、本遺跡とは対峙する台地上に地蔵田Ｂ遺跡が位置し、田舎館式併行の壺形土器が出土している。この遺跡は昭和60年に発掘調査の予定であり発掘調査の結果をふまえて、湯ノ沢Ａ遺跡との関係を把握したいと考えている。

土器について

遺構外出土の土器については、１群から３群に分類したが、これらを遺構内出土の土器とともに時期等について触れてみたい。

１群１類は円筒上層ａ式に比定されるものである。２類は大木10式に比定できるもので、１号住居跡出土の土器がこれに該当する。

２群２類は沈線で幾何学的な文様、曲線的な文様等を施すもので、後期の土器に属する。

３群は変形工字文が主体をなすもの、また沈線を主体とするものなど、弥生時代中期に属する土器である。

弥生式土器について

遺構内外出土の弥生式土器の器種、器形、文様などから、おおよその時期を求めてみたい。

12図２は高坏形土器で、体部に施文されている変形工字文は、谷起島式、また山王Ⅲ層式にみられる「流水文」的な文様である。大洞A′式や砂沢式にみられる「粘土粒貼付」、あるいは交点における「彫り込み」等の要素が欠如していることから、いわゆる「変形工字文Ｃ型」(注１)と考えられ、中期前葉に属するものであろう。(注２)

12図３は鉢形土器で、縄文施文後、外面口縁部および内面に沈線を施すもので、中期前葉の谷起島式に属するものと考えられる。

12図９は鉢形土器で、山形突起を有し、体部には「流水文」的な変形工字文を施している。中期前葉に属するものと考えられる。

13図14、14図10、16図51は３条の沈線による文様体の構成を主とする壺形土器で、沈線の他は

13図14、14図10、16図51は、３条の沈線による文様体の構成を主とする壺形土器で、沈線の他は無文のもの、Ｘ字状に分割されるもの、また刺突文を有するものの３型態に区分される。この文様帯を有する土器については、今後の調査研究による同型式の報告をまって時期について触れたいと考えている。

20図72は鉢形土器で、半球状にふくらんだ胴部の上部に変形工字文が施される。中期前葉に比定される地蔵池式（山形）に類似した鉢形土器が出土している。

20図75は鉢形土器で、半球状にふくらんだ胴部の上部に連続した山形文がみられる。中期中葉の二枚橋～宇鉄Ⅱ式期に属するものと考えられる。底部に網代痕がみられる。

20図76は山形突起を有する高坏形土器で、粘土粒を有する変形工字文が施されている。中期前葉の砂沢式期に属するものと考えられる。

21図105～107、22図108～125は口唇部に縄文を残し、頸部が無文のものや、これをはさんで、上下を数本の沈線で施文している。（頸部の無文帯には刷毛目文はみられない。）中期前葉に比定される飯森式期に属するものと考えられる。

以上、遺構内外出土の弥生式土器について概観してみた。本遺跡における器種は、甕・鉢形土器・高坏形土器・壺形土器・蓋形土器である。このように、器種・文様等から弥生時代中期前葉～中葉に位置づけられる土器は県内ではまだまだ断片的にしか出土しておらず、また中期以降の土器についても同様である。したがって、編年的位置づけもまだ不明確な点がある。今回の調査で得られた資料や、今後の調査研究によって得られるであろう資料をもとに、東北北部の弥生時代について明確化していく必要がある。

（注１）　伊東・須藤　「瀬野遺跡」1982

（注２）　須藤　　「東北地方の初期弥生土器」考古学雑誌　1983

参　考　文　献

須藤　隆　　：「秋田県大曲市宇津ノ台遺跡の弥生式土器について」　文化33－３　1970

須藤　隆　　「土器組成論」　考古学研究　19－４　1973

横手市教育委員会：「手取清水遺跡発掘調査報告書」　1974

小玉　準　　：「男鹿半島の弥生式土器・日本海海上交通史の一断面」　男鹿半島研究　男鹿地域研究会　1975

小武海松四郎　：「籾痕土器をともなう秋田県南秋田郡井川町新間遺跡遺物について」　1977

橘　善光　　：「入門講座　弥生土器　北東北」　考古学ジャーナル　160、162、166、168　1979

小玉準、畠山憲司：「由利町上の台遺跡採集の弥生式土器」　本荘市史研究　1981

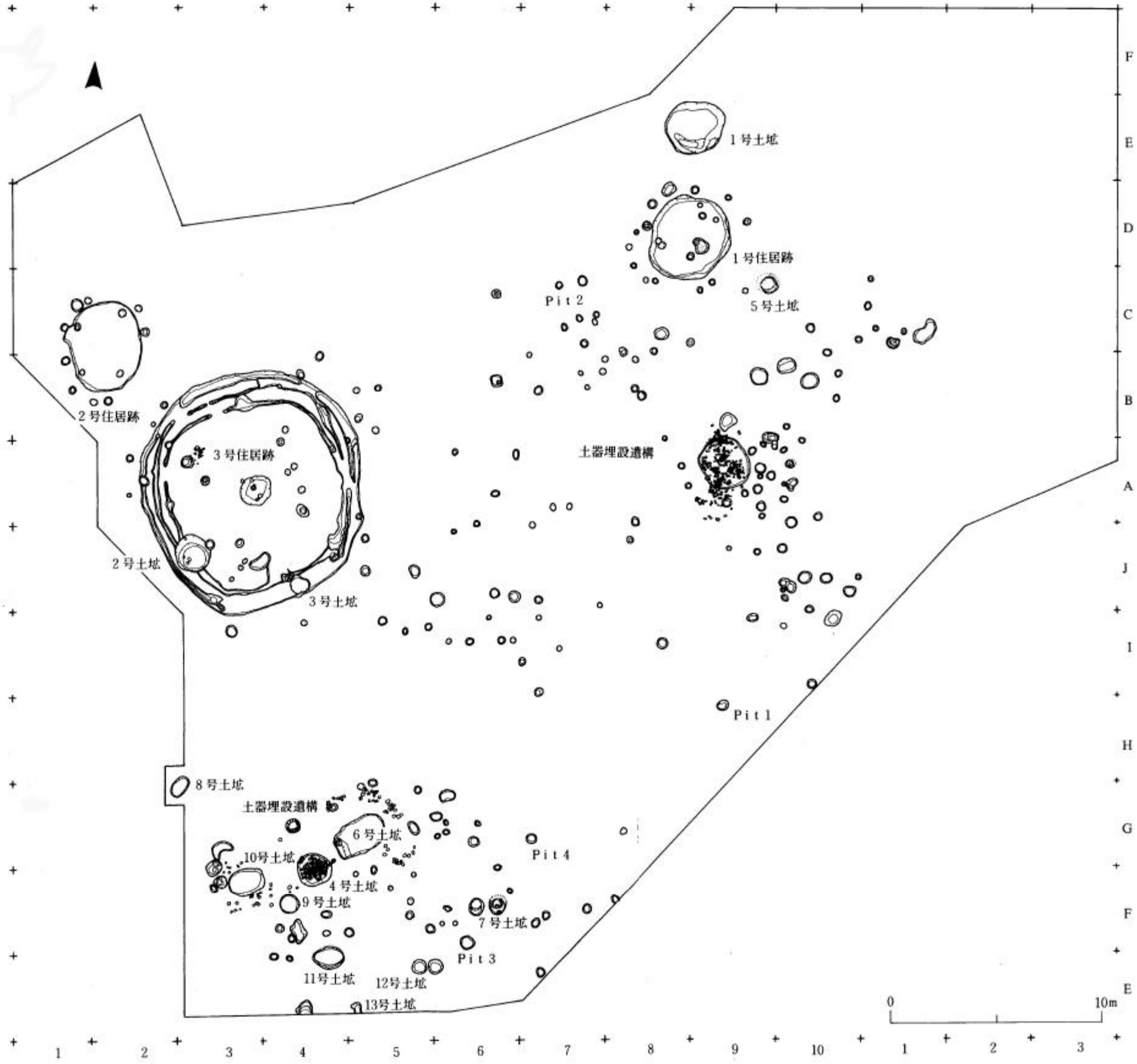
伊東信雄、須藤隆：「瀬野遺跡　―青森県下北郡脇野沢村瀬野遺跡の研究」　東北考古学会　1982

秋田県教育委員会：「平鹿遺跡発掘調査報告書」　1983

須藤　隆　　：「東北地方の初期弥生土器―山王Ⅲ層式―」　考古学雑誌　1983

須藤　隆　　：「弥生文化の伝播と恵山文化の成立」　考古学論叢　芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会　1983

若美町教育委員会：「横長根Ａ遺跡第２・３次発掘調査略報」　1983


1号土坑
1号住居跡
Pit 2
5号土坑
2号住居跡
3号住居跡
土器埋設遺構
2号土坑
3号土坑
Pit 1
8号土坑
土器埋設遺構
6号土坑
10号土坑
4号土坑
9号土坑
Pit 4
7号土坑
Pit 3
11号土坑
12号土坑
13号土坑
0
10m
F
E
D
C
B
A
J
I
H
G
F
E
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
1
2
3

第26図　遺構配置図

遺跡全景（東→）

遺跡全景（南→）

図版 1

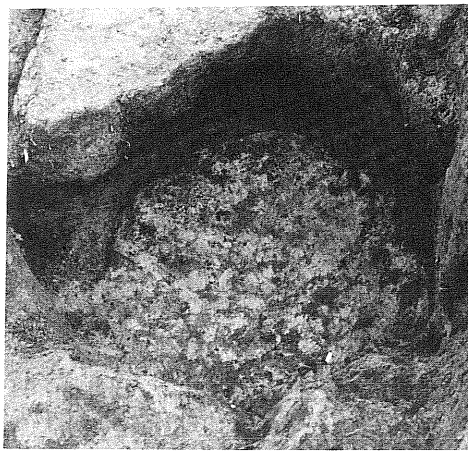
1号住居跡（南→）

2号住居跡（西→）

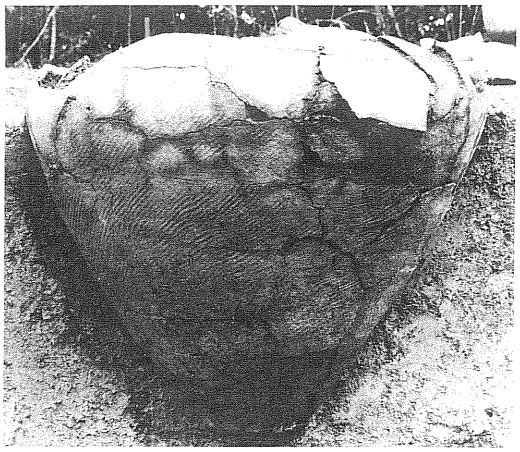
図版 2

3号住居跡（南→）

土器埋設遺構（北→）



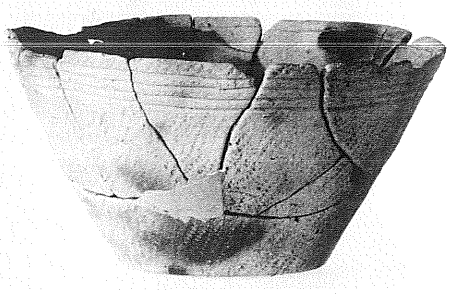
3号土坑（西→）



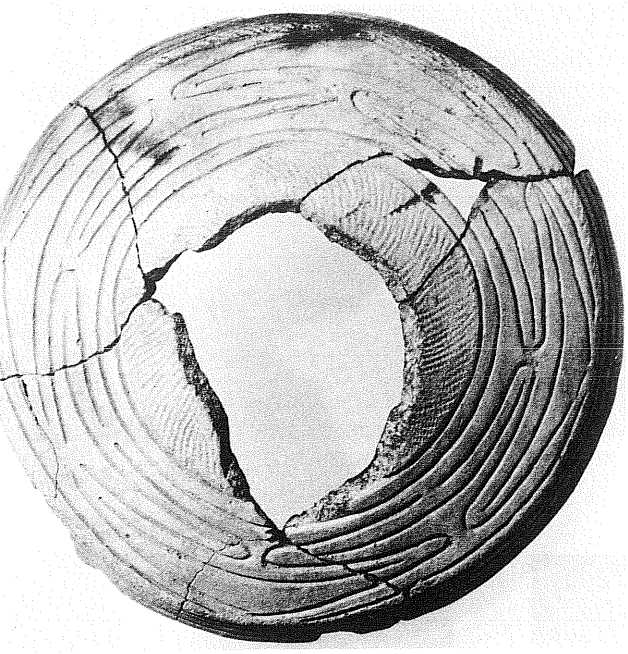
同　　上（北→）

5号土坑（北→）

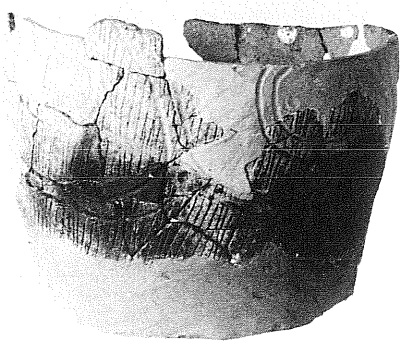
図版3



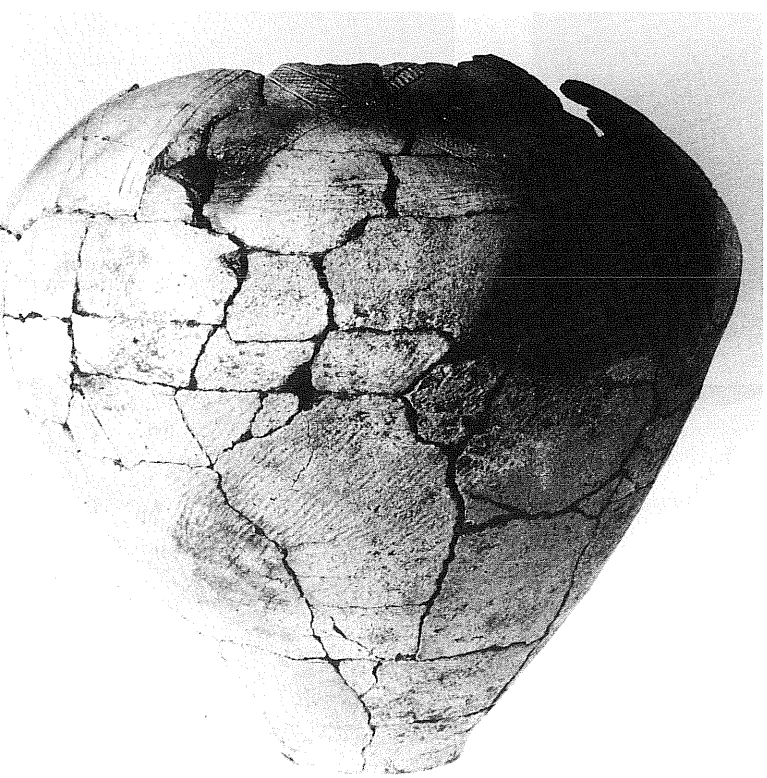
3号住居跡



3号住居跡



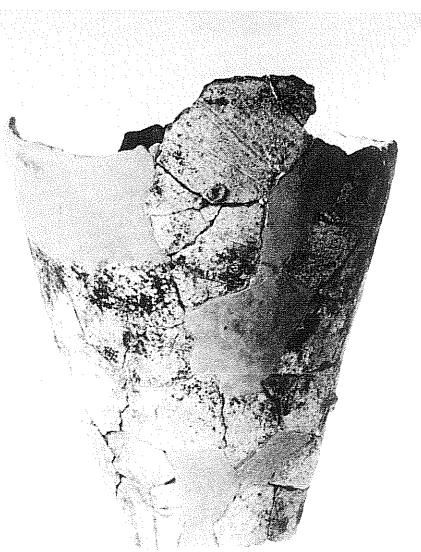
土器埋設遺構

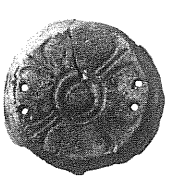


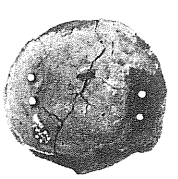
土器埋設遺構

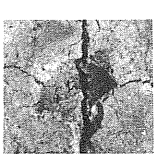
図版4　遺構内出土土器

竪穴状遺構



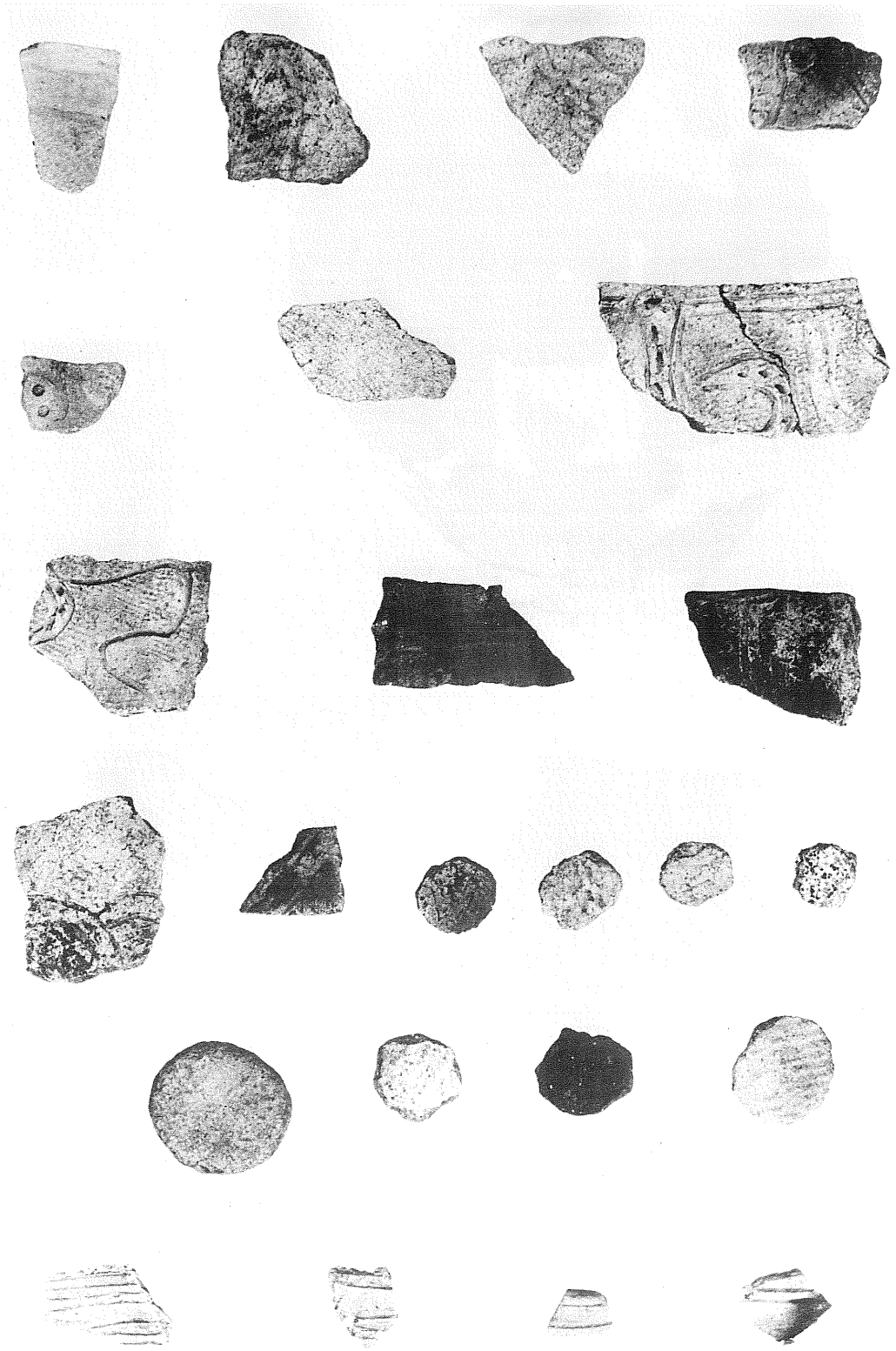




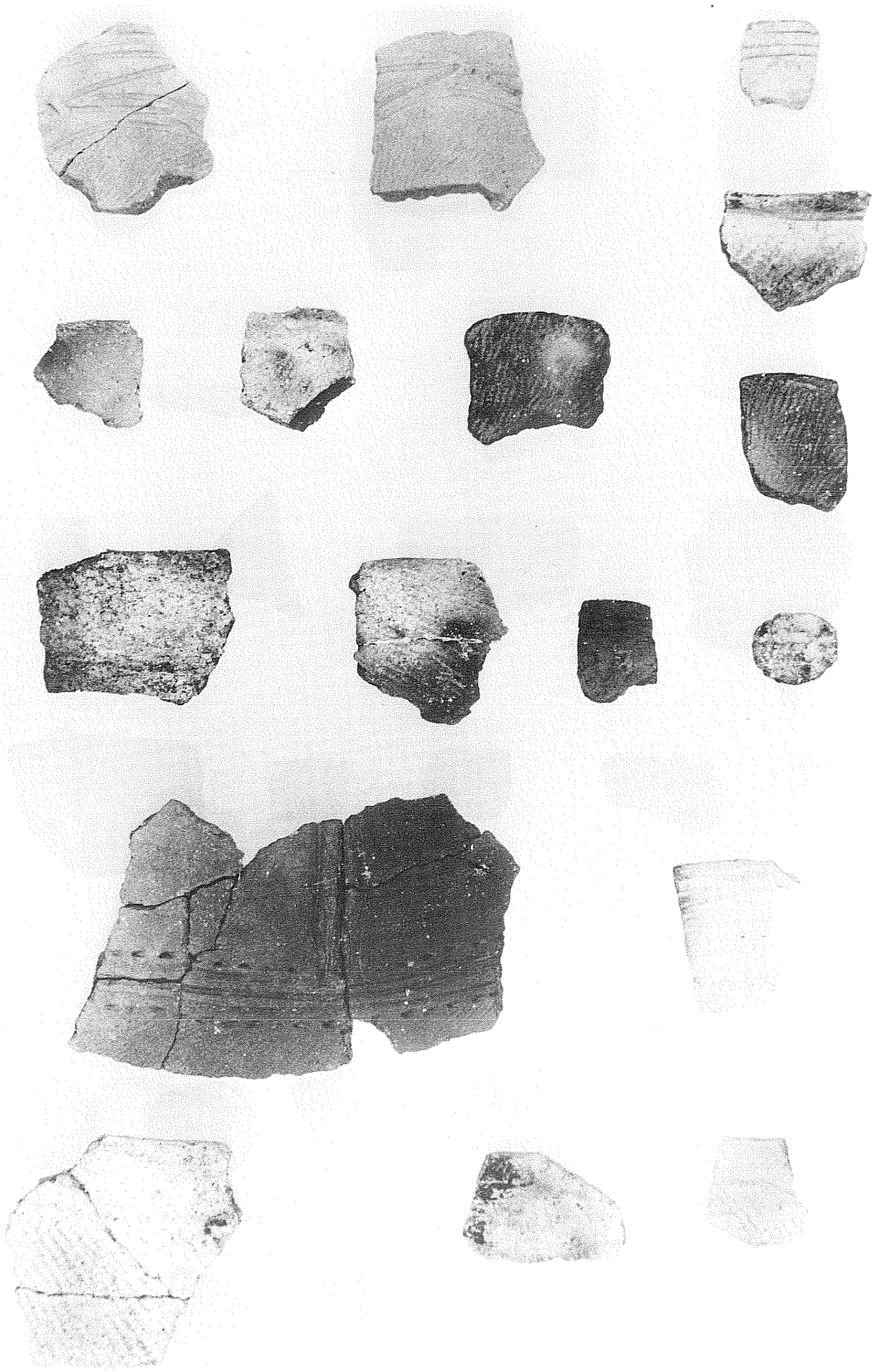


籾痕付着土器

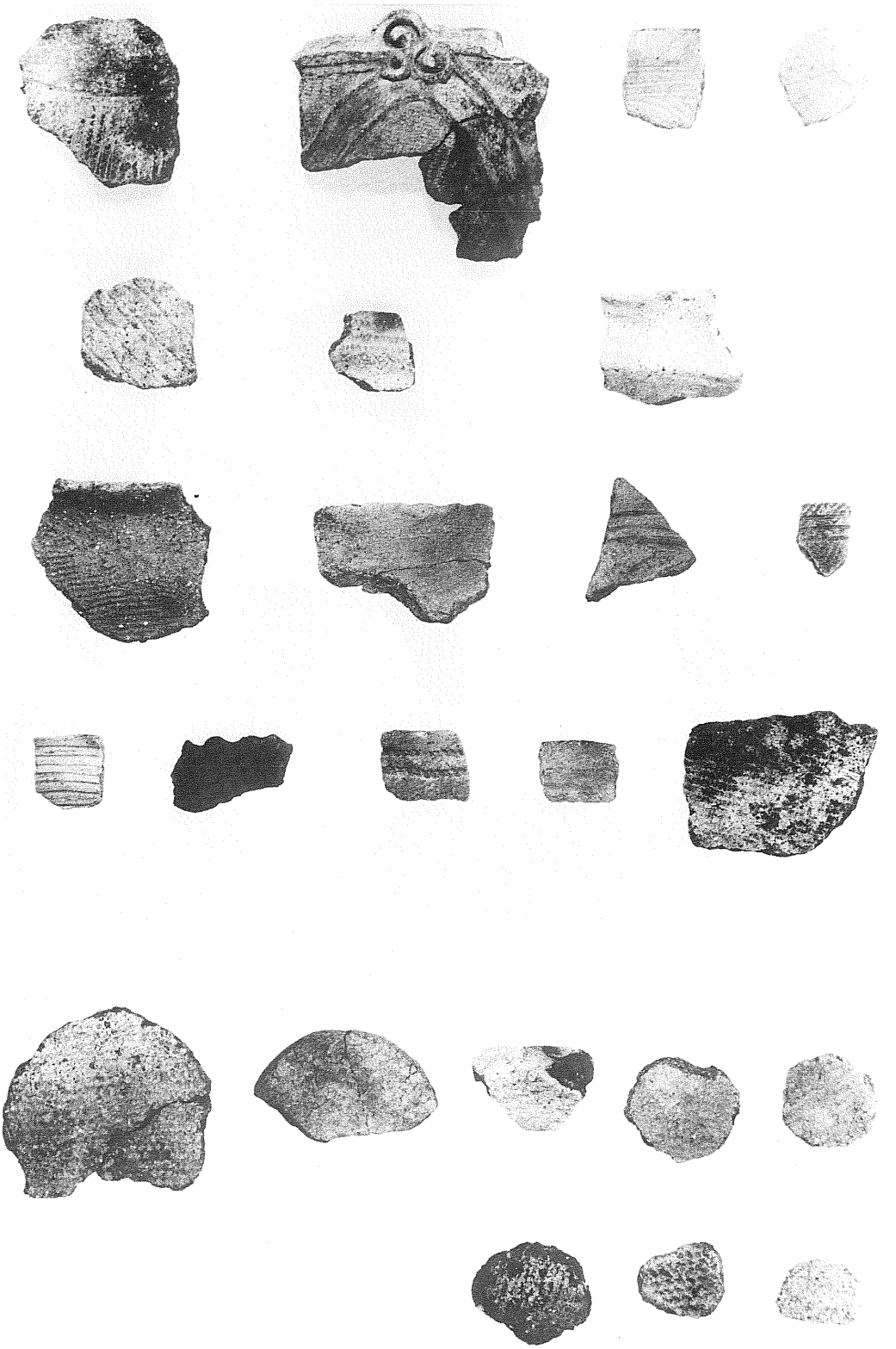
図版 5　遺構外出土土器



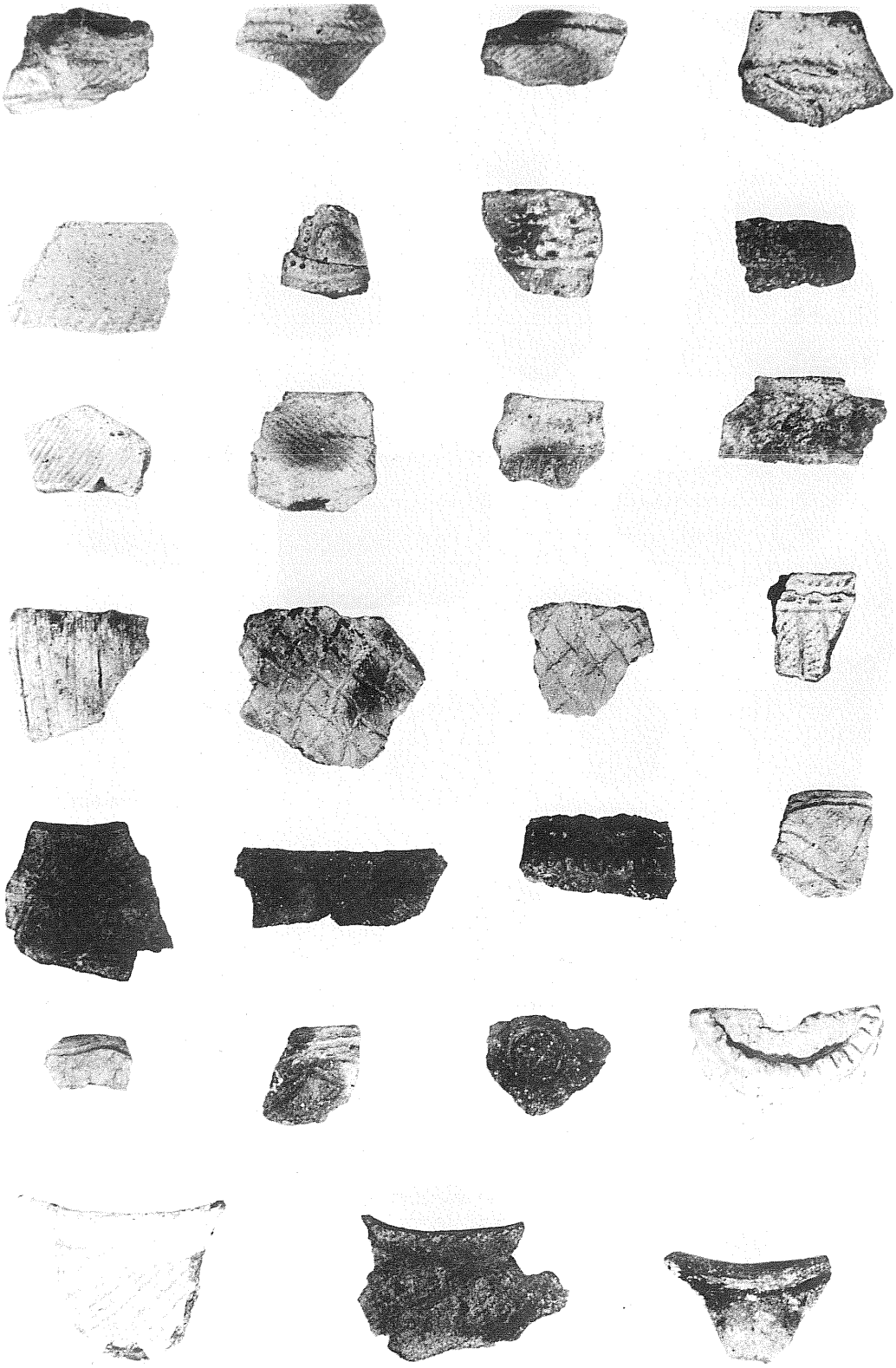
図版 6　遺構内出土土器・土製品



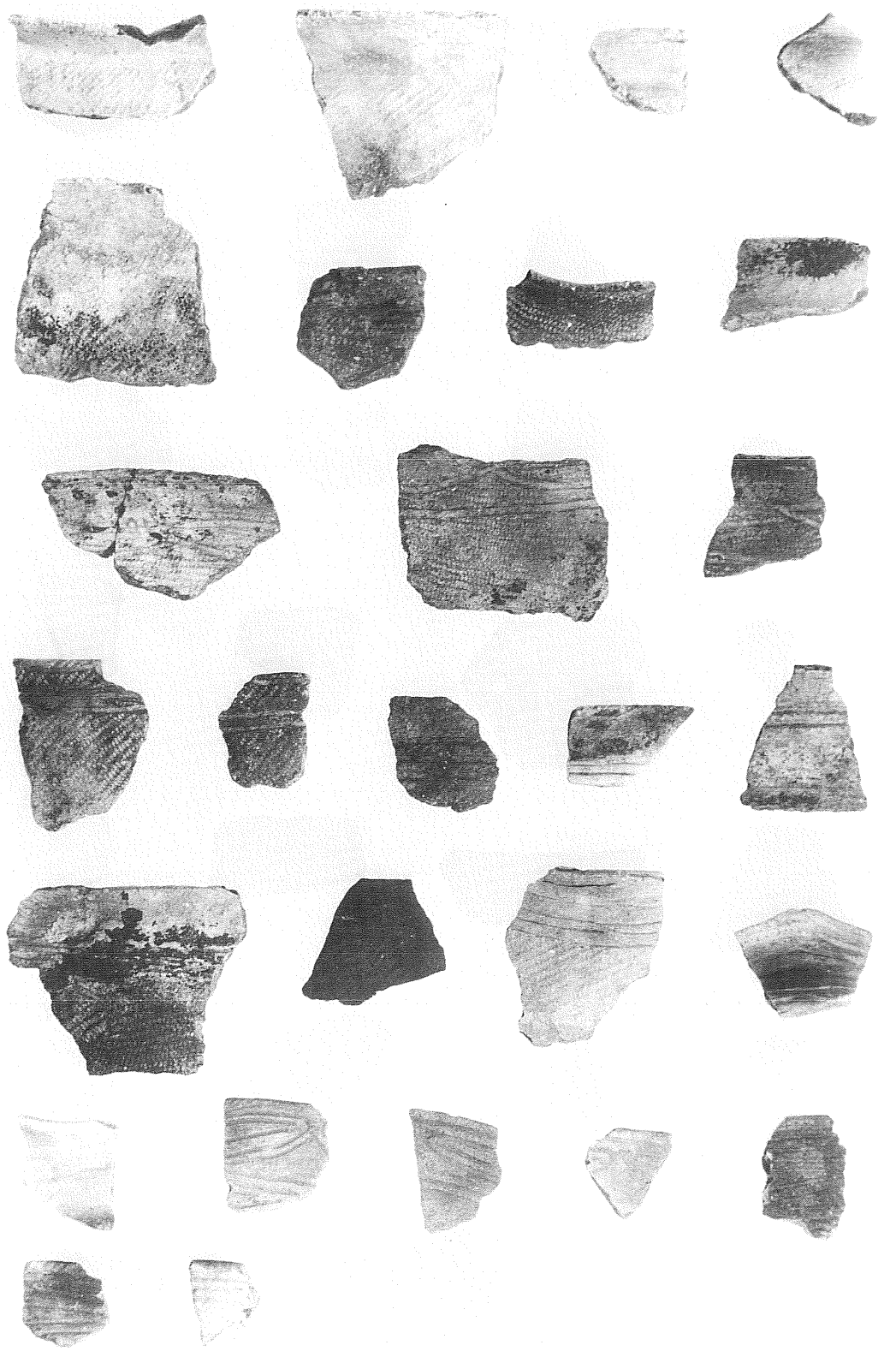
図版 7　遺構内出土土器



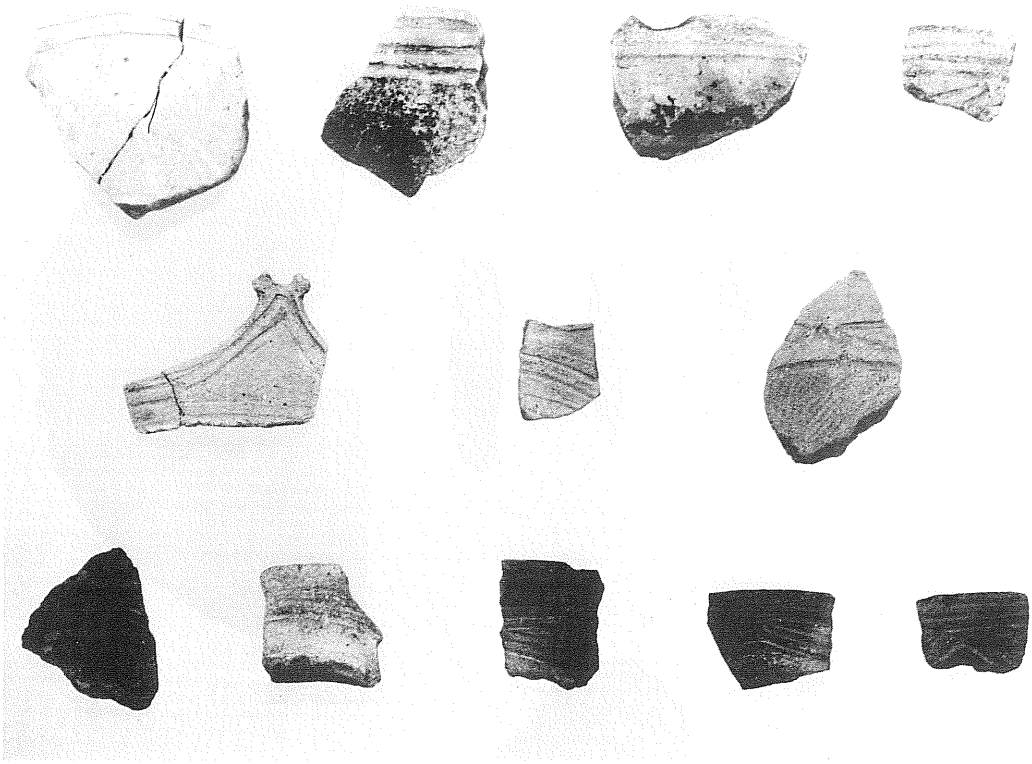
図版 8　遺構内出土土器・土製品



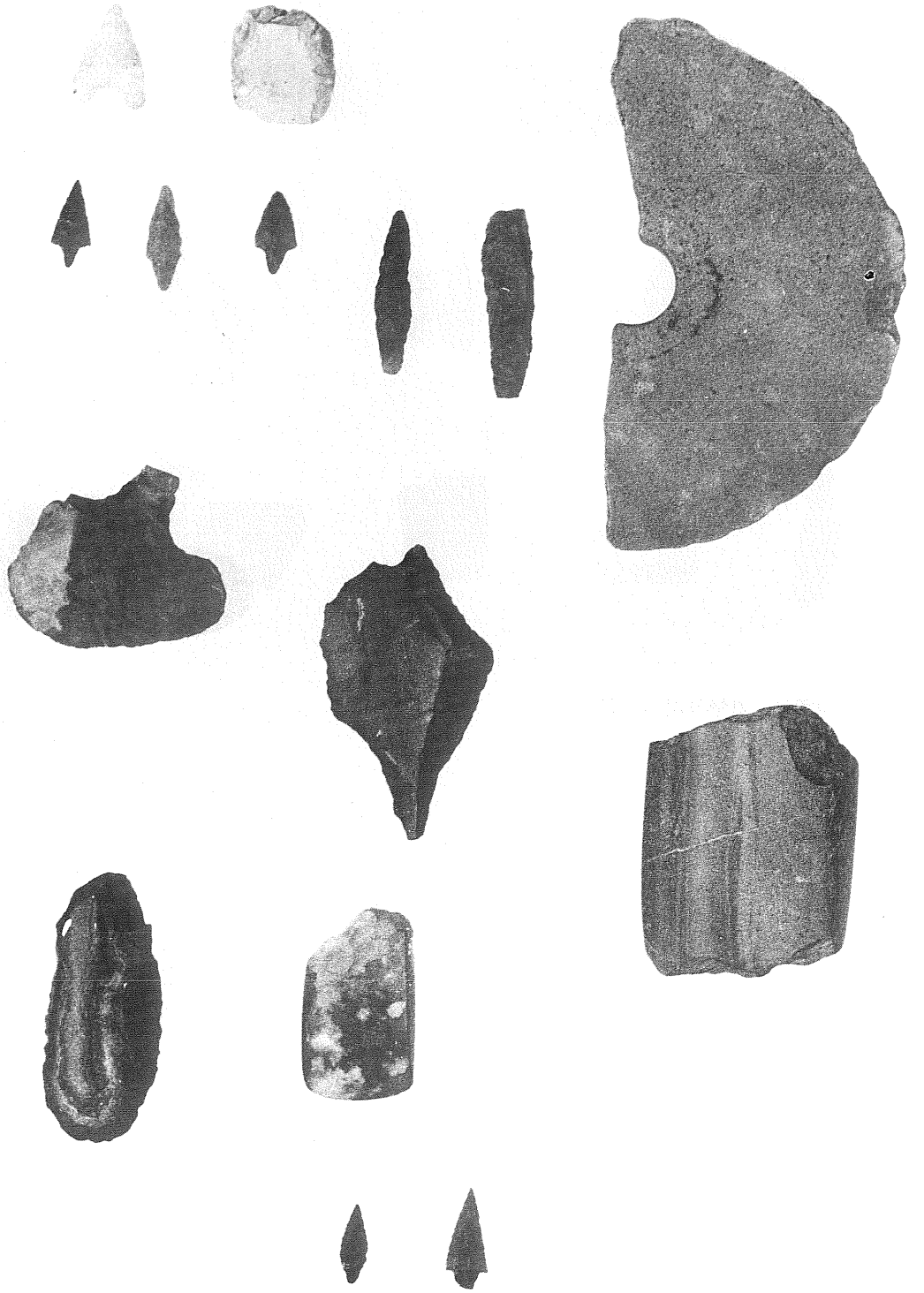
図版 9　遺構外出土土器



図版10　遺構外出土土器



図版11　遺構外出土土器



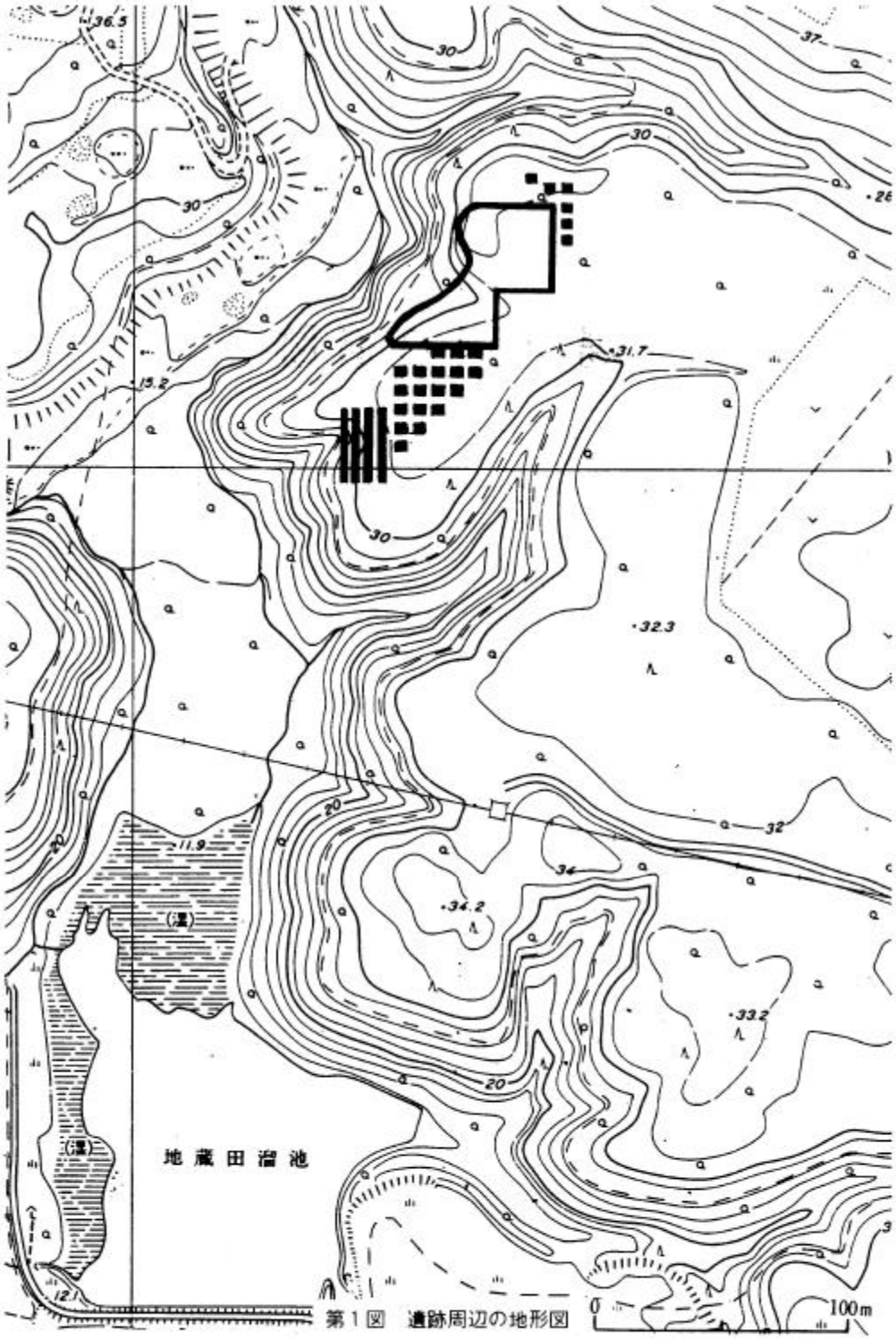
図版12　遺構内出土石器

図版13　遺構内出土石器

図版14　遺構外出土石器・石製品

図版15　遺構外出土石器

湯ノ沢C遺跡



第1図　遺跡周辺の地形図

A B C D E F G H I J1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
A B C D E F G H I J A B C D E F G H I J
0
40m

第２図　グリッド配置図

遺跡の概観

末戸松本集落の北側に面した標高30m ～32m の舌状台地の西側に位置している。検出された遺構は縄文時代中期の住居跡６軒、同期の土坑１基、晩期の土坑４基等である。縄文時代中期の遺跡は東方650m に野畑遺跡、南西方向500m に湯ノ沢Ｂ遺跡があり、さらに南方250m に縄文時代中期および弥生時代中期の住居跡を検出した湯ノ沢Ａ遺跡がある。

１号住居跡（第３図）

調査区西側で検出された。

プランは長軸5.7m 、短軸5.1m の隅丸方形を呈し、確認面からの深さは50cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は暗褐色土、黄褐色土、褐色土、黄褐色粘質土の堆積である。ピットは数個検出され、炉の両側の柱穴を除き、他ははっきりしない。炉は土器埋設部、掘り込み、一段浅い掘り込みからなる。土器埋設部は深鉢形土器の胴部を正立して埋設し、周辺は火熱を受け赤変している。掘り込みは側面が火熱を受けている。一段浅い掘り込みにはピットが認められる。床はほぼ平坦である。

出土遺物

土器（第12図１、第13図５～７）

１は炉埋設土器、５～７は覆土出土である。撚糸文を施すもの、沈線区画の磨消帯を施すものである。１は口縁部がやや外傾する深鉢形土器である。

石器（第16図１・２、第17図11・12）

１は石鏃、２は掻器状石器、11は磨石、12はくぼみ石である。

２号住居跡（第４図）

調査区南側で検出された。

プランは径約３m の円形を呈し、確認面からの深さは13cmで、壁はゆるく立ち上がる。覆土は黒色土、暗褐色土、褐色土の堆積である。ピットは住居内外に検出され、住居内４個と住居外のものが柱穴と考えられる。炉は石組部と掘り込みからなる。石組部は火熱を受け赤変している。掘り込みは１個の石とピットが認められ、壁に接する。床は平坦である。

出土遺物

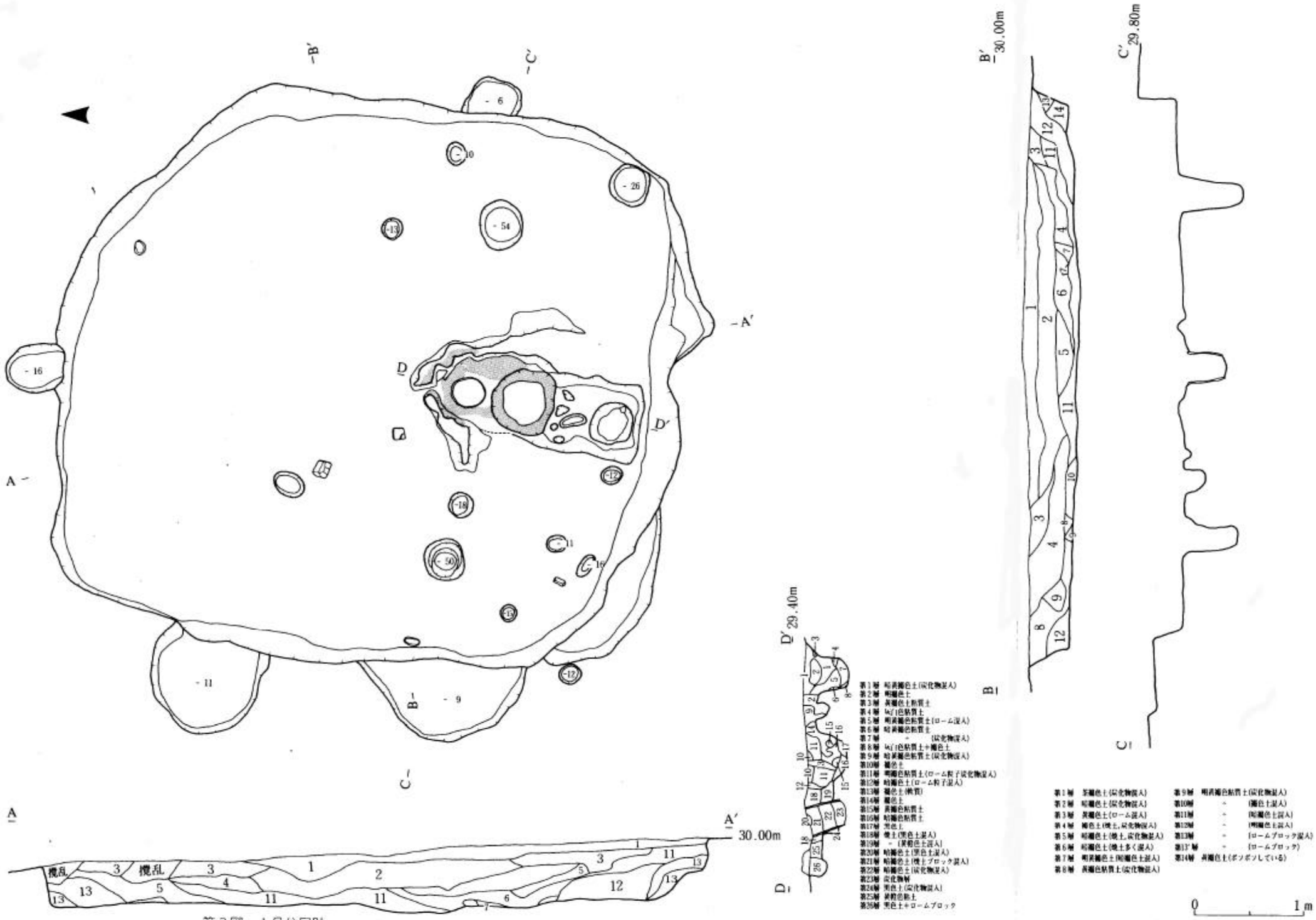
土器（第13図８～10）

10は炉覆土、８・９は覆土出土である。いずれもＬＲ単節斜縄文（縦位回転）が施され、８は折り返し口縁である。

３号住居跡（第５図）

調査区北側で検出された。

プランは長軸2.5m 、短軸2.2m の楕円形を呈し、西側の攪乱穴により壁が切られている。確認面からの深さは10cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は褐色土、黄褐色土、暗褐色土の堆積であ


A
A′
30.00m
B
B′
30.00m
C
C′
29.80m
D
D′
29.40m
撹乱
撹乱
第1層　茶褐色土(炭化物混入)
第2層　暗褐色土
第3層　黄褐色土粘質土
第4層　灰白色粘質土
第5層　明黄褐色粘質土(ローム混入)
第6層　暗黄褐色粘質土
第7層　〃　(炭化物混入)
第8層　灰白色粘質土＋褐色土
第9層　暗黄褐色粘質土(炭化物混入)
第10層　褐色土
第11層　明褐色粘質土(ローム粒子炭化物混入)
第12層　暗褐色土(ローム粒子混入)
第13層　褐色土(軟質)
第14層　褐色土
第15層　黄褐色粘質土
第16層　暗褐色粘質土
第17層　黒色土
第18層　焼土(黒色土混入)
第19層　〃　(黄褐色土混入)
第20層　暗褐色土(黒色土混入)
第21層　暗褐色土(焼土ブロック混入)
第22層　暗褐色土(炭化物混入)
第23層　炭化物層
第24層　黒色土(炭化物混入)
第25層　黄褐色粘土
第26層　黒色土＋ロームブロック
第1層　茶褐色土(炭化物混入)
第2層　暗褐色土(炭化物混入)
第3層　黄褐色土(ローム混入)
第4層　褐色土(焼土,炭化物混入)
第5層　暗褐色土(焼土,炭化物混入)
第6層　暗褐色土(焼土多く混入)
第7層　明黄褐色土(暗褐色土混入)
第8層　黄褐色粘質土(炭化物混入)
第9層　明黄褐色粘質土(炭化物混入)
第10層　〃　(褐色土混入)
第11層　〃　(暗褐色土混入)
第12層　〃　(明褐色土混入)
第13層　〃　(ロームブロック混入)
第13′層　〃　(ロームブロック)
第14層　黄褐色土(ボソボソしている)
0
1m

第3図　1号住居跡

る。ピットは住居内外に検出されたが、柱穴ははっきりしない。炉は土器埋設部と掘り込みからなる。土器埋設部は深鉢形土器の胴部を正立して埋設し、周辺が火熱を受け赤変している。掘り込みは埋設土器側と底面に長さ20cm程の礫が検出された。この礫は赤化しており、石組みであったと考えられる。床はほぼ平坦である。

出土遺物

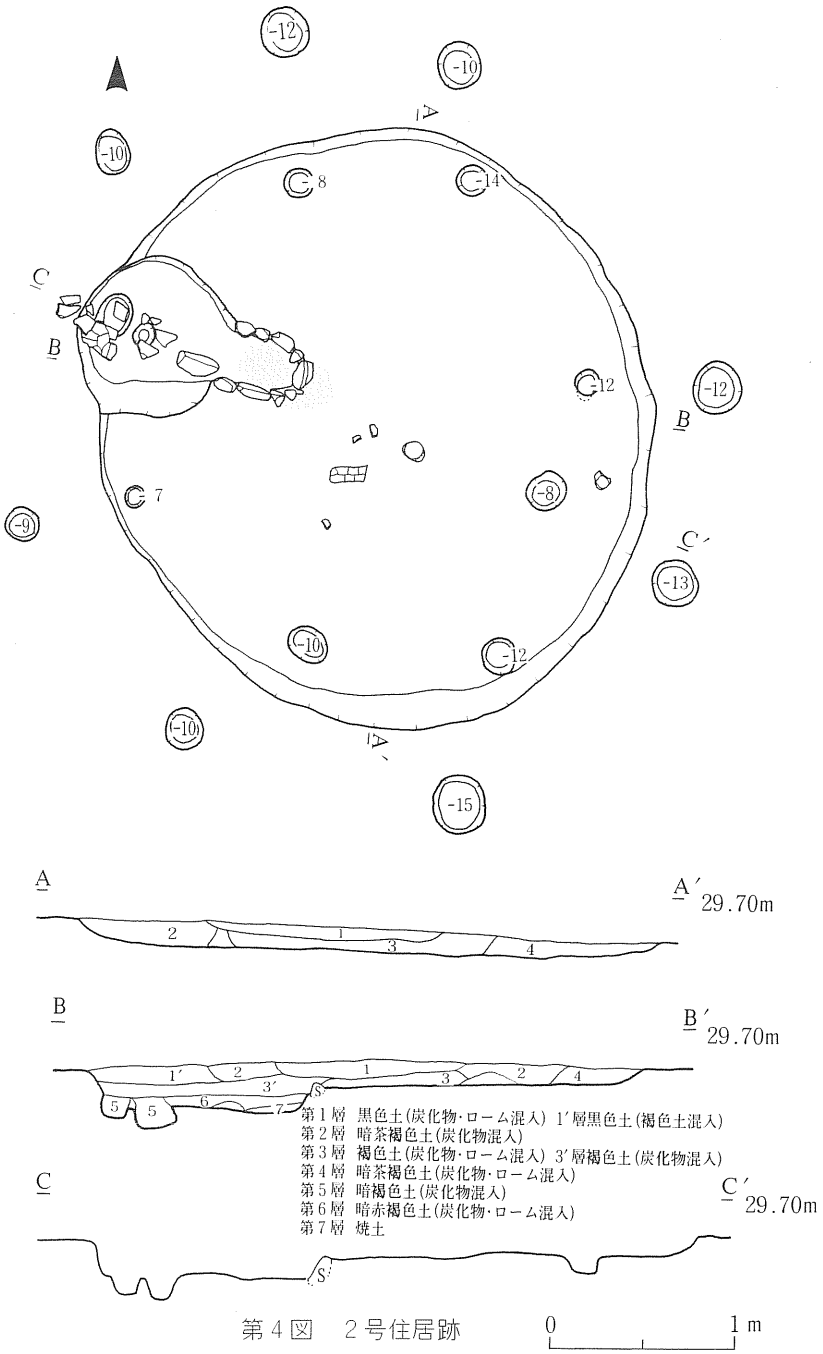
土器（第12図２、第13図11）

２は炉埋設土器、11は覆土出土である。いずれも沈線区画の磨消帯を施すものである。２は深鉢形土器の胴部で、地文はＲＬ単節斜縄文（縦位回転）である。

４号住居跡（第６図）

調査区北側で検出された。

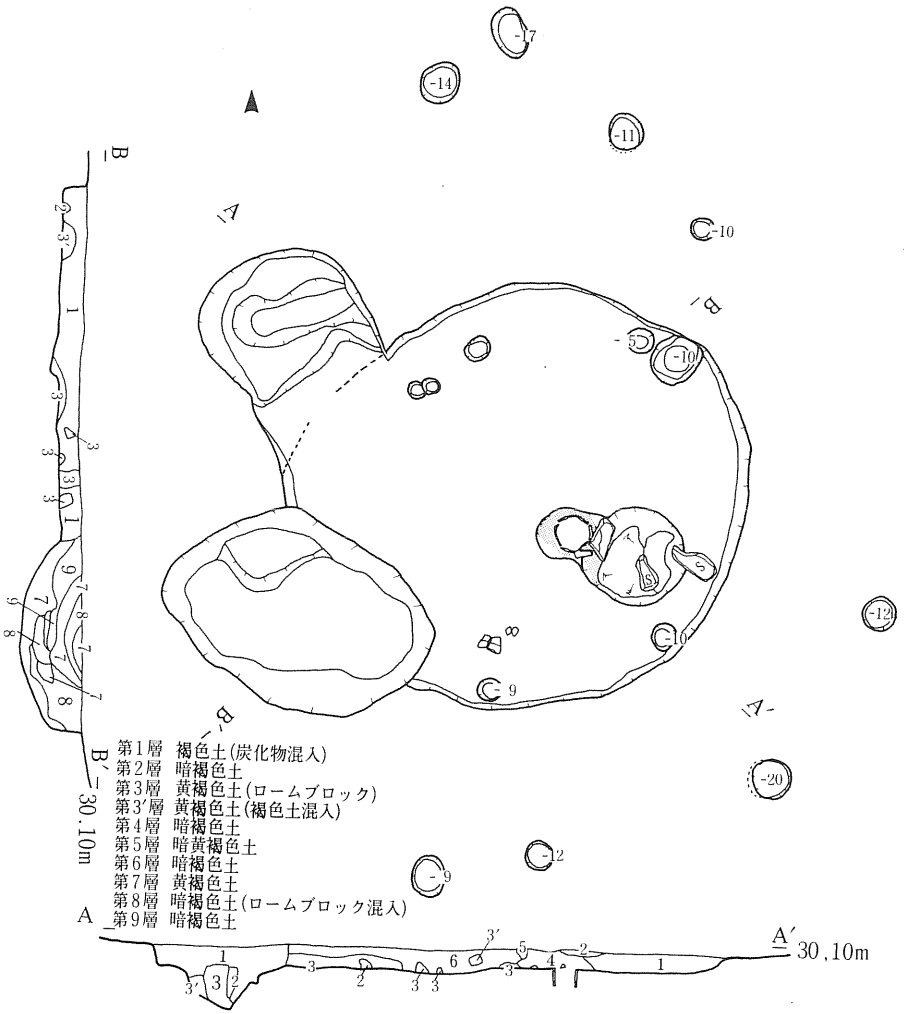
プランは長軸2.8m、短軸2.5mの楕円形を呈し、確認面からの深さは15cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。



第４図　２号住居跡

覆土は褐色土、黄褐色土、暗褐色土の堆積である。ピットは住居内外に検出され、住居内壁際と住居外のものが柱穴と考えられる。炉は土器埋設部と石組部からなる。土器埋設部は底部を欠く鉢形土器を正立して埋設し、周辺は火熱を受け赤変している。石組部は埋設土器との間に２個の石を据えている。床は平坦である。

出土遺物



第５図　３号住居跡

土器（第12図３、第13図12・13）

３は炉埋設土器、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帯を施すもの、地文施文後に沈線を施すものである。３は口縁部がやや外傾する鉢形土器で、沈線区画の磨消帯はＪ字状をなす。地文はＲＬ単節斜縄文（縦位回転）である。

石器（第17図13）

磨石である。

５号住居跡（第７図）

調査区西側で検出された。

プランは径約３ｍの円形を呈し、確認面からの深さは24cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は暗褐色土、褐色土、黒色土、暗褐色土の堆積である。ピットは住居跡内外に検出され、住居内４個が主柱穴、住居外が支柱穴と考えられる。炉は２ヶ所認められ、東側の炉が南側の炉を切ってい

る。南側の炉は土器埋設部と石組部からなる。土器埋設部は深鉢形土器を正立して埋設してある。石組部は底面が火熱を受けている。東側の炉は土器埋設部と掘り込みからなり、土器埋設部は深鉢形土器を正立して埋設し、周辺は火熱を受け赤変し、東側に石が１個認められた。掘り込みは底面が火熱を受けている。床はほぼ平坦である。

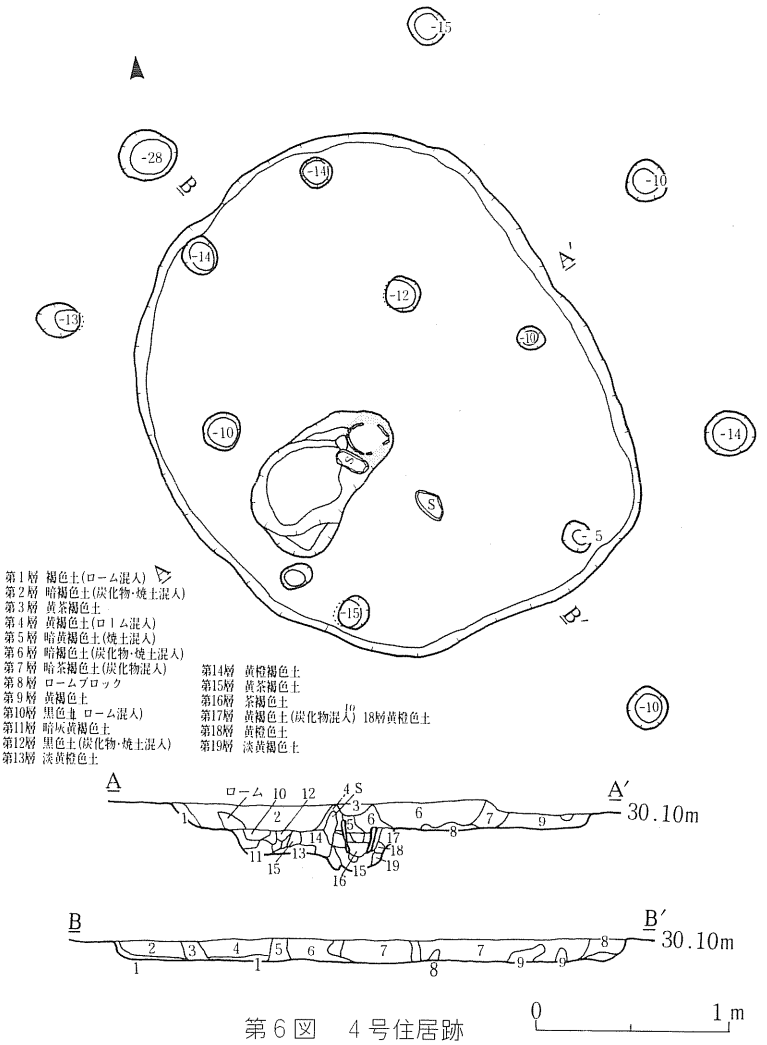
出土遺物

土器（第13図14～18）

14は炉（南側）、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帯を施すもの、数本の平行沈線を弧状に施すものである。

６号住居跡（第８図）

調査区西側で検出された。



第６図　４号住居跡

フランは長軸4.7m、短軸3.5mの楕円形を呈し、北東部に張り出しをもつ。確認面からの深さは25cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は黒色土、暗褐色土、褐色土、黄褐色土、赤褐色土の堆積である。ピットは数個検出され、主柱穴は４個と考えられる。炉は石囲土器埋設部、石組部、掘り込みからなる。石囲土器埋設部は底部を欠く深鉢形土器を正立して埋設し、周辺は火熱を受け赤変している。石組部は底い側面に石を組み、底面東側の石の組んでいない部分は火熱を受けている。掘り込みは一段浅く壁に接し、底面から鉢形土器が出土した。床は段がつき、北側が低い。

出土遺物

土器（第12図４、第13図19～29、第14図30）

４は炉掘り込み底面、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帯を施すもの、刻線を葉脈状に施すもの、垂下する隆起線の両側に刺突を施すもの、撚糸文を施すものである。４は口縁部がすぼむ鉢形土器である。沈線区画の磨消帯は地文より浮き出ている。２単位の文様構成で、口縁部と胴中央

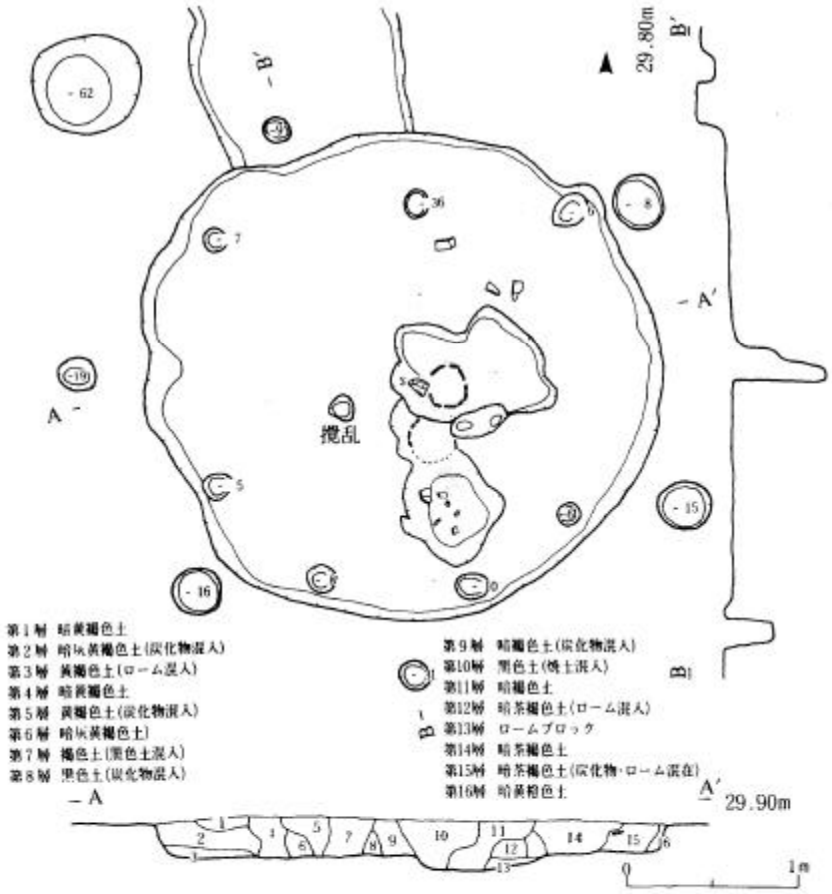
部に橋状肥手が合計4個付く。

土製品（第14図31）

再利用土製品（円盤状土製品）である。

石器（第16図3～10）

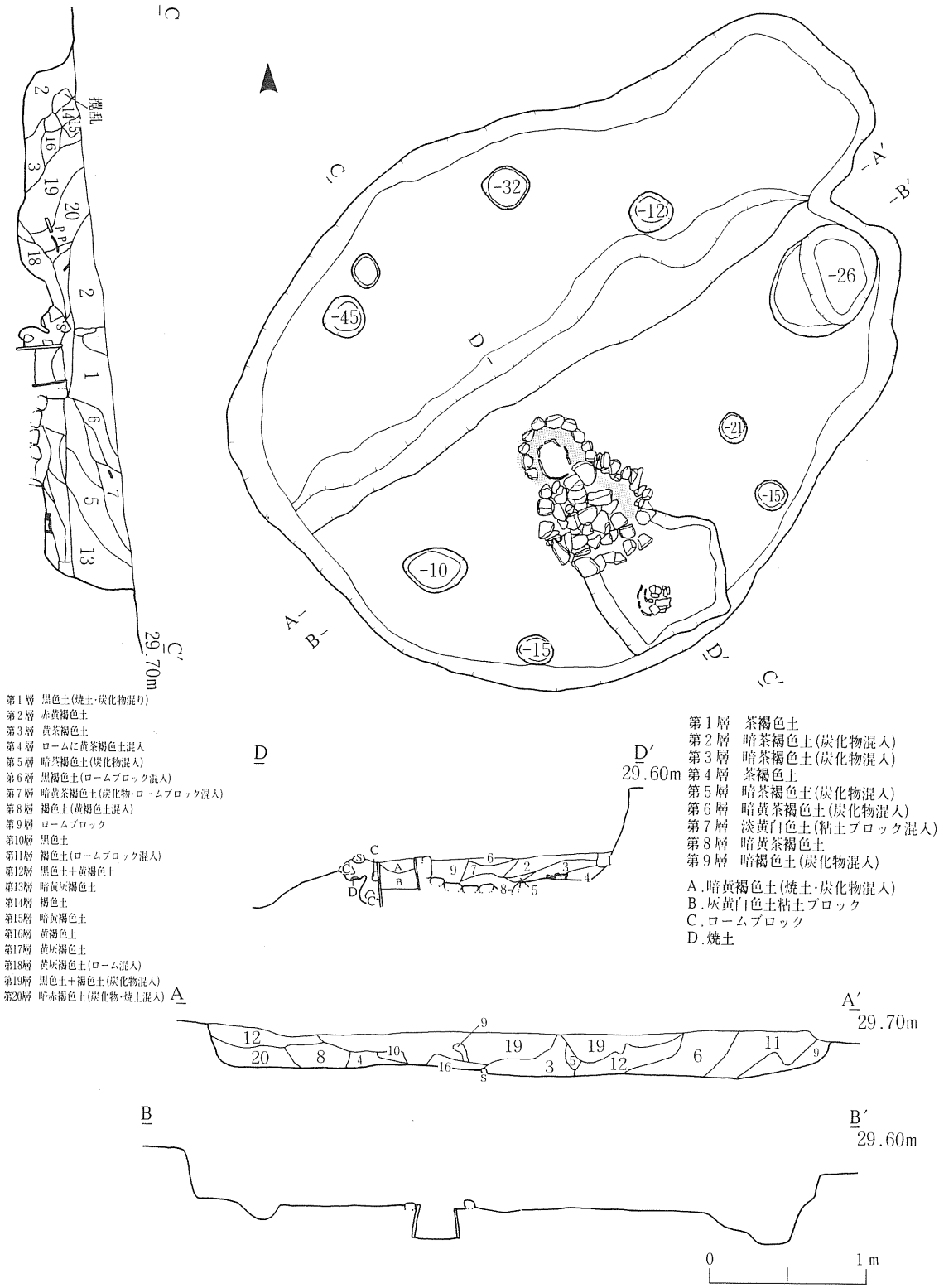
3は石錐、4・5は縦型石匙、6・7はヘラ状石器8・9は掻器状石器、10は磨製石斧である。



第7図　5号住居跡

土坑一覧表

土坑番号	規模（cm）			平面形	断面形	出土遺物
	長軸	短軸	深さ			
1	102	98	41	円形	鍋底状	第14図32～35、第17図15（縄文時代晩期）
2	101	68	39	楕円形	鍋底状	第14図36～38（縄文時代中期・晩期）
3	116	95	30	楕円形	鍋底状	第14図39～43（縄文時代晩期）
4	90	75	106	楕円形	袋状	第14図44～45
5	151	145	38	円形	鍋底状	第14図46～48（縄文時代晩期）
6	104	96	20	円形	鍋底状	
7	145	130	51	円形	袋状	第14図49～50（縄文時代晩期）
8	86	84	13	円形	鍋底状	第14図51
9	69	61	37	円形	鍋底状	第17図14、16
10	73	61	15	円形	鍋底状	第14図52
11	90	85	15	円形	鍋底状	
12	130	117	23	円形	鍋底状	第14図53、54
13	89	85	33	円形	鍋底状	第14図55、56 第19図17、18

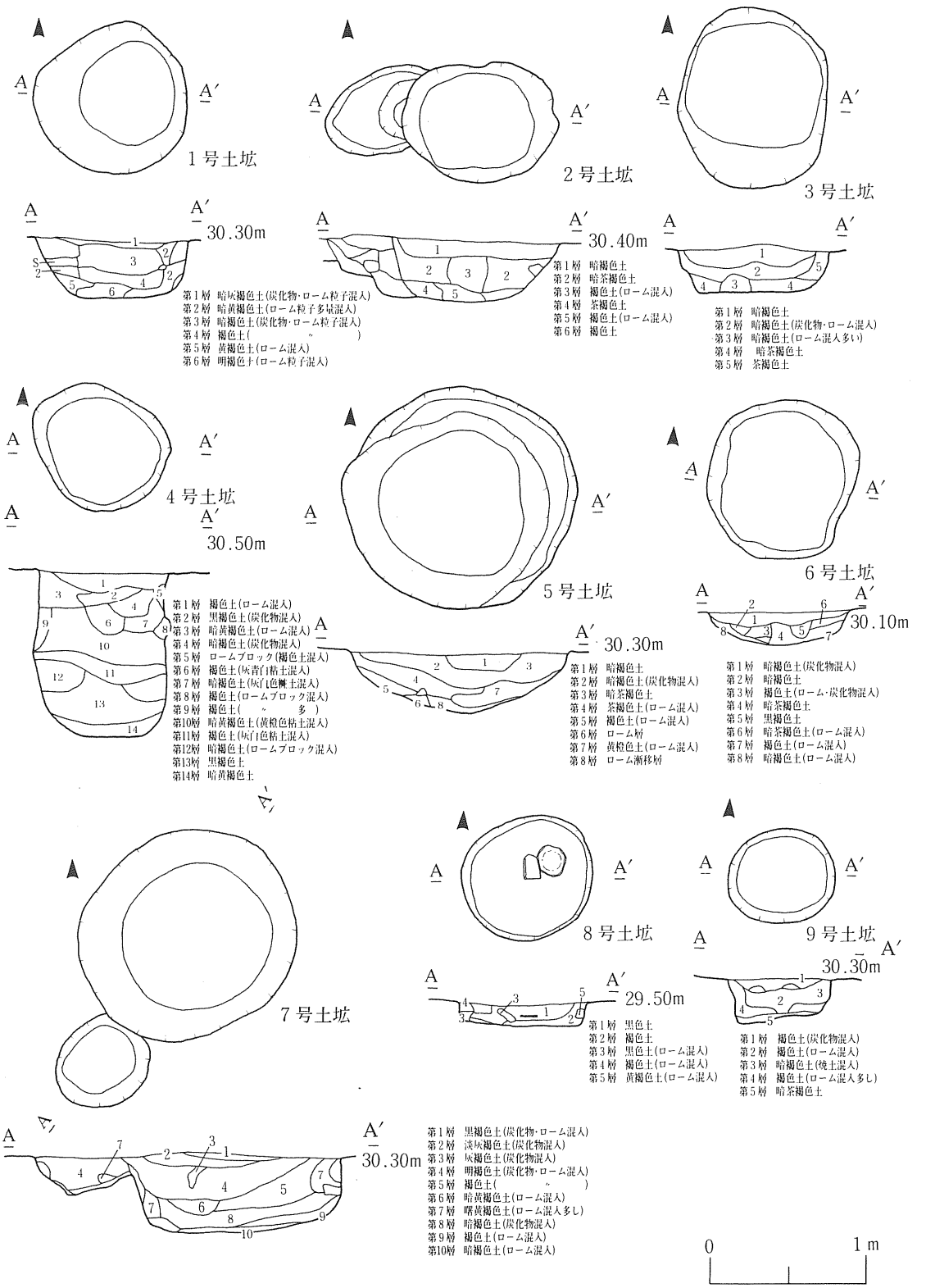


第1層　黒色土(焼土・炭化物混り)
第2層　赤黄褐色土
第3層　黄茶褐色土
第4層　ロームに黄茶褐色土混入
第5層　暗茶褐色土(炭化物混入)
第6層　黒褐色土(ロームブロック混入)
第7層　暗黄茶褐色土(炭化物・ロームブロック混入)
第8層　褐色土(黄褐色土混入)
第9層　ロームブロック
第10層　黒色土
第11層　褐色土(ロームブロック混入)
第12層　黒色土十黄褐色土
第13層　暗黄灰褐色土
第14層　褐色土
第15層　暗黄褐色土
第16層　黄褐色土
第17層　黄灰褐色土
第18層　黄灰褐色土(ローム混入)
第19層　黒色土十褐色土(炭化物混入)
第20層　暗赤褐色土(炭化物・焼土混入)

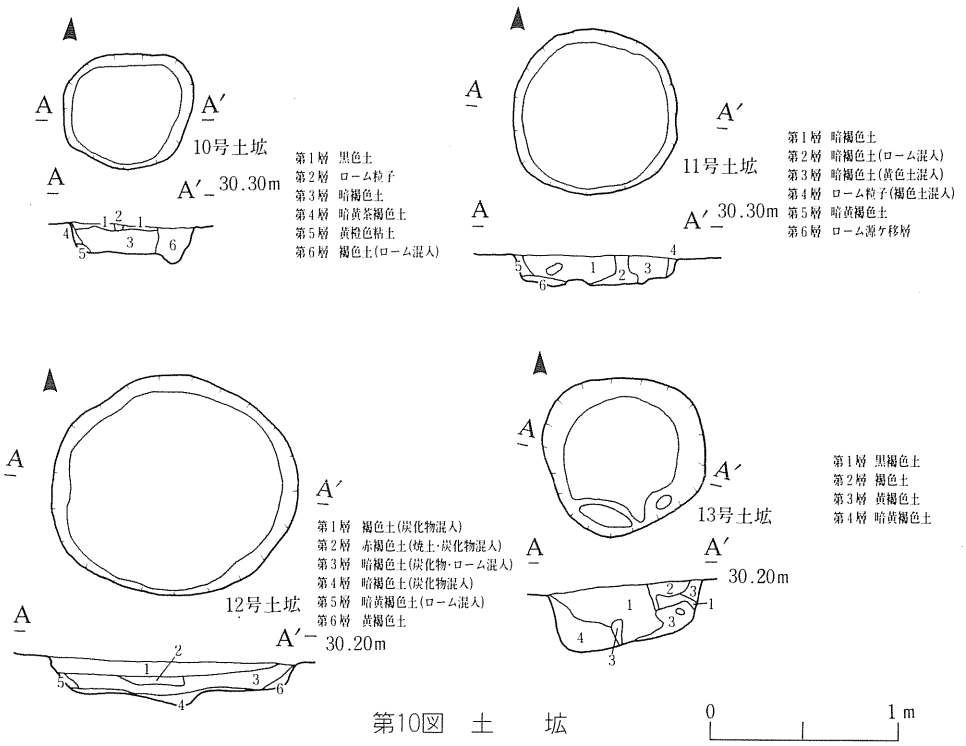
第1層　茶褐色土
第2層　暗茶褐色土(炭化物混入)
第3層　暗茶褐色土(炭化物混入)
第4層　茶褐色土
第5層　暗茶褐色土(炭化物混入)
第6層　暗黄茶褐色土(炭化物混入)
第7層　淡黄白色土(粘土ブロック混入)
第8層　暗黄茶褐色土
第9層　暗褐色土(炭化物混入)

A.暗黄褐色土(焼土・炭化物混入)
B.灰黄白色土粘土ブロック
C.ロームブロック
D.焼土

第8図　6号住居跡


1号土坑
30.30m
第1層 暗灰褐色土(炭化物・ローム粒子混入)
第2層 暗黄褐色土(ローム粒子多量混入)
第3層 暗褐色土(炭化物・ローム粒子混入)
第4層 褐色土(〃)
第5層 黄褐色土(ローム混入)
第6層 明褐色土(ローム粒子混入)
2号土坑
30.40m
第1層 暗褐色土
第2層 暗茶褐色土
第3層 褐色土(ローム混入)
第4層 茶褐色土
第5層 褐色土(ローム混入)
第6層 褐色土
3号土坑
第1層 暗褐色土
第2層 暗褐色土(炭化物・ローム混入)
第3層 暗褐色土(ローム混入多い)
第4層 暗茶褐色土
第5層 茶褐色土
4号土坑
30.50m
第1層 褐色土(ローム混入)
第2層 黒褐色土(炭化物混入)
第3層 暗黄褐色土(ローム混入)
第4層 暗褐色土(炭化物混入)
第5層 ロームブロック(褐色土混入)
第6層 褐色土(灰青白粘土混入)
第7層 暗褐色土(灰白色粘土混入)
第8層 褐色土(ロームブロック混入)
第9層 褐色土(〃 多)
第10層 暗黄褐色土(黄橙色粘土混入)
第11層 褐色土(灰白色粘土混入)
第12層 暗褐色土(ロームブロック混入)
第13層 黒褐色土
第14層 暗黄褐色土
5号土坑
30.30m
第1層 暗褐色土
第2層 暗褐色土(炭化物混入)
第3層 暗茶褐色土
第4層 茶褐色土(ローム混入)
第5層 褐色土(ローム混入)
第6層 ローム層
第7層 黄橙色土(ローム混入)
第8層 ローム漸移層
6号土坑
30.10m
第1層 暗褐色土(炭化物混入)
第2層 暗褐色土
第3層 褐色土(ローム・炭化物混入)
第4層 暗茶褐色土
第5層 黒褐色土
第6層 暗茶褐色土(ローム混入)
第7層 褐色土(ローム混入)
第8層 暗褐色土(ローム混入)
7号土坑
8号土坑
29.50m
第1層 黒色土
第2層 褐色土
第3層 黒色土(ローム混入)
第4層 褐色土(ローム混入)
第5層 黄褐色土(ローム混入)
9号土坑
30.30m
第1層 褐色土(炭化物混入)
第2層 褐色土(ローム混入)
第3層 暗褐色土(焼土混入)
第4層 褐色土(ローム混入多し)
第5層 暗茶褐色土
30.30m
第1層 黒褐色土(炭化物・ローム混入)
第2層 淡灰褐色土(炭化物混入)
第3層 灰褐色土(炭化物混入)
第4層 明褐色土(炭化物・ローム混入)
第5層 褐色土(〃)
第6層 暗黄褐色土(ローム混入)
第7層 暗黄褐色土(ローム混入多し)
第8層 暗褐色土(炭化物混入)
第9層 褐色土(ローム混入)
第10層 暗褐色土(ローム混入)
0
1m

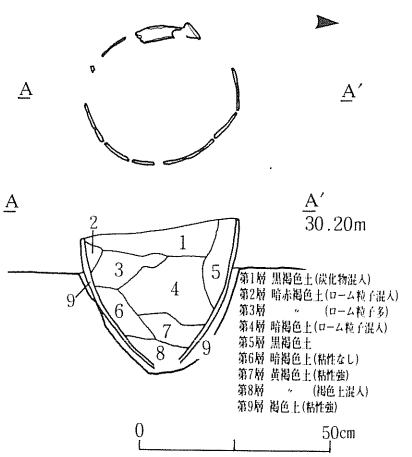
第9図 土 坑



第10図　土　　坑

土器埋設遺構（第11図）

調査区の北側、７－Ｂトレンチで検出された。掘り方は径42cm、深さ27cmの円形を呈し、擂鉢状に下部が細くなる。底面より約２cmほど上方に底部を打ち欠いた土器が、北へやや傾く状態で据えられている。この土器は口径37cm、現存高37cmを計り、地文には羽状縄文を施している。



第11図　土器埋設遺構

出土土器

遺構内、遺構外の土器について、群に大別し、類に細別して述べてみた。

１群土器

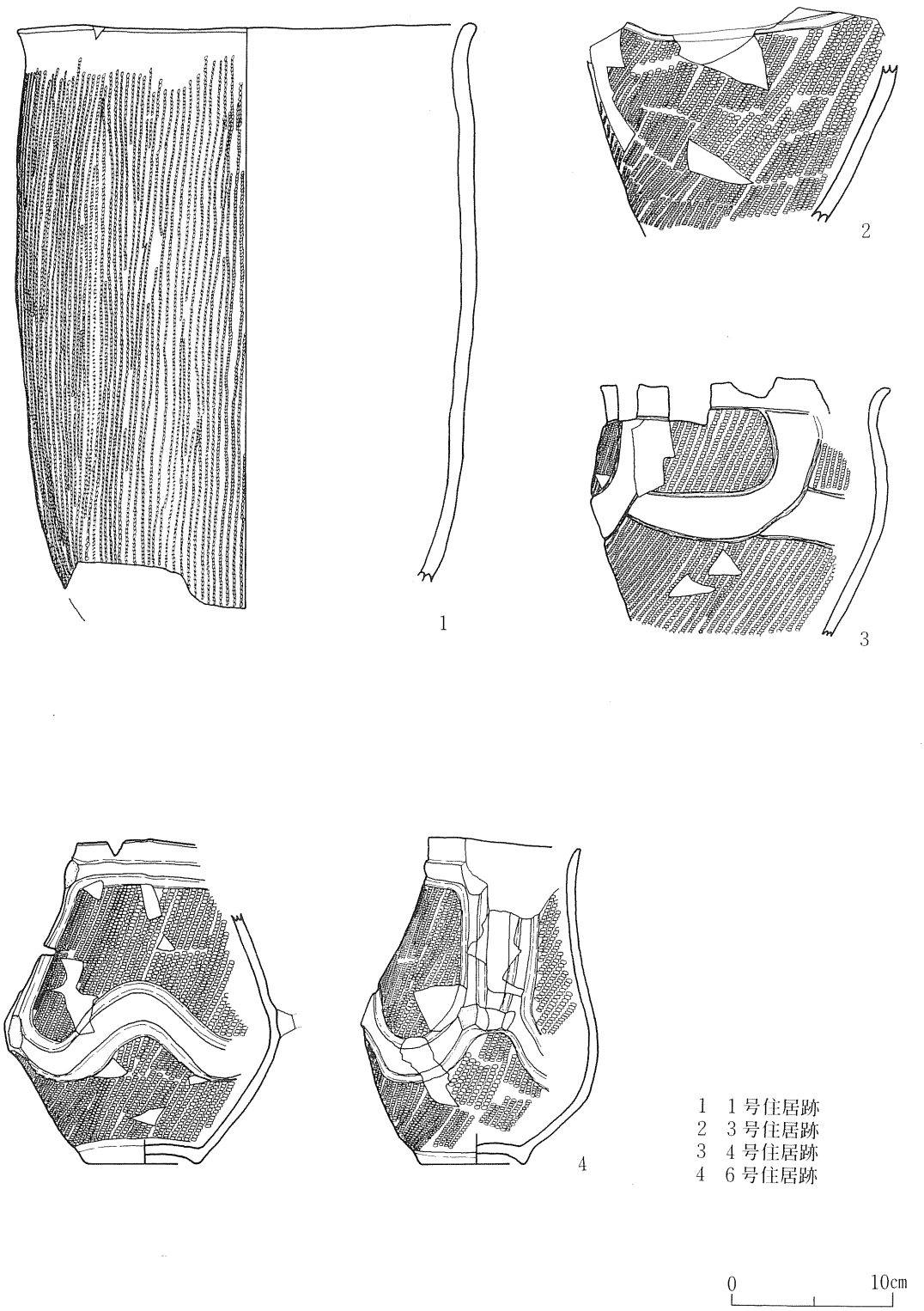
１類（第19図72・73・75）

口縁部文様帯に粘土紐を貼り付け、その隆帯及び文様帯に撚糸圧痕を施すものである。口縁部がやや外傾する深鉢形土器である。

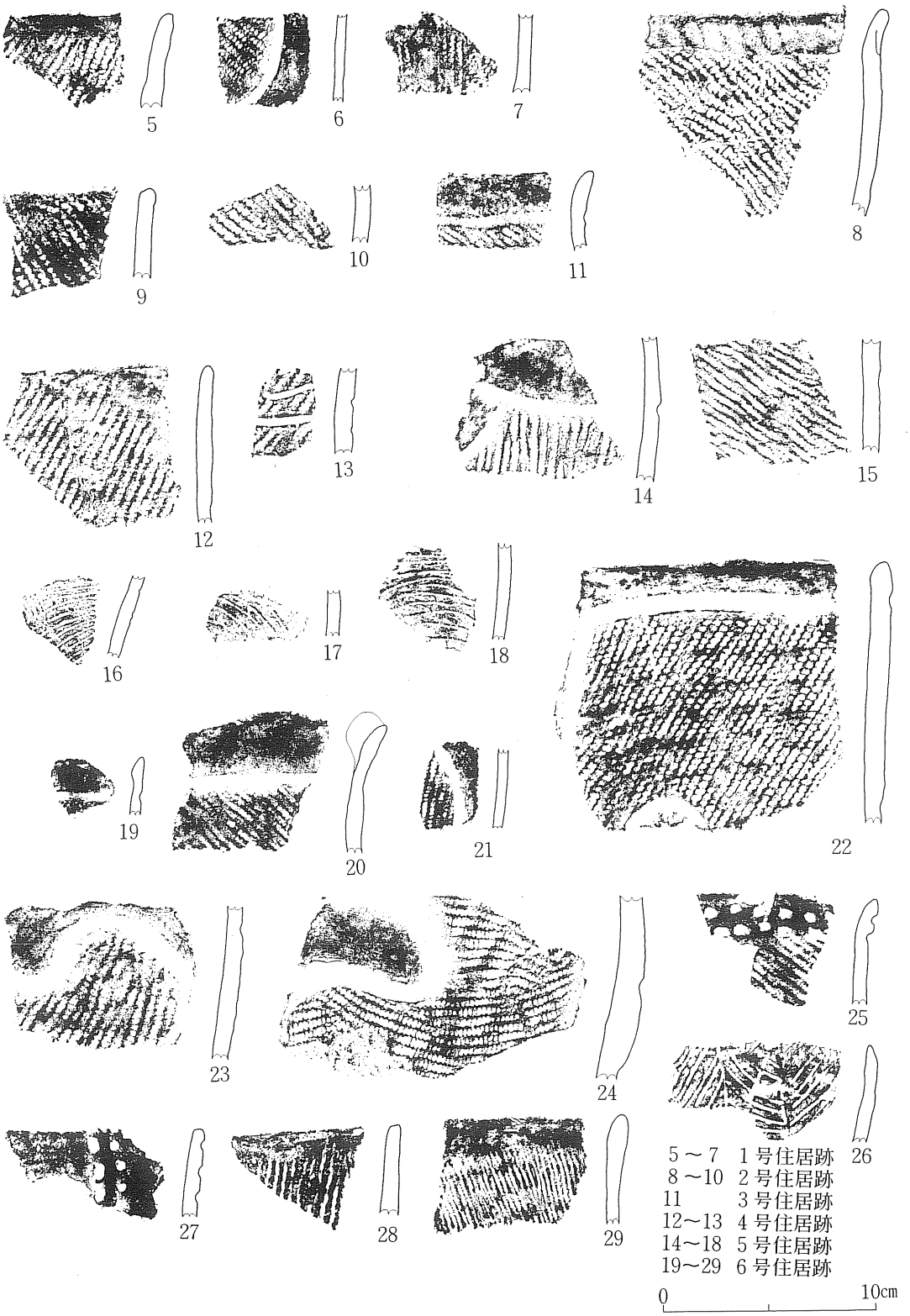
２類（第19・74）

粘土紐を貼り付けその両側を撚糸圧痕で調整するものである。文様は渦巻状をなし、器形は鉢形である。

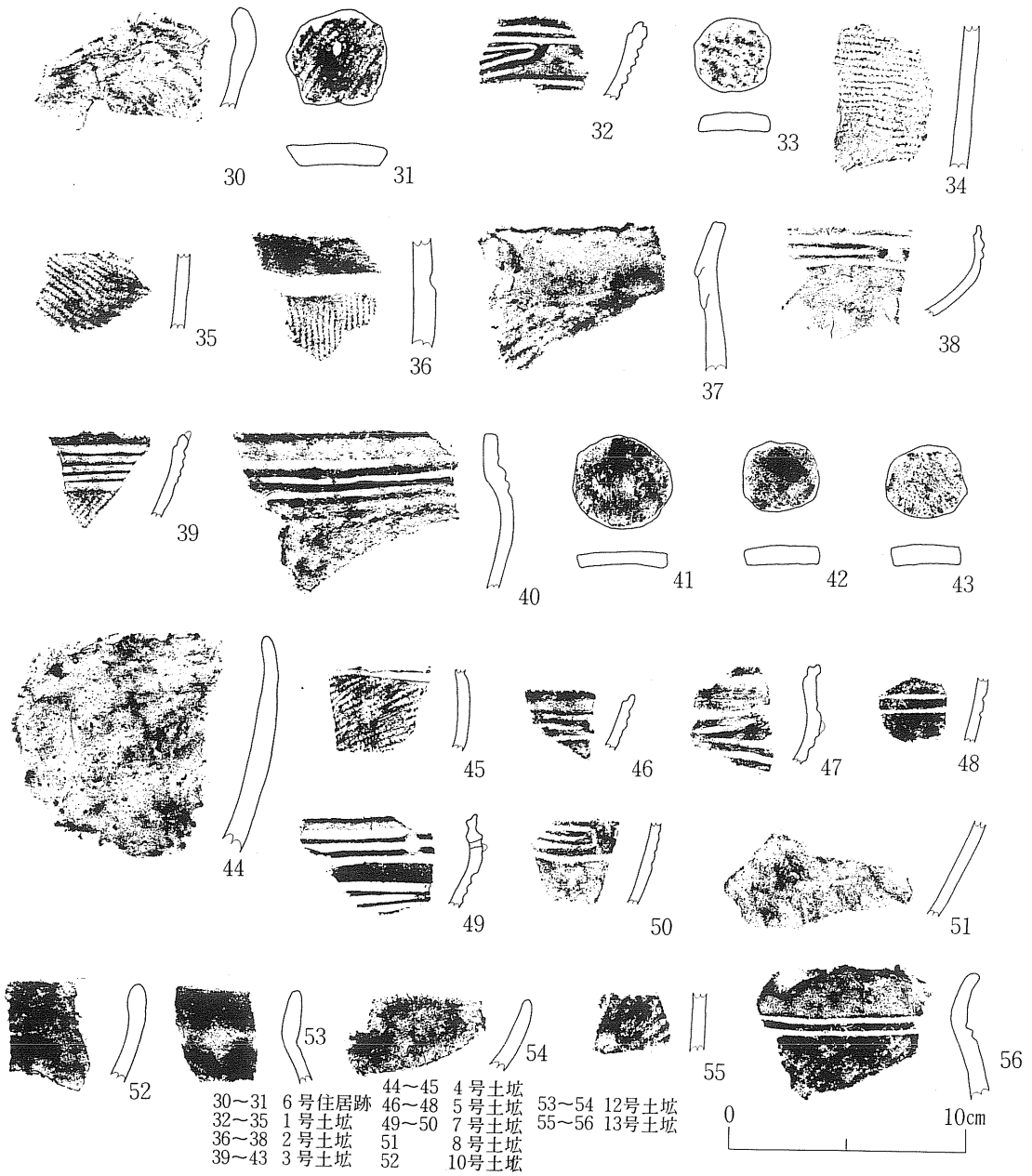
３類（第13図６・11・14・20～25・28・29、第14図36、第19図80～84）



第12図　遺構内出土土器



第13図　遺構内出土土器



第14図　遺構内出土土器

沈線区画の磨消帯を曲線的に施すものである。磨消帯が地文部より浮き出し橋状把手の付くもの刺穴を加飾するものもある。器形は深鉢形・鉢形である。

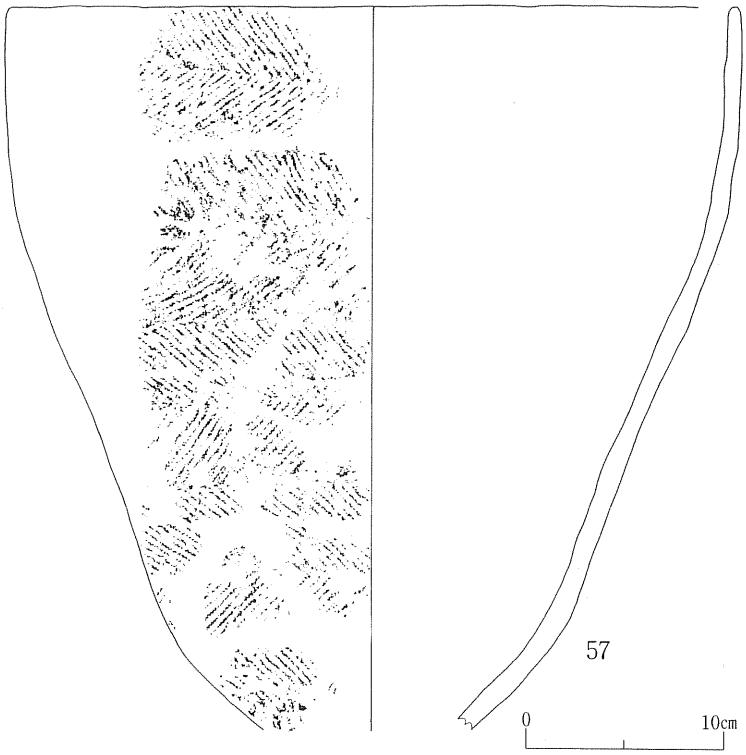
4類（第19図87～89）

半截竹管状工具内面による半隆起線を、直線・格子目状に施すものである。器形は鉢形である。

5類（第18図58・59、第19図70・71）

本群で上記以外のものを一括した。58は4個の大きな突起をもつ鉢形土器である。文様は隆起線、

半隆起線、刺突で構成される。隆起線は刺突を施し、突起頂部を結ぶ中間に瘤が付く。半隆起線は突起頂部と突起中間の瘤より垂下するもので、途中に円形文を施したり刺突を施す。59は4個の突起をもつ鉢形土器である。頸部隆帯に刺突、突起頂部より垂下する隆帯に撚糸圧痕を施す。突起頂部を連絡するように、また、頸部隆帯の上方に半隆起線が施される。これらは地文施文後に行っている。70は小突起部で、表裏面に粘土紐を貼り付け、その間と口唇部には撚糸圧痕を施す。71は口縁部隆起線間に、刻線によるくの字状、弧状・曲線文を施すものである。



第15図　遺構内出土土器

2群土器（第18図60、第19図90～95）

2～3条1単位の刻線及び沈線を施すものである。文様は直線・曲線的に施され、器形は鉢形である。

3群土器

1類（第18図62）

羊歯状文、入組文の施される注口土器で、かなり大形である。

2類（第20図96～99）

刻目文、平行沈線の施されるものである。浅鉢型・鉢形土器などがある。

3類（第20図100～107）

2～3条の平行沈線を施すもので、口唇部に刻目を施すもの、2個1対の小突起をもつものがある。浅鉢形・鉢形土器などがある。

4類（第14図38～40、45～50、第18図61、65～68、第20図108～126）

工字文の施されるものである。口唇部に2個1対の小突起をもつもの、口縁部の沈線間に2個1対の粘土粒をもつものがある。浅鉢型・鉢形・壺形土器などがある。

5類（第14図32、第18図63、第20図127～136）

変形工字文の施されるものである。口唇部に突起、または２個１対の小突起、口縁部に２個１対の粘土粒をもつものがある。浅鉢形・鉢形・台付鉢形土器などがある。

６類（第21図137～145）

口唇部に縄文を残し、口縁部に２～３条の平行沈線または磨かれて無文帯となるものである。口唇部に突起をもつもの、刻みを施すものがある。器形は鉢形である。

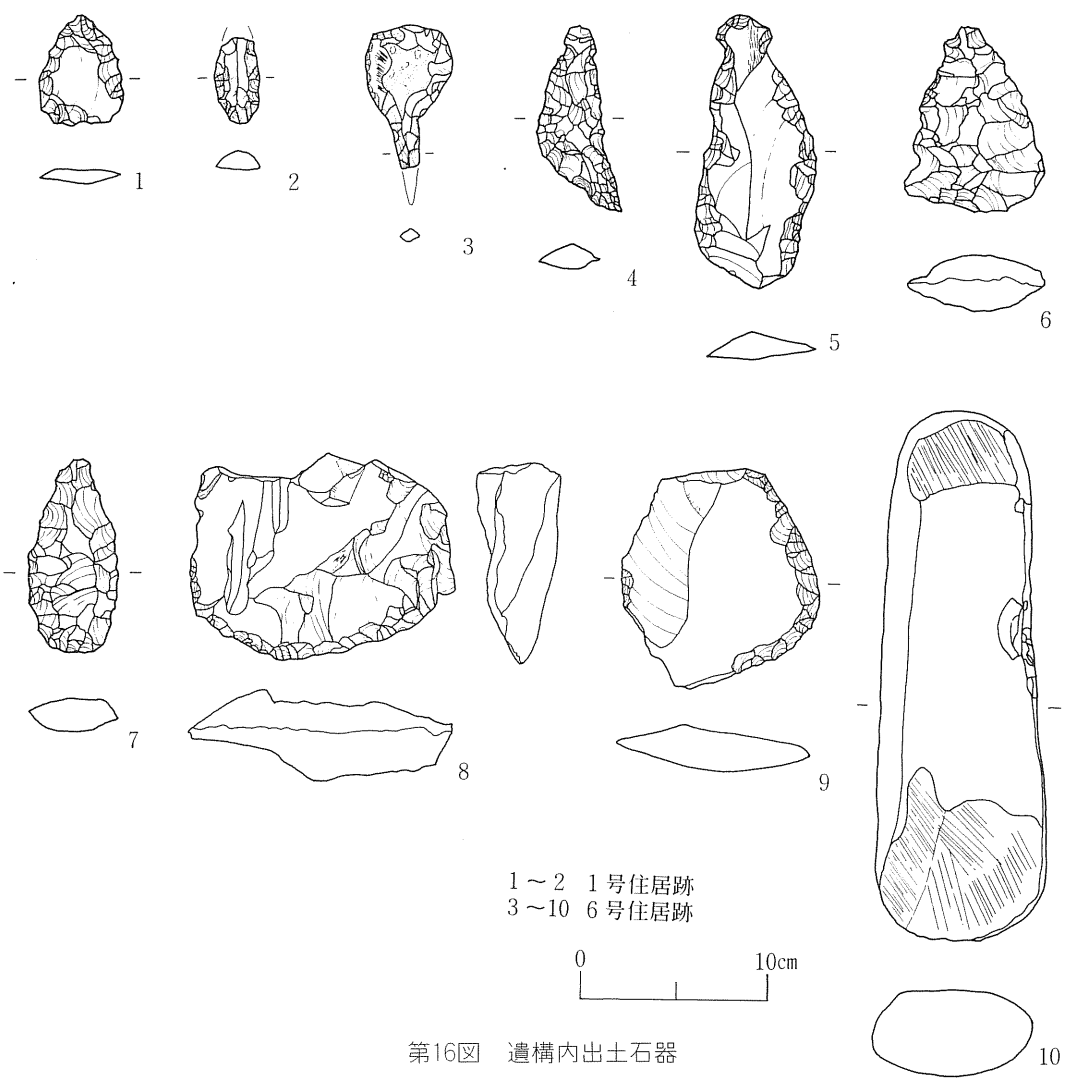
４群土器

上記以外のもの。また地文のみのものを一括した。

１類（第15図57、第18図69）

57はＬＲ・ＲＬ縄文原体を使用した羽状縄文である。口径37cmを計る。69は単軸絡条体回転文で口縁部付近は弱くナデている。

２類（第13図16～18、26）



第16図　遺構内出土石器

刻線を施したもので、16～18は数本を弧状に、26は葉脈状に施す。

遺構外出土遺物

土製品（第21図146～153）

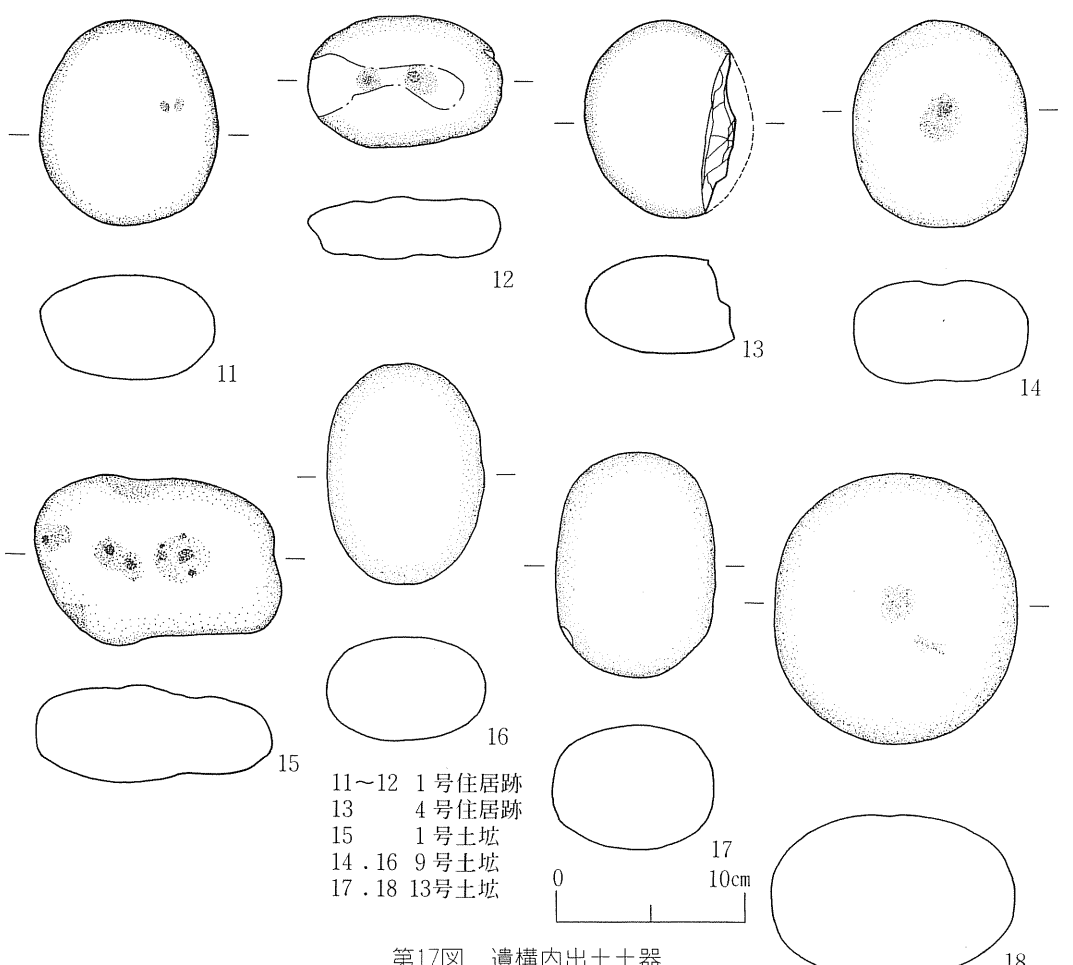
146～152は再利用土製品（円盤状土製品）である。153は土偶脚部である。

石器・石製品（第22～25図）

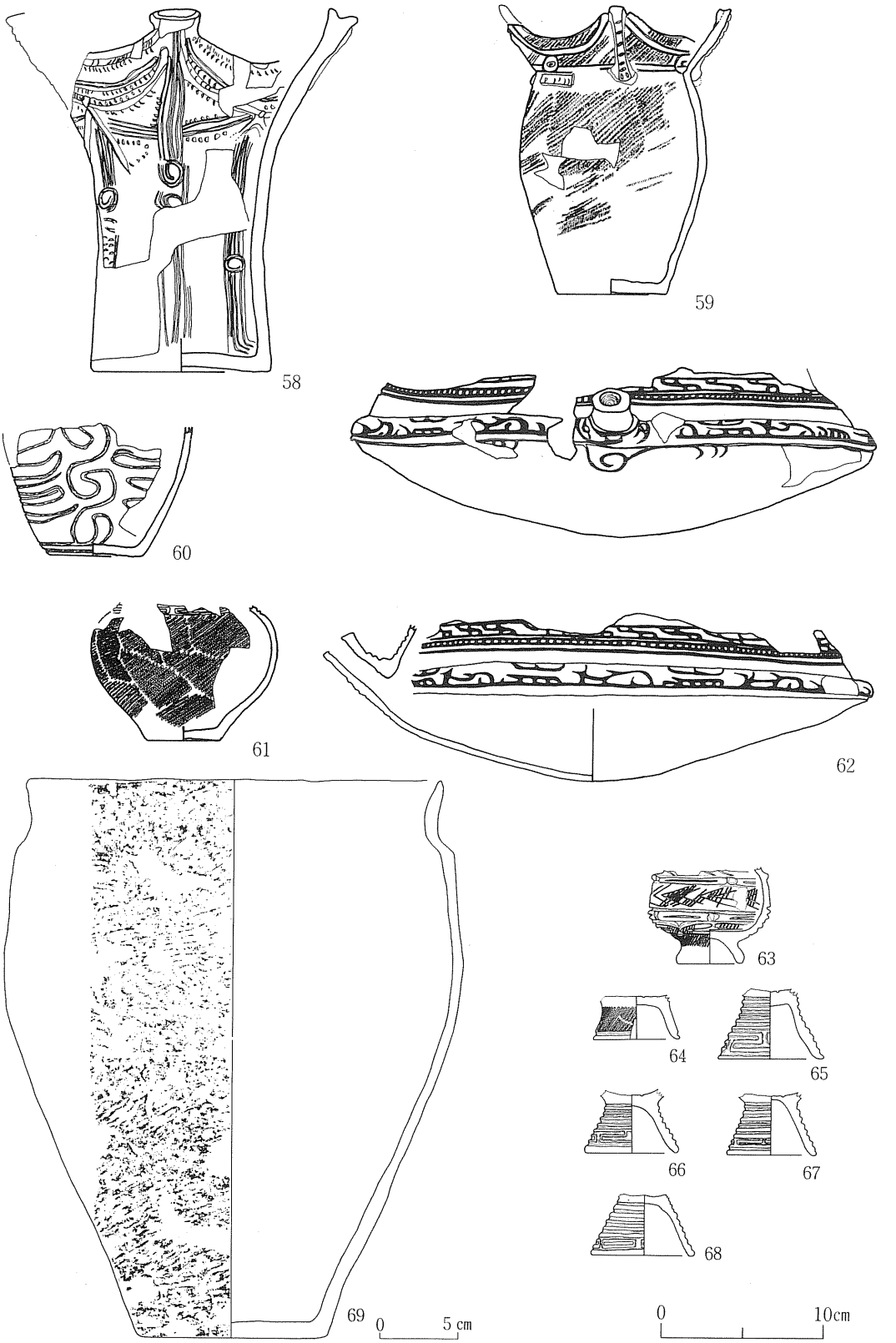
19・22は有茎石鏃、24は無茎石鏃である。25は有舌尖頭器で先端部が欠損している。26・27は縦型石匙、28・29は横型石匙である。30～39はヘラ状石器である。40～43は掻器である。44～46は削器である。47は石疱丁状の石器で、両面から押圧剝離を施して刃を作っている。48は打製石斧である。49～53は磨製石斧で、49はいわゆる乳棒状石斧で、断面が楕円形をなし、頭部が細くなっている、54は石皿、55～60はくぼみ石、61～73は磨石。74は石錘で両端を欠いて作り出している。75は湾曲した自然石の一端に擦切りを施した石製品である。岩偶もしくは装飾品であろうか。

その他の遺物（第25図76）

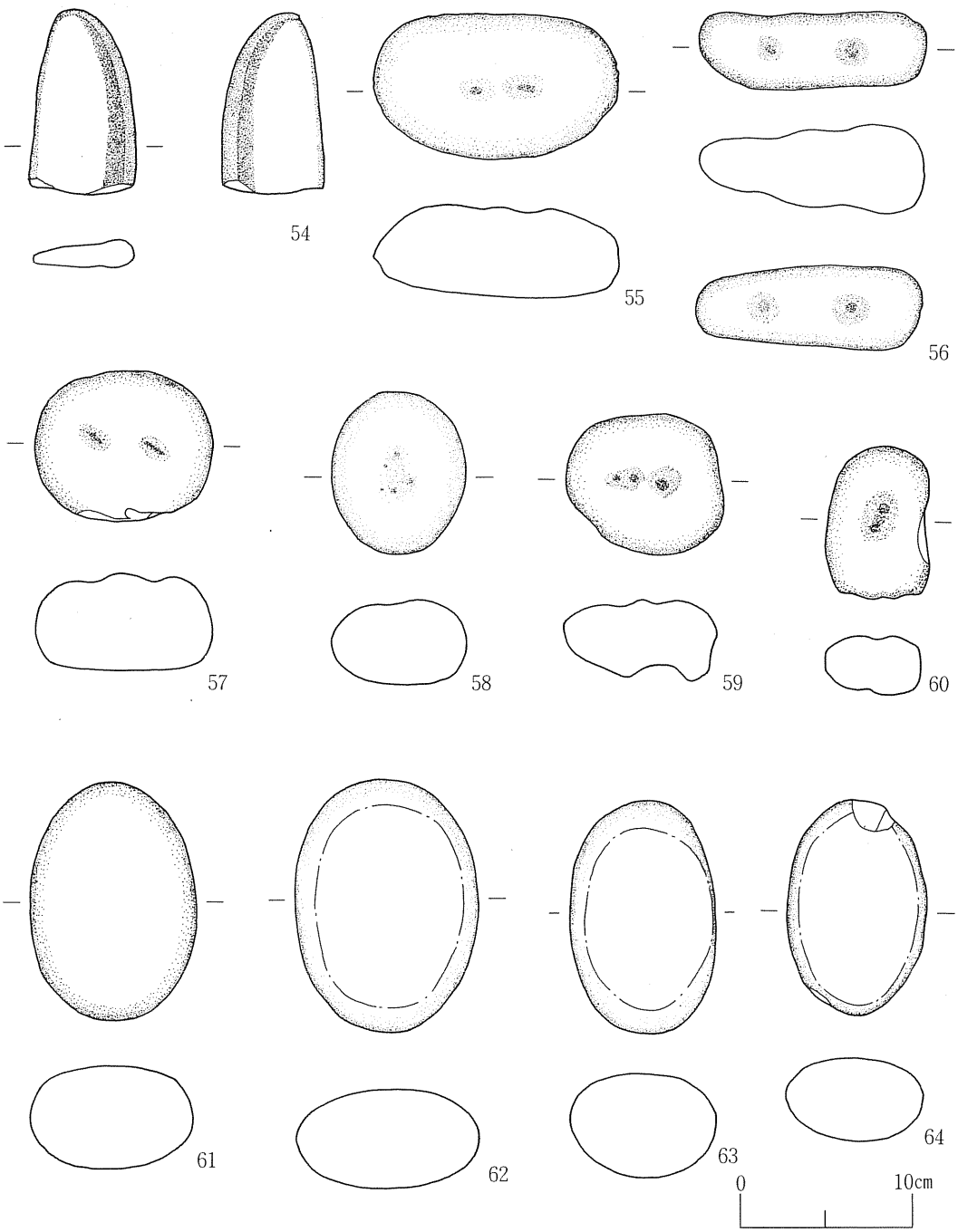
76は偏平な礫に刻線がみられる。一端が欠けている。



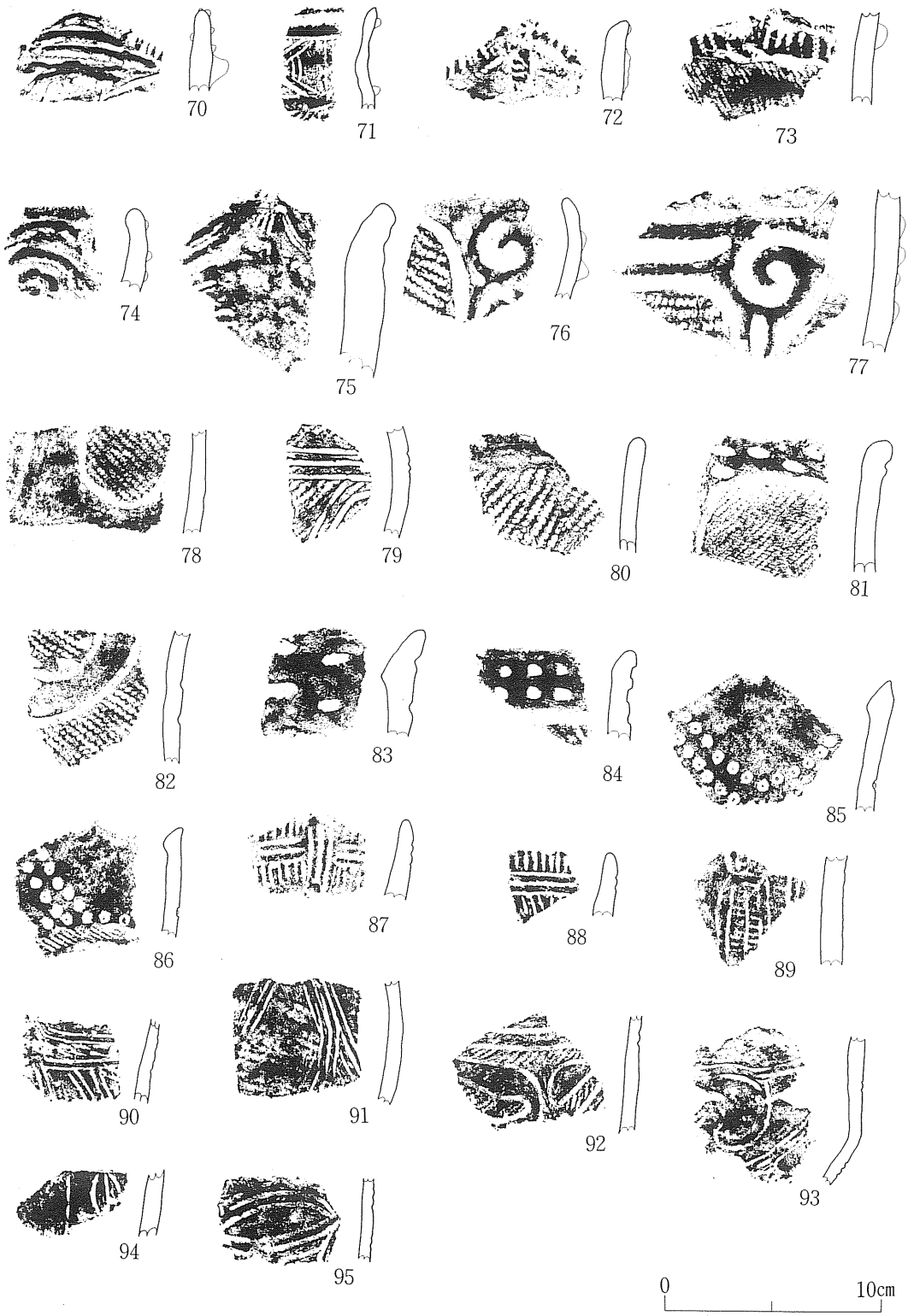
第17図　遺構内出土土器



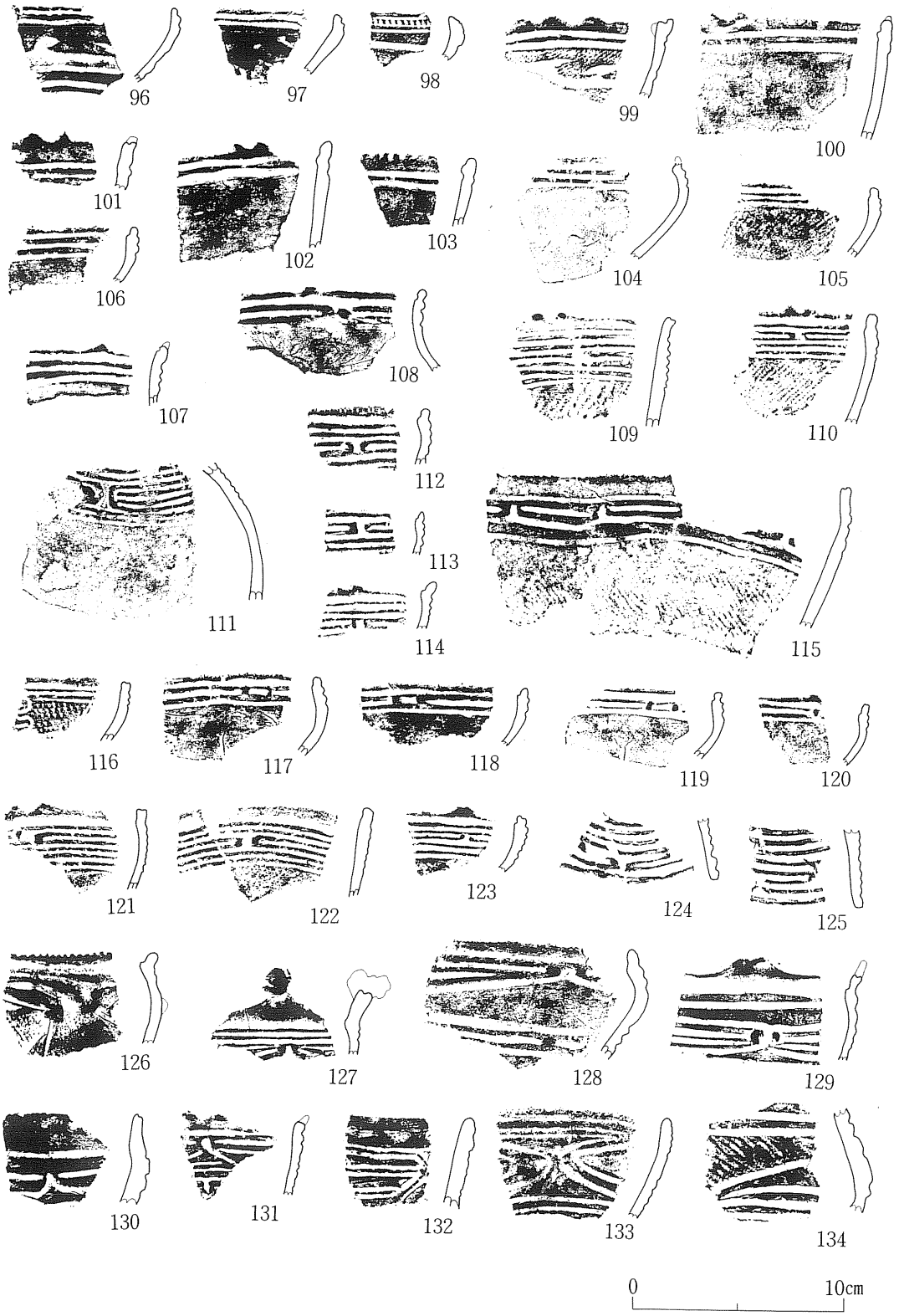
第18図　遺構外出土土器



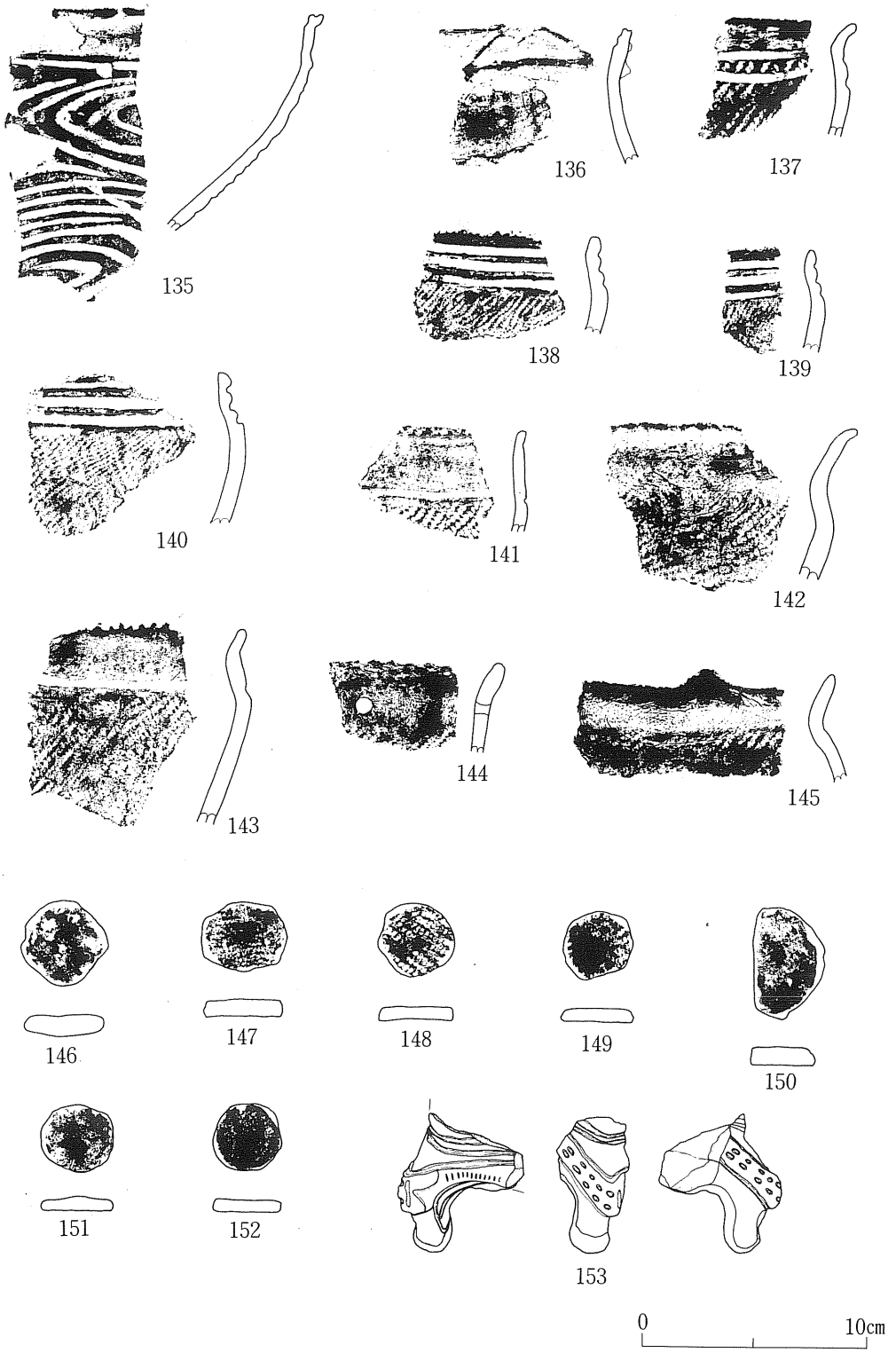
第24図　遺構外出土石器



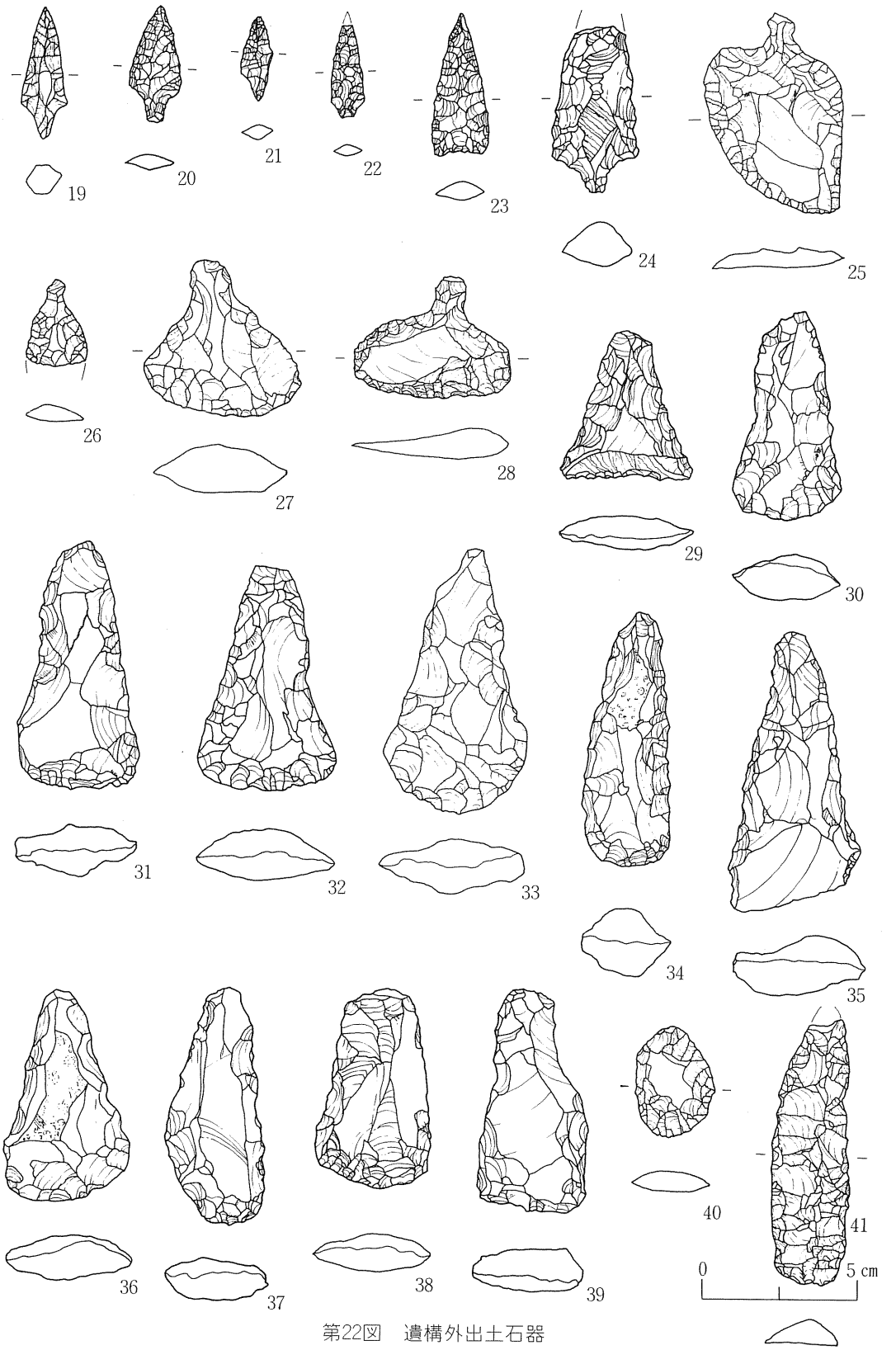
第19図　遺構外出土土器



第20図　遺構外出土土器

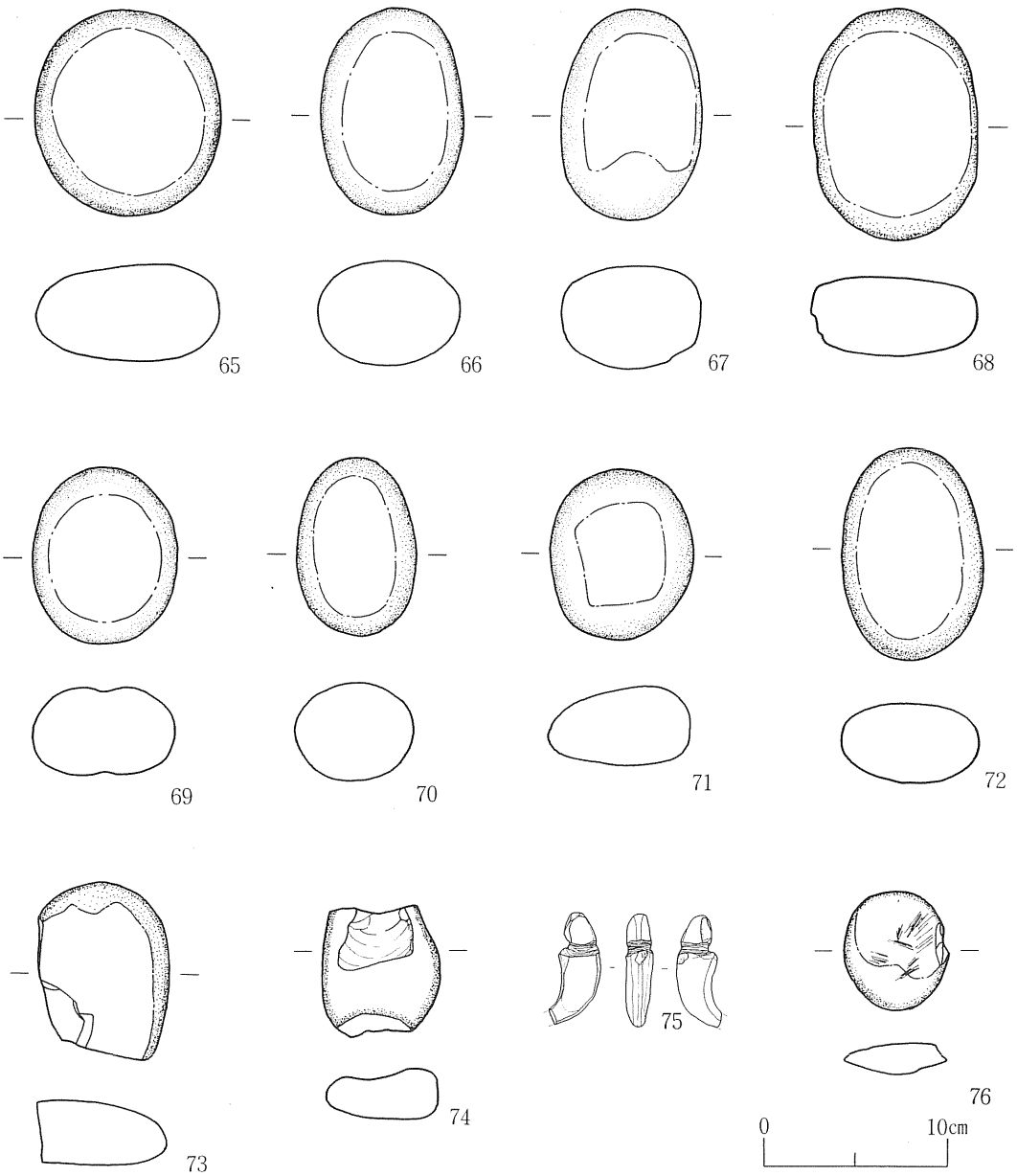


第21図　遺構外出土土器



第22図　遺構外出土石器

第23図　遺構外出土石器



第25図　遺構外出土石器・石製品

まとめ

遺構について

本遺跡で検出された遺構は既述の通り，住居跡６軒、土坑13基、土器埋設遺構１基である。住居跡は、南面する舌状台地の北西側縁部に沿い南北に検出された。出土土器から大木10式期に位置づけられるものである。住居跡間に重複関係はなく、また炉埋設土器からも住居間相互の関係は不明である。

炉には次の３形態がみられる。①土器埋設炉－１・３・４・５号住居跡　②石組炉－２号住居跡　③土器埋設複式炉－６号住居跡。１・３・５号住居跡炉周辺に検出された礫は、火熱を受けたものも含まれており、石組の可能性をうかがわせる。

本遺跡検出の住居跡における主柱穴は、１号住居跡を除き、いずれもしっかりした柱穴は検出されていない。しかし、壁外に柱穴を構築することが、本遺跡における住居跡の特徴としてとらえることができる。

土器について

土器は大きく１群土器、２群土器、３群土器、４群土器に分類して報告した。

１群１類は口縁部文様帯に隆帯および撚糸圧痕が施され、山形口縁をもつことなどから円筒上層ａ式に比定されるものである。２類はキャリパー形を呈する土器で、口縁部の隆帯に沿って撚糸圧痕を施すもので、大木８ａ式に比定されるものである。３類は大木10式に比定されるものである。４類は半隆起線文を用い、平行沈線状の線をあらわす土器群で、北陸地方の古串田新式に属するものと考えられ、中期後葉に比定されるものである。５類は前期末葉～中期前葉の土器である。

２群は十腰内Ⅰ式に比定される土器群である。

３群１類は羊歯状文を主体とするもので、大洞ＢＣ式に比定される。２類は大洞C_1式に比定される。３類は大洞C_2式に比定される。４・５類は工字文・入組文が主体をなし、大洞Ａ式に比定される。

以上を整理すると次のようになる。

１群１類—円筒上層ａ式

　　２類—大木８ａ式

　　３類—中期末葉

　　４類—中期後葉（北陸系）

　　５類—前期末葉～中期前葉

２群———十腰内Ⅰ式

３群１類—大洞ＢＣ式

　　２類—大洞C_1式

　　３類—大洞C_2式

4・5類--大洞A式

参　考　文　献

秋田市教育委員会：「小阿地下堤遺跡坂ノ上遺跡発掘調査報告書」　1976

秋田県教育委員会：「梨ノ木塚遺跡発掘調査報告書」　1979

芹沢長介：坪井清足他：「縄文土器大成第2巻中期」　1981

丹羽茂：「大木式土器」縄文文化の研究4縄文土器Ⅱ　1981

秋田市教育委員会：「下堤D遺跡発掘調査報告書」　1982

目黒吉明：「住居の炉」　縄文文化の研究8社会・文化　1982

秋田市教育委員会：「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書　下堤G遺跡　野畑遺跡　湯ノ沢B遺跡」　1983

遺跡北側全景（東→）

遺跡南側全景（東→）

図版 1

1 号住居跡（南→）

2 号住居跡（西→）

図版 2

3 号住居跡（南→）

4 号住居跡（南→）

図版 3